

---

# 剣と勇気を、与えてください

羽場速雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣と勇気を、与えてください

### 【Nコード】

N8748F

### 【作者名】

羽場速雄

### 【あらすじ】

ファルアリア王国の片田舎にある街道町サイレア。旅人を相手に食堂を営む一家に生まれたレイル。フンフルは、豪雨の翌日にギョーム川へ釣りに出かけ、川縁に倒れ伏す1人の美しい女性を目にすることとなる。彼女、ユイリス。レンフィアとの運命的な出会いが、少年を新たな道へと導く。

雲一つない青空がどこまでも広がっている。全ての息吹に等しく恵みを与える太陽だけが天空を支配していた。

照りつける暖かい日差しをかざした手で遮りながら、短い袖の短衣にズボン姿のレイル「フンフルは緑一面に覆われた丘を越え、釣り竿を肩に担いだまま栗毛色の短い髪を風になびかせて斜面を一気に駆け下る。年齢14歳を迎えたものの、まだまだやんちゃなところは抜けきっておらず、そんな彼の活動的な性格を如実に表しているかのようだった。

昨日までの豪雨が嘘のような天気だが、彼の眼前に広がる丘の下を横切る形で流動している川は自然の猛威による爪痕を如実に残していた。

伝え聞く、西の国々を横切る大河口アヌールの壮大さとは比べものにはならないだろうが、それでも普段より2倍近い川幅となったサイレア近郊を流れるギョーム川を見るとあの豪雨がいかに壮絶なものだったか窺い知ることができる。普段ならば投げた石が対岸に届く程度なのだが、今同じことをしてもまったく及ぶべくもないだろう。

とはいえ、川に来た目的は石を投げて遊ぶなどという稚拙なことなどではない。肩に担いだ獲物がそれを表している。

本来なら豪雨の後などは川が荒れ濁っているため、魚たちも泳ぎ回らずじっとしており、釣りをするには適さない。

しかし、彼は知っていた。このような荒れた時こそ縦横無尽に泳ぎ回る魚がいることを。それが、この川の名を冠したギョームという魚であるということも。ここぞとばかりに喜び勇んで出かけたのはギョームを釣るためであり、今日ばかりは恒例の『特訓』も休むことにしたのだった。

「この辺りでいいや。ようし、釣るぞ」

竹から作った竿先に括りつけた木綿糸の釣り糸から垂れる釣り針を勢いよく放つ。否、放とうとした。

ところが、レイルの手は釣り針を放つことはなかった。彼の視線は川べりのある一点に凝縮されていたのだから。

それは、本来ならばそのようなところにはありえない光景。

濡れているものの暖かさどこか優しさを感じさせる亜麻色の髪長い髪。対照的に白磁器のように透き通るようなうなじ。年季が入っているものの、身にまとった小奇麗な薄茶色の旅人が着るドレスは見るものに清潔感を感じさせるだろうし、濡れそぼった衣装のせいで浮き出ってしまった身体のラインはほっそりと華奢で、あたかもよくできた人形のようなだった。唯一、右手にしっかりと握られた長い細いこげ茶色の無骨なトランクケースが清廉さを想起させる彼女とは対極の存在であったが。

レイルの灰色の瞳には、川べりに打ち上げられた1人の若い女性の姿が映りこんでいたのである。彼女はうつぶせに倒れ、身じろぎ一つしなかった。

呆氣にとられ、反射的に釣竿と釣ったギョームを入れるために持ってきた木桶を取り落とす。大地に転がった木桶は乾いた音を立て、呆然としていたレイルの意識を逆に呼び戻した。

「し、死んでる、のか？」

死体を見るのは初めてではない。決して何度も見たい代物でもなかったが、今日の前で倒れている女性はかつて見た死体とは似て異なるものだった。その肌艶は生きているようであつたし、死体の身体が動くはずがない。

「い、息してる!？」

そう、動くはずがないのだ。彼女は死体ではなかった。呼吸をしているために、わずかながら肩が上下している。レイルは躊躇しつつも一大決心をし、恐る恐る女性に近づいた。

腰を屈め、そっと顔を覗き込む。その間にも反応は一切ない。

思い切つてしゃがみ込むと、恐々ながら女性の身体に手をかけ、

彼女を仰向けに抱き起こした。彼女の身体はレイルよりも大きく、抱き起こすのに相当な力があるのかもしれないと思っていたが、それはまったくの杞憂であり、彼女の身体は絹糸のように軽かった。

その身体の軽さに驚いたのもつかの間、レイルはさらに驚く光景を見せつけられることとなる。

小ぶりで、それでいてしっかりと高さの自己主張を忘れていない整った鼻筋。首筋と同様、白く透き通るような頬がほんのりと朱色に彩られ、ほっそりとした輪郭に包み込まれている。血色を失ってはいるものの、形の整った小さな唇は小花のような可憐さまでは失くしていない。

見たことがないほど美しい女性だった。閉じられたまぶたの奥にあるまだ見ぬ瞳も、間違いないく見るものを魅了するであろうと、ようやく青年への階段を昇り始めたレイルにも疑いなく信じられるほどに。

旅人から耳にする宮廷の貴婦人たちのきらびやかな美しさとは違う、清楚で気高い無垢なる美しさだった。

我を忘れて20歳前後と思われる彼女の美貌に魅せられ、引き込まれるように見つめてしまう。もつとも、それもすぐに終わることとなるが。なぜなら、彼女の頭から、額を伝って赤い筋が流れでていたのだから。

「た、大変だ！ は、早く手当てしないと！！」

その肌とはこれ以上もなく不釣り合いなほどの鮮血を見せつけられたレイルは我を取り戻した。

最初、自分より多きこの女性を抱えては連れて行けないだろうと腰を浮かしかけたが、すぐに先ほど見た目とは裏腹に至極軽かったことを思い出し、彼はそのまま女性を両手で持ち上げようとした。

ところがだ。身体自体はやはり驚くほど軽かったのだが、持ち上げようとした最中、彼女の身体に錨がついているかのように上がらなくなった。見ると、だらりと垂れ下がった先にはあのトランクケースがあり、意識を失っているのにもかかわらず彼女の手は取っ手

をつかむことを止めていなかったのだ。

よほど大事なものが入っているのかもしれないが、今は中身を心配している暇はない。レイルは中腰になって彼女をかかえたまま、器用に取っ手の根元をつかんで彼女ごとトランクを持ち上げようと試みる。

「な、なんだこれ!？」

つい声を上げてしまう。それもそうだ。なぜなら、そのトランクケースはどれだけ力を込めてもわずかばかりも持ち上がることはなかったのだから。大地に根がはりついたかのような重さに、レイルは目を丸くする。

これほどの重さのあるトランクなど、この華奢な細腕でどのように持ち上げることができたのだろうか。だいたいが川を流されてきたと思われる現状下で、彼女とともに岸边に流れ着けたということが驚きである。普通ならば川底に沈んだまま絶対に浮かび上がりてはこないだろう。

美貌の麗人がこんな川辺で息も絶え絶えになっていることだけでも頭のなかで混乱しているのに、まったく不可解な現象が続き目を白黒させてしまう。

ただ、たった1つわかつている事実も彼は忘れていなかった。すなわち、このままでは腕のなかの女性の命が危ないということ。

レイルは思い立った。一旦女性を下に降ろすと、握り締めた取っ手から指をはがしにかかる。トランクと一緒に持つていけないのなら、ここに置いていくしかない。彼女にとって大事なものかもしれないが、命には代えられないだろう。それに、この辺りをうろつく人間はそうそういないし、なによりこれだけ重ければ容易に持つていけるなどということもないはずだ。彼女が回復したら取りに来てもらえばいい話で、今はとにかく一刻を争う。

固く握り締めた指を解くのは想像以上に困難だったが、それでもどうにか彼女からトランクを離すことに成功し、再度彼女を抱き上げる。今度は彼女の身体の軽さだけが腕の中を占めた。

とはいえ、彼の年齢で成人女性1人の、それも自分より大きい人物の身体を抱き上げるのは大変な労力を要するものだが、どうにか成し遂げられたのは普段から身体を鍛えていたことが功を奏した形だった。

が、自助努力が実を結んだ結果に喜ぶ余裕など今のレイルにあるはずもなく、一目散に小走りで村へと向うのだった。

木戸の閉じられた窓の縁に置かれたランプのほのかな灯りだけが、薄暗い室内を照らし出している。

背もたれを前にし、その上に腕を組み合わせて載せ、椅子を跨ぐようにして座りながら、レイルはベッドに横たわる女性をただただ見つめていた。ランプの灯りが薄っすらと照らす彼女の頬は相変わらず白かったが、唇には血色が戻り始めていた。頭部には包帯が巻かれており、その美貌との差が痛々しさをより強めている。

レイルが彼女を助け起して自宅のある町サイレアへと連れ帰ってから3日が経った。彼女はその間一度として意識を取り戻すこともなかった上に発熱も引き起こし、苦しそうに度々うめいていた。

ただ、今ではその状態も落ち着き、規則正しい寢息に胸を上下させている。つきっきりで看病してきたレイルは胸を撫で下ろしたものだ。

もちろん彼の功績だけではなく、まず最大の協力者は両親であり、彼らの手助けなしにはこうはいかなかった。

彼女を連れ帰った時、食堂を営むいつも気難しく頑固な父ロイド「フンフルはレイルの簡単な説明を聞いただけで客間の1つへ連れ込み、彼女を休ませたのだ。融通が利かないことが知れ渡っており、その有り様を最も見せつけられてきた息子としてはあまりの決断の早さに驚いたものだ」が、彼女を一刻も早く休ませるには願ったり叶ったりの反応だった。

また、心優しく暖かい母ミラン「フンフルがいなければ、女性相手にどう処置をすればいいかなどわからないまま右往左往するしかなかったろう。彼女が客間に運ばれると、ミランはすぐに医者を呼ぶよう指示を出し、さらに濡れた彼女の服を脱がしにかかった。もちろん、レイルとロイドを客間から叩き出してからである。

後はもう、レイル自身は右往左往しているしかなかったが、そこ



は大人たちがこれ以上もない手際のよさで事態を動かした。

ロイドが連れてきた町医者によると、頭部に裂傷を負ってはいるが外傷的には大事ないということ。ただ、体力を著しく消耗している上に、おそらくこれから発熱するであろうから予断は許されず、絶対安静で十分に休養を取らせること、と指示されていた。

命に大事はない、と決して医者が言わなかったことに脂汗を滲ませたが、だからといってレイルにどうこうできることもなく、つきつきの看病に志願するのが精一杯のことだった。

両親はそれを了承し、彼女の面倒を彼に任せてくれた。汗ばんだ肌着の着替えや温水を浸した布で体を拭いてやる等の行為はもちろんミランが行ったが。

以来、レイルは彼女が病床に伏せる客間に詰め、彼女の様子を四六時中見守ってきたのである。発熱し、苦しんでいる様を見てもなにもしてやれないという現実能耐え難いやるせなさが胸一杯を占めたが、少しでも力になればと彼は彼女の手を握り、優しくさすってやった。

もちろんそれが功を奏したわけではないだろうが、彼女の熱は徐々に下がり、今ではこうして落ち着いたのである。

後は意識を取り戻してくれるのを待つばかりだが、こればかりはまさに神のみぞ知るところだろう。小さくため息をつき、背もたれに重ねた両腕の上に顔をうずめる。いつ果てることのない状況に、さすがに疲れがきていた。ここ数日はろくな睡眠もとっていないことも疲れを加速させていた。

自然とまぶたが重くなり始め、意識が薄らいできている。だいたいが今はもう真夜中であり、本来ならばとうに眠りの世界へと入っている頃だ。

さすがにそろそろ一度仮眠を取ろうかとも思ったが、そんな意識すらもそのままどろみたい欲求に押し流されつつあった。

まぶたを閉じたい欲求いよいよ支配権を強め、心地よい夢の世界への扉が目の前に開きかけている。レイルは欲求の赴くまま、身を

委ねようとした。

声が聞こえた。

夢を見始めたのかと思った。

否、それは夢ではなかった。

「ここ、は、どこ？」

再び聞こえた声。それは夢の世界の声などではなく、紛れもなく己が鼓膜を打つ声。か細く、力はなかったが、凜然とした響きをたたえつつも可愛らしいその声は、ベッドに横たわる女性が奏でる『生命の証』であつた。

それまで睡魔に苛まれていたのが嘘のように覚醒したレイルは、慌てて身を起こして寝ぼけ眼に活を入れる。

彼女がまぶたを見開いていた。弱々しくではあるが、開かれたまぶたの奥にある瞳を真っ直ぐこちらに向けていた。

初めて見る彼女の瞳は、彼女に見えた時に感じた通り見る者を魅了する美しいものだつた。遠く澄み渡る大空を思い起こさせる空色の瞳に自分の姿が写り込んでいる光景を目にし、つい引き込まれそうになってしまうほどだ。

どう声をかけていいかわからず、言葉にならない言葉を口のなかで反芻してとまどっている、彼女は再び小さな唇を開いた。

「イリアッド、は？ デイーンも、ハンスも、いないの？ ダルジイ、は、どうしたの、かしら」

人の名前だろうか。さすがにまだ辛いのか、途切れ途切れに言葉を発している。

「こんな姿、アイシャやヒューバートが見たら、きっと、文句言うに、違いないわよね。情けない、って」

なにを言っているのかさっぱりわからなかったが、彼女の様子が契機となつて医者と言っていたことを思い出した。彼女は頭に傷を負っていたため、外傷的には酷くはないがもしかしたら目を醒ました時になんらかの障害が出るかもしれない、ということ。大抵の場合として、記憶の混乱が起こる可能性がある、とも口にしていたこ

とを脳裏に浮かべた。

「起き、なきや。ルクトテクターを、用意して、頂戴」

熱病にうなされたかのように口々に言葉を発する彼女を見守っていたが、身を起こそうとした時点でさすがに止めに入る。

「だ、駄目だよまだ寝てなくちゃ！」

「こうして、いられないわ。ああ……そう、それから、エル、エルを」

上体を起こしかけた彼女の肩を押さえ再び横にならせようとするが、起きようとする力は尋常ではなかった。これが3日3晩生死の縁を彷徨った後の力とは到底思えない。それよりも、彼女のような華奢な女性がこれほどの力を出せることが驚きだった。

まだ成人していないとはいえ、男であり日々鍛錬を重ねているレイルの腕力をもものとしめない彼女の力に完全に負けていたものの、それでも彼は必死に彼女の肩を押さえようと頑張る。

と、ぴたりと彼女の動きが止まった。上体に入っていた力もそれ以上は込められていないことがよくわかる。

突如行動を静止させた彼女の様子に、レイルは戸惑いながらもこの機会を逃さず、再びベッドへ横にならせることに成功した。

ひとまず一難去ったわけだが、亜麻色の髪 of 彼女は安寧を許してはくれなかった。今度は目を見開いたまま、まるで呪文を唱えるかのごとく同じ言葉が続けて紡ぎ出していたのだから。

「エル？ エル、エル……」

エル、という言葉にどんな意味があるのか皆目見当もつかなかったが、彼女にとってとても重要な言葉らしいことだけはわかる。気でも触れたのかとも思ったが、何度も同じ言葉を口に出している彼女の瞳に、徐々に理性の光が灯り始めていることに気づき、考えを改めた。熱病にかかった患者のものではなく、自我を持った女性の瞳がそこに現出したのだから。

「そつだ……エル、私、あの橋で……」

どうやらなにかを思い出したのか伏目がちにまぶたを細めると、

彼女はそうつぶやいた。そして、再び目を開き、空色の瞳を中腰で立ち尽くしていたこちらへと向けてきたのである。

「貴方が、助けてくれたの？」

首を傾けて真っ直ぐに見つめてくる彼女。いきなり話を振られ、ことの推移を見守っていたレイルは目を瞬かせた。

「えっ？ いや、その、ええと、ああ、そ、そうなんだけど」

彼女が落ち着いたのに併せて彼自身も落ち着いたのだが、冷静になつてみると美しい顔立ちで真っ直ぐに見つめられてしまえば、異性に興味を持ち始めた年頃の男の子としては冷静さが吹き飛んでしまふのはいた仕方ないことだった。口ごもりがちに一言返すことが精一杯なのも無理からぬことだ。

「そう、ありがとう、本当に。貴方は、命の恩人ね」

彼女はそこで初めて微笑みを浮かべた。天使の微笑みだった。少なくとも、レイルにはそう思えた。

顔を赤らめ、どうしていいかわからずに視線を泳がせていると、

彼女はそんなレイルの様子に再び微笑みつつ、名前を名乗った。

「私は、ユイリス。ユイリス＝レンフィア」

「あつ、お、俺、俺はレイル、レイル＝フュンフルだよ」

「レイル……いい名前、ね。命の恩人の名前、一生、忘れない、から」

まだ苦しさは抜けないだろうに、彼女　ユイリスは急に表情を改め、感謝の気持ちを込めてくれているであろう真摯な面持ちを寄越していた。

それがわかるだけに、伝わってくる感謝の思いについての気恥ずかしさと、そもそも感じている妙齢の女性に対する照れでレイルは反射的に踵を返してしまう。

「あつ、そ、そうだ。は、腹減ってるだろ？　3日3晩飲まず食わずじゃ参っちゃうもんな、は、ははは。な、なんか食いもん持つてくるよ。父さんと母さんにも知らせてくるから、ちゃ、ちゃんと寝てなくちゃ駄目だからな！」

ユイリスの方を振り替えずに言い散らかし、そのまま逃げ出すようにして客間から外へ出た。慌しく閉めたドアに背を預けると、動悸が激しくなった胸を落ち着かせるようにそのままずるずる床へ座り込んでしまう。

真っ暗な廊下にあたかも反抗するかのように紅く染まった頬が熱い。どうしてこんなにも胸が高鳴るのか理解できず、不可思議な感情のやり場に困ったが、それでも彼女が、ユイリスが目醒ましてくれたことは全てを吹き飛ばしてくれる。

「なんだかよくわからないけど、ユイリスが無事ならそれでいいやつて、父さんたちにも知らせない」と

深夜ではあるが、彼女が目醒ましたらすぐに知らせるようにときつく言われている。レイルは気持ちを切り替え、慌てて両親の寝室へと駆け出した

ユイリス「レンフィアの回復ぶりは皆一様驚くほどだった。3日3晩意識を失い、さらにあれほど衰弱していたのにもかかわらず、目を醒ました翌々日には普通に歩けるまでになっていたのだ。

飲まず食わずのままでもいたためもあるが、見かけによらない旺盛な食欲によって失った体力を養うことができたのも回復に寄与していたに違いないものの、彼女自身の生来持っていた生命力が大いに下地となっているのだろう。

とはいえ、しばらくの養生は絶対に必要と医者が言っていた手前もあり、レイルの両親はユイリスに対し、この地へのしばらくの逗留を申し出た。せっかく助けた手前、本当に大丈夫になるまで養生してもらわねば根本的に人のいい両親だけに納まりがつかなかったのだろう。

首に鎖でもつけかねない勢いで心配する彼らに対し、ユイリスも素直に頷きテルミト亭への逗留を受け入れるのだった。

テルミト亭とはフンフル夫妻が切り盛りする食堂で、街道筋にあるサイレアに立ち寄る旅人たちを相手に商いを営んでいた。1階を食堂にし、2階をフンフル一家が生活の場に行っている形で、ユイリスは2階の一角にある客間にしばしの居候をすることとなったのである。

大人同士で取り交わしたことだったが、もちろんレイルも彼女の逗留は願ったり叶ったりのことだった。なぜだかよくわからないが、とにかく気になる存在のユイリスがしばらくとはいえ自分の家にくてくれるとなれば嬉しくないはずがない。

回復すればするほど面立ちから疲れの色が消え、萎れかかっていた美しい花が再び精気を取り戻し明るく咲きほこるようだった。衰弱の極みにあるにもかかわらず、真摯な面持ちで御礼の言葉を口にしてくれたあの夜のユイリスを忘れはしなかったが、今の、健康美

溢れる彼女の笑顔はなにものにも変えがたいような気がしてならない。

助け出された時に来ていた旅人の服は洗濯されていたもののそれ以外に着る物がなかったため、ミランから借り受けたスカートの裾を揺らしながら隣を歩くユイリスの顔を横目でそつと見上げ彼女の整った面立ち瞳に映し出してみると、その思いは益々強くなるのだった。「あら、私の顔になにかついてる？」

気分が良さそうに穏やかな表情をしたまま前を向いて歩いていた彼女の視線が、なんの前触れもなくこちらへ向けられた。

「あつ、べ、べつになにもついてないよ。ちよつと、見たただだよ」「そうなの？ …… あ、もしかして私があんまりにも綺麗だから見とれちゃった？」

本当はまさにその通りなのだが、彼女自身は絶対にそのように思っていないに違いないのにもかかわらず、わざとらしい悪戯っぽい笑みを浮かべてこちらを覗きこんで来る。

「そんなこと、考えたこともないよ」

ちよつとした悪ふざけをしてきているのはわかっていたが、頬を膨らませてまったく関心がない様子を装う。すると、ユイリスはなにやら残念そうに口を尖らせていた。

見た目はそんなことをしそうにもないのだが、意外と子供じみた態度や振る舞いをするというユイリスの意外な面は、それはそれで面白かった。美人は得てして気位が高く気難しいと勝手に思い込んでいただけに、彼女のように自分の美しさを歯牙にもかけない存在は新鮮この上ない。

そう考えると悪ふざけをあつさり流されてしまい、残念そうにしている彼女の態度は至極笑え、照れ隠しに冷たくあしらった舌の根が乾かないうちにレイルはつい噴出してしまう。

「なにを笑っているの？」

「なんでもない。それよりほら、見えてきた」

納得いかない様子の彼女を余所に、低い下草の草原を踏み歩きな

がら先を目指す。目的地、ギョーム川だ。

青空と暖かい日差しのもと、今日こうして出張ってきているのは、ユイリスを見つけた時に彼女が手にしていたものの、持っていくことができずに置き去りにしたままだったトランクを取りに行くためだ。彼女を助け出した時以来、すっかり忘れ去ってしまったが、彼女が所在を尋ねてきたことで記憶が甦った。

ことの経緯を説明し、やもうえず放置してきたことを恐る恐る伝えると、ユイリスは嫌な顔一つせず、『私のことを助けるためだったんだもの。気にしないで』と言ってくれたのだ。

彼女の性格は段々わかってきたため叱責されることはないだろうとは思っていたが、こうも柔和な対応を取られてしまうと逆に心苦しくなるのもまた然り。よって、レイルの方からギョーム川の川縁に置いてきたトランクのもとへ案内すると買って出るのも自然な流れだった。

数日ぶりに訪れたギョーム川は、氾濫した際の荒れ模様からすっかり在りし日の姿に戻っていた。そのため拡大した川岸も元の位置へと収まり、過日ユイリスを助けた辺りも水の痕跡は少しもなかった。ただ、川の流れがあつたと思われる、大地を削り取ったような痕は残っており、ユイリスを助け出した際の記憶を呼び起こさせた。陽光の明かりに照り返すギョーム川の幻想的な美しさに見とれつつも、目的の物を探す。

もしかすると無くなってしまったのかも、と急に不安が首をもたげてきたが、危惧は霧散した。トランクはあの日同様の居住まいのまま、大地に鎮座していたのだから。

古ぼけたトランクのもとに歩み寄ると、ユイリスはスカートの裾を膝裏に綺麗に畳んでしゃがみ込んでいた。無言でトランクを見つめる彼女の視線は、先ほどまでの明るいものとは微妙に異なる。なにかを懐かしむような、それでいて悲しむような色を含んでいた。

「あのさ、ユイリス。その中身って、なにが入ってるんだい？ えらく重くて、俺持ち上げることすらできなかったから、さ」



トランクの表面を撫でつけるように手のひらを置いたまま、思い出に浸るかのように身動き一つしなくなったユイリスに、レイルは手持ち無沙汰も相まってそれとなく尋ねてみる。

するとユイリスは、ゆっくりとこちらを見上げ、困ったような微笑を浮かべ、伏目勝ちに視線を外した。それだけだった。そこには精一杯の気遣いと御礼の気持ちと、明確な『拒絶』が込められていた。思えば彼女の口からいまだその身の上は聞かされていなかった。

ロイドとミランが彼女と話している時にこっそり聞き耳を立てたのだが、西方から来たこと、諸国の様々な文化や伝統を見るために旅をしていること、そして旅の最中の嵐に見舞われて鉄砲水に飲み込まれてしまった末にギョーム川の川岸へ打ち上げられてしまったことしかわからなかったし、彼女もそれ以上のことは話していなかった。

聞き耳をたてていたことはその後すぐに両親にもユイリスにも発覚してしまい、引つ込みがなくなつたために思い切つて彼女に身の上を尋ねてみたのだが、先ほどと同様の複雑な微笑でかわされてしまった。なにより、両親がそれ以上の追求を許さなかった。人それぞれ、聞かれたくないこと触れられたくないこともある、と窘められて。

6歳までおねしょをしていたことをお前も誰にも知られたくないだろうと、自らの汚点を例に挙げられたのには辟易したが、両親が言いたいこともよくわかつたのでそれ以降はユイリスに過去を聞くようなことはしなかった。

しなかったのだが、つい口が滑って質問してしまった。鉄砲水に飲み込まれても決して離さなかったトランクである。いわくつきなのは間違いなく、彼女の過去がつまんでいると言っても過言はないに違いない。そこまで意識することができずに口にしてしまったのは明らかに失言だった。

「ごめん。なんか俺、気が回らなくて」

ばつが悪くなり、素直に謝る。すると、ユイリスは静かに首を横

に振った。

「気にしないで。なんにも言わない私がいけないのだから。ごめんなさいね、命の恩人を前にしているのに」

「いや、そ、そんなことないよ。ほら、父さんたちも言ってただろ？ 『人それぞれ、聞かれたくないこともある』 ってさ。だからユイリスこそ謝ることなんてないんだ」

両手を振って慌てて彼女の言葉を遮る。一度彼女の花咲く微笑を見てしまうと、思いつめたような表情は見せられるでこちらが辛くなってしまう。言葉と身振りで彼女の気持ちを盛り立てると、ユイリスは顔を上げ、上目遣いに『あの微笑み』を浮かべていた。

「ありがとう、レイル。優しいのね」

昔を思い出したのか、ユイリスの瞳は心なしか薄っすらと涙に濡れているようだった。

それはもちろん気のせいかもしれないが、なんとも言えない眼差しで見つめられた上に感謝の言葉を投げかければ、大人の女性への応対などに慣れていないレイルがどぎまぎしてしまっても無理からぬことだった。

言葉を失い、顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせてしまう。なんだかつい先日体験したような気がしたが、思い出している余裕などなく照れ隠しに視線を外すのが精一杯だった。

すると、しばし間を置いた後、ゆっくりと言葉を紡ぎ始めるユイリス。

「……このトランクにはね、私の過去とともに、私が背負った『業』がつまっているの。一生忘れられない、忘れてはならない『業』が」  
静かな語りだった。ユイリスが過ごしてきた過去は、きっと彼女の容姿とは正反対の、決して平坦ではない日々が続いてきたのだろう。短い言葉のなかに込められた深い思いがひしひしと伝わってくる。

語りながら視線をトランクへと移していたユイリスの背中では、どこか悲哀に満ちていた。つい先ほどまで笑顔を見せていたその表情

も、灯が落ちたランプのように影が射している。

やはり、昔に思いを巡らせているのだ。いったいどんな苦難があったのかは想像だにできなかったが、決して裕福とはいえないとはいえサイレアで平穏な日々を送ってきた自分は遥かに恵まれているであろうことはよくわかった。

そう考えると、悲しそうにしているユイリスを見ていられず、なんとか元気づけてやりたい、などという殊勝な思いが首をもたげるとはいえ、この状況で、それも妙齡の女性に対して気の利いたことを口にするほど人生経験を積んでいるかと言えばもちろんあるはずもなく。自分でも思ってもみなかったことを口走ってしまう。

「あ、あのさ、無学で悪いんだけど……『業』って、どういう意味？」

まったくもって空気を読むこともへったくれもない発言である。

こんなことを言いたかったわけではないのに、と己の未熟さを呪ってみるが後の祭りだ。

ユイリスは顔を上げてくれはしたものの、案の定目を丸くしたまま小首を傾げている。

「いや、あの、なんだか珍しい言葉で気になっちゃったりしてさ、その」

どうにか挽回してみようと試みるものの、口から出るのは意図不明な発言ばかり。脂汗が背中を伝うが、こんな変な汗をかくのは初めてだ。レイルは泥沼にはまりつつあった。

と、子犬がじゃれついているかのような笑い声が。ユイリスだ。

口元を手のひらで押さえ、次から次へとこぼれ出る笑い声を押しとどめようと背中を丸めている。

「ユ、ユイリス？」

動揺している有様について呆れ果てられた末のことか。なんだか逃げ出したくなる思いにかられつつ、彼女の名前を呼ぶ。

するとユイリスは、目尻に浮かんだ『笑い涙』を「ごめんなさい」と言いながら指先で拭っていた。

「そつか、そうだったのよね。ここ一帯の文化圏、ううん、宗教圏には『業』って言葉、ないものね。それなのに私ったらなに馬鹿なこと言ってるのかしら。見識がないのは私の方ね。自分の間抜けさについて笑っちゃったわ」

悪戯っぽく小さく舌を出すユイリス。普段通りの調子の彼女だ。経過はともかく、結果よければ全てよしということで、レイルは己の痴態を水に流すことにした。

「『業』、のことだったわね」

とりあえず彼女が元氣を取り戻してくれたことにレイルが胸をなでおろしていると、彼女はトランクを置いたまま立ち上がり、雲一つない青空を見上げ、言った。

「人が生きていく上で積み重ねていく、善いこと、それから悪いこと。簡単に言うとなんところかな。前者を善業、後者を悪業と言つて、それぞれ必ず自分へと返ってくるものとされているのよ。善いことを積み重ねれば善いことが、悪いことを積み重ねれば、悪いことが」

一言一言ゆっくりと紡ぎ出すようにして語りつつ、彼女は思い出したなにかを確かめるかのように腹の前で指を組み合わせている。背に流した亜麻色の髪が、彼女の言葉と調和するかのように静かに揺れていた。

「そんな業が、このなかにつまっているわ。それが善業なのか悪業なのか、私には決められない。それがいずれかに属するのか。このトランクと、それから……この青い空の向こうにいる人々が決めてくれるわ」

言つて、ユイリスは首を巡らし、西方彼方の空へ瞳を向けた。そちらの方角の遙か遠くにはサイレアが属しているファルリア王国の国境であるウェゼルレーン山脈が行く手を阻むかのようにそびえ立っている。彼女が言わんとしているのはもしかしたら天上の国のことかもしれないが、実際に存在しているあの山脈の向こうを指し示しているのであれば、そこにあるのは確か

「レイル」

ユイリスに倣ってウェゼルレーン山脈の方を眺めつつ、その向こうにある国の名前を脳裏に浮かべようとしていると、急に名前を呼ばれたために思考を中断させる。彼女の方を見上げると、空色の瞳がこちらを見つめていた。

時に天真爛漫な少女の微笑みを浮かべたかと思えば、今のうちに清楚な気品を漂わせる大人の女性そのものの真剣な表情を向けてくる。幼子と大人の心を併せ持ったようなこの不思議な女性に見つめられるとなにも考えられなくなりそうになるが、そこをどうにか踏み止まる。

「貴方、『騎士』になりたいのよね」

彼女の瞳を見返すと、思ってもみなかった言葉が投げかけられてきた。

「どうしてそれを」

「ご両親から聞いたの、話の流れでね。でも、ご両親はテルミト亭を継いで欲しいと思っている。それを聞いて、なぜ私より身体の小さな貴方がここから私をテルミト亭運ぶことができたのか納得したわ。きつと隠れて鍛練を行っている　騎士になるために、って」

息を呑んだ。騎士願望のことについて、ではない。身体を鍛えていることを見抜かれていたことについてだ。頑として騎士への道を否定している両親に知られないよう、慎重に慎重を重ねて続けた鍛錬のことをあつさり見抜かれてしまったのだから、驚かない方が無理というものだ。

すると、大丈夫、と言って彼女は軽く頭を振った。

「ご両親にそのことは伝えてないわ。私はあくまで部外者だから、貴方たち親子の問題に介入する権利なんてないもの」

驚愕がそのまま表情に出てしまっていたのだろう。己が抱いた危惧を、そこからものの見事に見透かされてしまったことについてさらに目を丸くする。

同時に、彼女が気づいたということは、両親も同様の結論にたど

りつきやしないかという不安が首をもたげ、表情を強張らせていると

「多分、ご両親は気づいていないと思うわ。私という突然の来訪者のことで頭が一杯みたい。だから、貴方が私を運べたこと、気づく間もなく忘れてしまっているようだから」

またしても、である。もしかすると彼女は本当に人の心を読める力があつて、なにからなにまで全てお見通しなのかもしれないと本気で思いたくなった。

「狐につままれた顔してるわね。でも、別に不思議なことじゃないわよ。培った観察眼と経験則の賜物、って奴ね。もっともつとレイルも様々な体験をしていけば、自然とわかるようになるわ」

「そ、そうなのか。でも、なんだかそういうの面倒くさそうだな。俺は別にそこまでわからなくてもいいや」

相手の思考や感情の微妙な起伏がわかれば会話する上で便利かもしれないが、どうも自分には馴染みそうもない。だいたいがほんの少しユイリスに見透かされただけで混乱してしまう自分には100年経っても観察眼やら経験則なるものを培えそうもなく、自嘲の苦笑いを浮かべてしまう。

それにしても、どうしてユイリスはいきなり騎士の話を持ち出してきたのだろうか。はたと根本的なことに気づく。

「ところでさ、なんでいきなり騎士になりたいのよねって確認したんだよ。もしかして、俺が騎士を目指すことに反対なのか？」

「あら、それなら貴方の鍛錬のことを含めて、あることないことをとうにご両親へ話しているわ。辛辣な注釈もたっぷり添えてね。それで済むことでしょうか？」

小首を傾げて肩を竦めたユイリスの言う通りだ。どうやら彼女は別にこちらの意思を挫こうとしているわけではなさそうだった。

ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、レイルは彼女の口から次に発せられた言葉に耳を疑った。

「貴方に伝えたいことがあったから、だから確認したの。貴方の口

から、騎士の道への思いが確かなのかどうかを」

騎士の道への思い　つまり、なぜ騎士を目指すのか、ということに他ならない。

騎士を目指す彼にとって、そのことは最も大切なことでありながら、実は最も触れられたくないことでもあった。彼は『ある重大な思い』を胸中に隠し持っていたのだから。

だからこそ、具体的に『騎士への道』などという言葉が出てしまえば、敏感に反応せざるを得ない。裏のない、澄んだ空色の双眸が真っ直ぐ見つめてきているのだから、なおのことである。

ユイリスはあくまで『レイルの思いを確認した事実をさらに反芻しただけ』だ。

だが、過敏に反応してしまったレイルは、理性では彼女の言葉の意味を理解しつつも感情が先走ってしまっていた。

すなわち、自分の奥底にある思いを包み隠すために、わざわざ自ら騎士への思い　その場のぎでしかない思いを口にしてしまったのだから。

「よ、4年前ぐらいだったかな。サイレアに立ち寄った元騎士のおっさんがいてさ、色々話を聞かせてもらったんだ。そのおっさんの活躍ぶりがなんてか、こう俺の心を揺さぶったっていうかなんていうか」

元騎士の活躍ぶりを表すかのように身振り手振りを交え、さらに拳を握り締めて思いを込めている様を表現してみせつつ、身体を動かすために外していた視線をちらと戻してみる。

ユイリスの目は、彼の話に笑うでもなく、嗜めるでもなく、ましてや怒るでもなく、ただただ静かに見開かれているばかり。こういう時はなんの反応もないことが最もやりづらい。

「と、とにかく、俺は騎士の格好よさに魅せられたってわけなんだ」だから俺は騎士を目指した　と、言葉が続けようとしたが、薄蒼い眼差しに咎人の罪科を確認するために神が使ったという『正義の天秤』の存在を思い出して重ねてしまったレイルは、それ以上唇を

動かすことができなかった。

ただ、先ほどのように胸の内を見透かされていやしないかと心配になり、空色の双眸から逃れるように瞳を閉じて胸前で腕を組んで胸を張った。

男はこうでなくっちゃ　と、手前勝手な思いを込めたつもり/body postureであり、もちろん単なる虚勢である。これ以上詮索されないための現実からの逃避そのものだった。

「ありがとう、話してくれて」

どういう反応をされるか、あたかも審判を待つ罪人のような気持ちに心を支配されそうになっていると、凜とした声が鼓膜に響いた。ゆっくりと目を開くと、後ろ腰で指を組み合わせたまま下を向き、ギョーム川の氾濫により運ばれたまま取り残されそこから中に散ばっている小石をつま先でもてあそんでいるユイリスの姿が網膜に飛び込んできた。

その姿はまったく警戒感を感じさせず、それは彼女に対して垂れたいい加減な能書きに対しての彼女の姿勢を表しているようだった。子供のように小石と戯れる様を黙って見ていると、ユイリスはそのままの体勢で再び語り出す。

「思いはね、人それぞれ。きっかけもまた、人それぞれ。そこに序列なんてない。レイルの話してくれたことも1つの真理に違いないわ」

少し強めに蹴られた小石は、転々と転がっていく。その行き先に視線を送りつつ、ユイリスは流れるように瞳をこちらに向けてきた。「だから、これから話すことはあくまで貴方よりも長く生きて、様々な体験をしてきた先人からの戒め……1つの指針よ。聞き流すか受け止めるかも貴方の自由。でも、耳に入れるだけは入れてね」

既に彼女を謀っている負い目があるため、彼女の言にレイルは素直に頷いた。

その反応に満足したのか、ユイリスはありがとう、と言って微笑み、先に見上げた青い空を、思いを馳せるかのように目を細めて見



上げていた。

「私は何人も騎士たちを見てきたわ。主君に忠実な騎士、武勇に優れた騎士、庶民に優しい騎士、私欲に目がくらんだ騎士、殺戮の狂気に染まった騎士……挙げればキリがないほどのね。ただ、彼らに見え、彼らと触れあい、私が体験してきた上で総じて言えることは、騎士は『業』深き存在だということ。善い業を修める機会ももちろんあるけれど、正反対の業を修めてしまう機会の方がずっと多いの」

と、そこで言葉を止めるユイリス。彼女は再びレイルへと向き直り、その眼差しを向けていた。右手を伸ばし、彼の頬を柔らかい手のひらで包み込むようにしながら。

「騎士になってみなければわからないことが多すぎるから、そう言われてもには理解できないかもしれないけれど……貴方が貴方の望む理想の騎士を目指すのなら、貴方へ伝えた言葉を、どうか忘れないで」

温かい手のひらは、彼女の優しさを体現しているようだった。決して上辺だけなどではない、心からの思いを投げかけてくれている様がよくわかる。

にもかかわらず、自分はどうか。慮ってくれる彼女の心を真っ直ぐ見つめ返すことができるのか。レイルは複雑な思いにかられながら、それでもなにも言えずに黙って小さく頷き、後はユイリスの手のひらの温かさに甘えていることしかできなかった。

それを知ってか知らずか、ユイリスはあくまで自分の調子を崩さず、彼の頬から手を引いたかと思うと両手を腰に当て、あからさまにお姉さんぶって嗜めるかのように言った。

「さて、そろそろ戻りましょうか。お父様に『どこで油売ってたんだ』って怒られてしまうわよ。貴方、まだお使いの途中だったでしょう?」

いつもの、子供っぽい無邪気なユイリスだ。彼女の明るい立ち居振る舞いは強張った心の氷を溶かしてくれるようで、まさしく救わ

れる思いがした。だからこそ、レイルも「いけね、忘れてた」と調子を合わせる。

半分は本当に焦ったため、まずいという有り様を表情に出すと、ユイリスはそれがおかしかったのか小さく喉を鳴らして微笑んでいた。やはり、彼女にはこういう笑顔でいつもいて欲しい。それだけは間違いのないことだと思うのだった。

そんなことを思いながら、腰を屈めてトランクに手をかけ、取っ手をつかんで持ち上げる彼女の様子を見ていたレイルは、肝心なことを思い出して驚いた。

彼が持ち上げようとしてもびくともしなかったトランクを、片手でひよいと空の木桶を持ち上げるかのようにして手にぶら下げたのだ。

だいたいがこの細腕で常に持ち歩いていたということすら驚異だというのに、まざまざとその事実を目の前で見せつけられれば開いた口も塞がらなくなるといったものだった。いったい全体、どこにそのような力があるというのか。

ただ、助け出した彼女が目を醒ました時、錯乱している彼女を押しとどめようとしてえらい力で押し返されたことを思い返すと、あながち不可能ではない気がしてくる。

してくるものの、よくよく考えればトランクの重さは『持ち上げられるかられないか』という範疇を思い切り逸脱していた。にもかかわらず、現実には彼女は苦もなくあのトランクを持ち上げ、あまつさえ鼻歌を奏でながらサイレアへ向かって軽やかに歩き出しているではないか。

いったいどうなっているのか。二律背反する命題にレイルは難しい顔をして悩み込んでしまう。

「あら、どうしたの？」

首を捻って立ち尽くしていると、ついてこないことに気づいたユイリスは立ち止まって振り返り、訝しげな眼差しを向けてきた。ただ、トランクに注がれていたレイルの視線から、すぐにその眼差し

が意図するところに気づいたようで、彼女はなんとも言えない苦笑いを浮かべるのだった。

「ああ、これ？ 基本的に私しか持てないから。力のあるなしの問題じゃないの。なんならもう一度試してみる？」

胸のあたりまで軽々とトランクを持ち上げ、どこか誇らしげに見せつけているユイリス。

いったいどんな理由があつて力のあるなしの問題ではないのかさっぱりわからなかったが、理屈抜きで楽にあのトランクを持ち上げている彼女の素振りを見ると、なんだかとても悔しくなり、レイルはぶいと横を向いた。

「い、いいよ別に。どうせ俺には持ち上げられないんだから」

「それは残念。なら、早く行きましょ。ほら拗ねてないで」

ささやかな抵抗を試みていると、小馬鹿にしたしつぺ返しが。このまま黙っていられるかとばかりに勇んで反論しようと彼女の方を向くが、当の本人は我関せずとばかりにすたすた歩いてしまっていた。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！」

慌てて彼女の背中を追いかける。ところが、彼女は背後を一顧だにせず、そのまま歩を進めていた。

ようやく追いつくと、彼女の肩が震えているのに気づいた。

「ユ、ユイリス？」

どこか具合でも悪いのか、それとも疲れがぶり返したのか、急に心配になり問いかける。すると彼女は足を止め、にわかに振り返った。その顔には一面の笑顔。なんのことはない、彼女は笑いを堪えていたのだ。

「か、からかったな！」

「だって、慌てる様が可愛かったんだもの」

レイルも立ち止まって抗議の声を上げるが、まったく効果なし。悪びれもせず小さく舌を出し、10代半ばの少女のように顔をほころばせている有り様を見せつけられると、毒気を抜かれたように

憤りも静まってしまふ。

一方でユイリスは、こちらが毒気を抜かれているのを他所に踵を返すと、鼻歌混じりに再び歩き出していた。あくまで自分の調子を崩さない姿勢にある意味天晴れな思いが湧きあがるなか、それでもレイルは悪くない思いを抱きながら不思議な来訪者の背中を追いかけた。

どうして彼女は騎士について造詣が深いのか　湧き上がった疑問を尋ねたくなったものの、調子を取り戻したユイリスの笑顔を消さないためにも、今はそつと胸にしまいこんで。

辺り一面に霧が満ちていた。視界はまったくといっていいほど利かない。

気がつく、この霧の海のなかに立ち尽くしている自分がいた。いつ、どうやってこんなところに来たのだろうか。思い出そうとしても思い出せない。

「とにかく、霧が薄いところまで出て、状況を確認しなきゃ」

どこまで行っても霧が続くということはありえない。必ず切れ目、境目があるはずだ。それに少しでも風があれば霧は対流し、視界が開けることもある。その場所を目指してまずは移動することが先決だった。

ところが、足を踏み出したとたん、彼女の動きが止まる。2つの理由が彼女の身体を束縛した。

1つは金属と金属が擦れ合う音がしたため。

もう1つは、つま先になにか柔らかいものが触れたため。

彼女はゆっくりと、音がした胸元と、そして柔らかいものに触れたつま先を確認すべく視線を下げた。

刹那、空色の双眸の中心で彼女の瞳孔は閉じられてしまうかのとき勢いで小さく絞られた。

いつの間にか身につけられている白い鎧。胸に金十字の紋章が入った、愛着のある彼女専用の鎧だった。

ありえない。今は彼女の手元ではなく、遠い故郷の大地に抱かれているはずである。

にもかかわらず、くだんの鎧を身に着けていることも驚くべきことだが、彼女の瞳を驚愕で満たした最大の理由は、城郭を彩る白亜の大理石のような美しい鎧が見るも無残に赤い血で染め上げられていたことだ。

さらによく見れば、鮮血は装甲のある箇所だけでなく全身に飛び

散っている。決して自らが血を流したわけではなく、他人の血、すなわち返り血を浴びた結果に他ならなかった。

いったいなにがどうなっているのか、まったくわからなかった。積み重ねてきた記憶がないため、起こってしまった結果だけを見せられた形なのである。常人ならばこの時点で昏迷の彼方へ自我を喪失してしまつて不思議はなかった。

彼女だからこそ、まだ自分を失わずにいられたのだ。

が、もちろん完全に平静でいられているわけではない。見開かれた目、凍りついた表情　彼女の胸中に果てることのないさざ波が巻き起こっていることを表していた。

ただ、これはまだ序章に過ぎなかったのである。

小波を拡大させ飛沫を上げる大波の猛威を呼び起こす要因が、彼女の瞳へと映り込んだのだから。

つま先に当たった柔らかいもの。それは、血にまみれ、切断面から臓物を撒き散らした人間の上半身だったのである。

息を呑んだ。見慣れた光景とはいえ、つい反射的に『左手』で口元を押さえてしまう。

駆け巡る疑念。

全身に浴びた返り血。足元に転がる惨殺体。それが意味するところを、考えないわけがない。

彼女はそこでふと、口元を押さえる手が左手だったことに気づく。両腕利きではあるが、基本的には右手を利き腕として使っている。ではなぜ、自分は右手で口元を押さえなかったのか。

よもや、という思いが蠟燭の灯火のように胸中に灯り、それは瞬く間に燃え広がる。すでに血色を失ってしまった唇を小さく震わせながら、彼女は怯えの色さえ浮かびつつある双眸をゆっくり右手へと下ろしていった。

恐る恐る見下ろしたその先には、金十字をかたどっている鐐を持つ、長く苦しい彼女の戦いを支え通した剣　白銀色の刀身を赤く染め、切っ先から血の雫を滴らせた、殺戮の嵐を巻き起こした痕跡

を残す長剣がしっかりと握られていた。

とたん、一陣の突風が吹き抜ける。それまでの濃密さが嘘のように、立ち込めていた霧は散り散りになって隠されていた辺り一帯が鮮明になる。

地獄絵図、というものが実在するならば、まさに今この時のことを言うのだろう。

一面に広がる赤い絨毯。否、それは血の海。

無造作に転がる肉塊の群れ。否、それはかつて生きた人間の一部。いったい何人の、何十人の、いや何百人の死体があるのかわからない。彼女の剣でしかできない切断面を見せる、バラバラになった五体がそこかしこに飛び散り、吹き出た血飛沫が大地を汚し尽くしていた。

私が、

長剣を取り落とし、頭を抱える。

私が、私が、

立っていらなくなり、震えながら膝を折って尻餅をついた。

『私が殺した！？』

天を突く絶叫。それは、全て絶望に染まった末の心の悲鳴だった。激しい動悸と止まらない身体の震えに、意識まで混沌の渦に飲み込まれてしまいそうになった時、彼女は瞳に映った暗闇の向こうに浮かび上がる無機質な石造りの天井に気づき、我に返った。

静かな室内に彼女の荒い息遣いだけが響いている。肩で息をしていたため、まず呼吸を落着かせる。最後に大きく息を吸い込んだ後、深いため息を吐いた。

瞬きすると少し目が痛い。指先で目元を触ると、涙を流した跡があった。もしかしたら目は充血しているかもしれない。

気だるさが全身を包み込むなか、ユイリスはベッドに横たわっていた己が身体をゆっくりと起こした。

トランクを回収した帰り、レイルのお使いにつきあった後、あてがわれている客間に戻ってからの記憶がない。体力がまだ完全に回

復していなかったのか、どうやらそのままベッドに倒れ込んで寝てしまっていたようだ。

すっかり陽は落ち、光失くした室内は薄暗さに染まっている。木戸が開け放たれた窓の向こうから差し込む月明かりだけが唯一の照明であり、窓下にある机の上に置かれたトランクケースを照らし出していた。

それにしても現実的な夢だった。いや、むしろ現実として起こっていたことを詳細は別として思い出しただけと言っても過言はないのかもしれない。

重苦しい胸中を振り払いつつ脚をそろえて床に降り立つ。狭い室内のため、すぐ目の前には例の机がある。

机上のトランクのこげ茶色の表面をしばし見つめた後、開閉を封じている止め具に手をかける。蝶番が軋んだ音を立てるとともに蓋が開き、月の光が中へと注がれた。

「あの子に『業』の話をしたから、思い出してしまったのかもしれないわね……」

彼女とともに幾多の艱難辛苦を乗り越えてきたものの、あれから使われることのなくなった相棒たちを見つめる。

最も上に収納されていた枯れ草色の衣服に手を伸ばし、綺麗に折りたたまれた袖に触れた。二の腕に縫いつけられた特徴のある紋章がユイリスの瞳に映り込み、かつての記憶を呼び覚ます。

「私の、『業』……か」

蚊の鳴くような細かい声でつぶやき、彼女は小さくため息を吐いた。

後悔はしていないが、好きで飛び込んだ道でもない。沈鬱な影が表情に張りつくのは仕方のないことだった。

だからといって自分の殻の中に閉じこもってしまうなどということとは単なる逃げであろう。今を懸命に生きる　それだけが彼女に与えられた唯一の道なのだから。

沈んだ心を振り払うかのように頭を振る。トランクを元通りに閉



じると、ユイリスは机に背を向けて扉へ足を向けた。

考えてみればこの時間帯、意識を取り戻してからはずっと客間で過ごしていた。食事もレイルが運んでくれたのを口に使っていたので、階下に降りたことはない。

そう言えば夜は酒場として商いしているとロイドから聞いていたことを思い出す。扉を開けて真つ暗な廊下を進み階段へと差しかけると、彼の言葉を証明する賑やかな複数の声が階下からほのかな灯りとともに上ってきた。

これだけの喧騒を耳にするのは久しぶりのことだ。賑やかなのは嫌いではないが、最近はそのような場自体に近寄ることがなかったのも、なんだか新鮮な気分になる。

暗がりから明るく照らし出された1階へ降りたため、まぶしい。腕をかざして瞳に入る光量を調整しつつ、作り出された影から室内を見回した。

初めて見た時もあったより広いと感じた店内は、満席とまではいかないものの酒盛りをする客らでこった返しており、ともすれば息苦しさを感ぜさせるほどだ。

所狭しと並べられた円卓をそれぞれ囲み、赤ら顔の男たちが杯を豪快に傾けながら談笑している。ささやかな幸せを堪能し、皆一様に満足そうだ。

彼らの間をミランが忙しく給仕に駆けずり回り、壁際に設けられたカウンターの奥ではロイドがこちらにも忙しく料理の仕込みをしていた。それなりに繁盛していると話には聞いていたが、これならば彼らの言も素直に頷ける。

十分すぎる繁盛ぶりに感心しつつ、ユイリスは壁際を歩いてカウンターへ歩み寄った。

するとこの店の主人もこちらに気づき、少し驚いたような顔をしてお迎えしてくれた。

「おお、大丈夫なのか？ さっきうちのが様子を見に行ったら寝ちまつてるって言ってたからよ、熱がぶり返したのかとも思ってたその

まま寝かせてたんだが」

「少し疲れていたみたいです。でも、お昼寝したらすっかり元気になりましたからもう大丈夫です。色々と気を遣って下さって本当にありがとうございます」

礼を述べながら丁寧に頭を下げる。すると、レイルをそのまま歳取らせたような、彼によく似た 正しくはレイルが父親によく似たと言うべきか 店主はよしてくれと手を振った。

「気にすることあねえよ。むしろ、大したことできねえで申し訳ねえぐらいだ」

「そんなこと。レイルを始め、ロイドさん、ミランさん方々がいらつしやらなかつたら私はどうなっていたことが」

「そう堅苦しく考えんなって。困った時はお互い様ってやつだ。そうだろう？」

口元をニヤリと歪めて笑うロイド。レイル曰く、頑固でどうしようもないというが、決してそれだけではないということをその表情が雄弁に物語っている。ユイリスは彼の配慮に最大限の御礼を込め、はい、と微笑みをもって応えた。

「ところでレイルの姿が見えないようですが」

テルミト亭に戻り、客間に引込んだ時に別れて以来姿を見ていない。店内にも彼の姿を確認することができず、首を傾げた。

「そうなんだよ。もう一度使いに出したんだが、どうやらまた使い先で油売ってるみたいでよ、あの野郎まだ帰ってきやしねえ。このくそ忙しい時になに考えてやがるってんだ。帰ってきたら半殺しだな、うむ」

額に青筋を浮かべて頭に血を上らせつつ、自分で自分の発言に納得したように頷いているロイド。この父親なら本気で半殺しにしかねないかも、とユイリスは内心苦笑いしつつ、命の恩人の身の安全を考えてせめてもの手助けとばかりにとりあえず強制的に話題を変える。

「それにしても大盛況ですね。お昼も沢山のお客様がお見えになっ

てましたけど、夜分のテルミト亭を見るのは初めてなので、お昼以上のお客様の入りに驚きました」

「ところがそうでもねえんだよな、これが。見ての通り、満席じゃんねえだろ？」

舌打ちしながら、顎をしゃくつて店内の方を示す。階下に降りた時から感じていたことを店主から指摘され、改めて確認する。彼の言う通り、若干ではあるが空席が見受けられた。

「最盛期は席が足りなくて、家んなから私用のを引っ張り出して来て使ってたぐらいだからな。ところが今じゃ満席になりやしねえ。それもこれも、南の馬鹿帝国の奴らのせいだ」

苦虫を噛み潰したかのような顔をして、舌打ちするロイド。彼の言う帝国とは、ファルアリア王国の南東に国境を接している大国、正式名称・神聖ラミニュラン帝国のことに違いなかった。

「そう言えば旅の最中耳にしました。ラミニュラン帝国との国境付近で彼らに不穏な動きがあると」

「そうそうそれだ。おかげで街道筋を旅する人間が減っちゃって、このさまだ。周りに迷惑かけまくりやがって、ふてえ野郎どもだ、まったく」

吐き捨てるように怒りをあらわにするロイド。ただ、彼の主張は至極もつともなことだった。

神聖ラミニュラン帝国は領土的野心が非常に強く、5年をかけた大南征で3つの国を侵略し、一昨年にいずれも降伏させたことは記憶に新しい。

しかし、ジェラルシア大陸西方にて東西に広がるエウロニアと呼ばれる一帯には、ラミニュラン帝国の支配下にならない国々がまだまだ数多く存在している。

ユイリスの故国もそのうちの1国であり、ラミニュラン帝国に比するほどの国力を備えた国だった。

その故国も3年前に勃発した内戦により国体が改められ、現在は新政府が政を執り行っている。

内戦により多大な代償を払うこととなったが、不幸中の幸いだっ  
たのは、内戦時、緩衝地帯　ファルアリア王国のことである  
を挟んで火花を散らすラミニュラン帝国が大南征を行っていたこと  
だ。

征服されるエウロニア南部の国々にとっては非常に不謹慎なこと  
に聞こえるだろうが、あの時もし彼の大南征がなければ、故国の内  
戦を契機に神聖ラミニュラン帝国は大北伐の檄を飛ばし、ファルア  
リア王国を瞬く間に飲み込んだ余勢をかって、大挙して来襲してき  
たに違いないのである。さしもの大帝国も大南征中に反対方向まで  
は手がまわらず、結果として故国はエウロニア南部の国々の犠牲に  
よって生きながらえた、と結論づけても決して過言ではなかった。

しかし、予断は許されなくなった。大南征の完結によって。彼ら  
が今度は北西を目指すであろうことは明白だったからだ。

悪名高い前政権に比べ、故国の現政権は非常に庶民的であり、国  
民からも慕われていた。このように政情は大変安定しているのだが、  
後退した国力はまだ回復していなかった。

エウロニア西方の雄国と目されていた故国が力を削がれた今、神  
聖ラミニュラン帝国が『北伐』という侵略の牙を剥き出しにする好  
機であることは、誰よりも彼らがよく認識しているだろう。

これらを踏まえると、巷の噂を単なる流言として看過することは  
できない。国境に近づけば近づくほど真実味を帯び、国境から街道  
筋の町を2つ挟んで存在しているこのサイレアでラミニュラン帝国  
が不穏な空気がもたらしている現状をまざまざと見せつけられたの  
だ。

各国の国情と時勢、そして眼前の事実を鑑みると、自分がこの地  
方へと足を踏み入れた『本当の目的』は達成されつつあった。懸念  
が発端となり彼女を突き動かしたのだが、それは悪い方の中しつ  
つある。

「どうした、難しい顔をして」

つい自分の世界に入り込んで憂いてしまった。ロイドから声をか

けられ、ユイリスは我に返る。心中を表情には出さず、何事もなかったかのように応対する。

「いえ、別に。なにごともなければ、と祈っていたところです」

「だな。戦争やられて一番迷惑を被るのは俺たち庶民だ。えれえ奴らはそれがわかってねえ。まったく困ったものだ」

腕を組み、口を山なりに歪めて心情を表している頑固店主に、ユイリスは苦笑いしつつ軽く頷いた。本当は同意の声を上げたいくらいであったが、あえて自重する。己の過去を顧みると、客観的に見ればロイドの言う『えれえ奴ら』と立場は違えど同じ舞台上に上がっていたわけであり、彼のように愚痴を言うことなど許されない。……いや、おそらく民衆は許してくれるだろう。だが、彼女自身が自らを許さなかったのだから。

ともあれ、神聖ラミニニラン帝国の野望はどうやら限りなく実行へと近づいているようだった。対応を迫られているのは間違いなく、その先に待ち受ける暗雲立ち込める未来にユイリスは胸を痛めた。

「よう大将！ 大将つてば！」

複雑な思いを胸中で渦巻かせながらロイドの調子に合わせていると、唐突に客席から声が投げかけられてきた。見ると、カウンター傍の円卓を囲んでいた、見るからにがたいのよい中年の男たちが上機嫌で顔をこちらへ向けていた。

「おう、なんだ。お前らか」

「なんだじゃねえよ、まったく。さつきから呼んでんのに」

どうやらこの店の常連らしく、ロイドは腰に手を当ててむつとりと顔をしかめた。それに、男の1人は不満げに赤ら顔をしかめて抗議を示す。

が、不毛なやり取りなどやってられるかとばかりに、別の男が円卓に杯を叩き置き、ユイリスに向って指差した。

「てか、そんなこたあどうでもいい！ そののえらい別嬪なねえちゃん！」

突然のことにユイリスもつい自分で自分を指差し、『わ、私？』

と混乱してしまう。これに、男は頷きながら口角泡を飛ばす勢いでまくし立てた。

「そうだ、あんただ！ ルーズの代わりに新しく雇われたねえちゃんなんだろう、そうだろう！」

いきなり意味不明なことを言われ困惑するが、間違いないのは彼がなにかを勘違いしているということだ。

とはいえ、酔っ払い相手にどう回答すればいいというのか。答えを考えあぐねていると、ロイドが助け舟を出してくれた。

「馬鹿野郎、この人はうちのお客人よ。ちょっかい出そうもんなら、店から叩き出すぞ！」

助け舟を出してくれたはいいが、生半可な助け舟ではなかった。

およそ客に向かって言う台詞などではなく、暴漢相手にでも吐き捨てるような言葉に、逆に焦るユイリス。助け舟はありがたいが、なにもそこまで……と慌ててロイドを止めようとすると、暴言を叩きつけられた当の客たちは声を上げて笑い出したのである。

「なんだよ、そうならそうと早く言えってばさ。危うく大将に蹴飛ばされるとこだったぜ」

「てか、お前の場合ルーズに手を出しかけて一度本当に叩き出されてたしな」

「あれには腹抱えて笑わせてもらったぜ。でも、そのルーズちゃんも今や人妻……寂しくなったなあ」

異様に盛り上がったと思えば、今度は急に肩を落として沈み込む一団。いくら酔いがまわっているからとはいえ、あまりにも激しい感情の起伏に圧倒され、ユイリスは呆気にとられた。

「すまねえな、ユイリス。こいつらここんところいつもこうでな」

さしものロイドも呆れた様子で、落ち込んでいる男たちを傍観している。ユイリスは、気にしてませんから、という意味表示を込めて軽く手を振った。

「ありがとうよ。ルーズがいてくれたらこいつらももうちょっと大人しいんだが。ああ、ルーズってのはついこないだまでうちで

働いていた、ちょうどあんたぐらいの若い娘でな。これがよく気がつく娘で、給仕を完璧にこなしてくれていた上にだ、特技で客どもを魅了してたんだよ」

「特、技？」

「ああ。歌を歌うのが上手かったんだ。しかもリユートを手前で弾きながら、ときたまんだから、いつぱしの歌姫のようだったぜ。常連にはかなり人気で、夜、給仕がひと段落した頃によく歌ってくれたもんだ。ところがあんまりにも人気を博したもんで、話を聞きつけた旅の金持ちだかなんだかに見初められてそのまま一緒に旅立ちまった、つてわけだ。俺としても使いでのあるいい娘がいなくなっちまって残念極まりねえがな」

ロイドの説明で合点がいった。よくよく考えてみれば、減ったとはいえこの客の量をミランだけでさばけているはずもない。ルイズという女性がいたからこそ、店も回っていたのだろう。

そう考えると、フュンフル家に命を救われその後の世話も受けている自分として、彼らに恩返しできる最良の方策がなんなのか答えはすぐに導き出された。

「ロイドさん」

一見馬鹿にしながらも、しょうがねえなあ、という風に彼らのことを心配している人情味厚いロイドに対し、ユイリスは真剣な面持ちを向けた。急に顔色が変わった若い娘に、ロイドは訝しげな目を向けてくる。

「どれだけの期間お役に立てるかどうかわかりませんが、その、私にルイズさんの代わりを務めさせていただけないでしょうか」

導き出した結論を端的に伝える。突然の申し出に、ロイドは最初彼女の言葉を理解できなかったようで首を傾げていた。が、すぐに言わんとしていることがどういふことが気づき、口を大きく開けて驚いていた。

「命を助けていただいた上に、ただただお世話になっているだけではあまりにも申し訳なくて」

「い、いいんだよ、あんたは気にしなくて。あんたはうちのお客人なんだからよ」

一貫して気にするな、という立場を取り続けているロイドは、ここで悪い意味での頑固さを発揮。降って湧いた話に一瞬とまどっていたものの、すぐに我に返って頑なにユイリスの申し出を拒絶した。感謝の意を少しでも示したい、との思いから出した提案だったが、店主であるロイドに断られてはそれ以上どうすることもできない。下手に強く申し出れば、いたずらに彼に不快な思いを抱かせてしまい、恩を仇で返すことになってしまう。そうまでして申し出ることはないし、他に幾らでも恩返しの方法はあるはずだ。

ここはひとまず諦めるのが得策。少し残念だったが、ユイリスはそれ以上の申し出を控えようとした。

その時だった。

「ちよつと待て大将！ 健気なねえちゃんの一途な思いを無駄にする気が、この唐変木！」

なんと、先ほどとは逆に、今度は酔っ払いの一団が逆に助け船を出してくれたのである。

「そうだそうだ！ 馬鹿の一つ覚えな頑固一徹にもほどがあるぜ！」

「ひっこめくそ親父！！」

先ほどやりこめられた反動もあるのだろう。ここぞとばかりに言いたい放題まきちらす男たち。

するとロイドの顔が見る間のうちに赤く染まっていた。

「なんだとこの野郎！」

売り言葉に買い言葉。怒声を張り上げたロイドは、袖をまくり上げ彼らにつかみかからんとカウンターを乗り越えるべく脚をかけていた。

助け舟はありがたかったが、なんだか事態が複雑な方向へ向っていつてしまっている。正直、こうなるとこの場から逃げ出したくなってくるが、当事者の一人としての責任も感じるため、ユイリスはため息を吐きながらも、ロイドを止めるべく声をかけようとした。



「お止めっ！」

ロイドや男たちだけでなく、店内にいる全ての客たちの声が失われた。あれほど喧騒にまみれていた店内が、たった一言で一切の音もなく静まり返る。

怒気を含んだ女性の一喝は、全員を金縛りにしてしまうほどの威力があったが、ユイリスが叫んだわけではない。

ミランの声だった。

「もう、いい大人がみつともないったらありやしない！ 恥じを知りなさい、恥を」

栗毛色の長い髪を首の後ろ辺りで束ねたエプロンドレス姿の中年女性　ミランが、店の中央で腰に両手をあてつつ肩を怒らせて立ち、鬼の形相でロイドをにらめつけていた。

客たちの視線を一身に浴びながらも微塵すら臆することなく、彼女は太股でユイリスたちのもとへと歩み寄ってきた。

蛇ににらまれたねずみ、というのはこういう状況を言うのだろうか。我が道を行くロイドが脂汗を垂らしながら凍りついていた。この場合、どちらが蛇でどちらがねずみかは言わずもがなである。

決して美人ではないが、歳をとっても愛くるしい面立ちのミランだが、怒るとかなり怖い有り様をこれ以上もなく見せつけながらユイリスのもとへやってきた彼女は、最後にロイドを一瞥すると表情を一転柔和に変え、ユイリスを見つめた。

「いいじゃない、ユイリスが申し出てくれているんだから。私も助かるわ。ねえ？」

悪戯っぽく片目をつむり、肩をポンと叩いてくれる。目まぐるしく変化する状況にわけがわからなくなりそうだったが、ミランの温かい配慮が気持ちを落ち着かせてくれた。

「は、はい！ 頑張ります！」

少しでも恩返しができるならこれ以上のことはない。ユイリスは素直に表情を輝かせ、思いの丈を言葉に乗せるのだった。

「それでよ、その騎士はこう言ったんだ。『我と我が剣を信じ、我に続け』ってな。ところがだ、そいつが突進するのを他所に、部下の兵士は回れ右して逃げちまったんだと」

「そりやまた人望ないな。結局その後どうなったんだ？」

「もちろん当の本人も尻尾巻いて逃げ出したとよ。情けねえ話だよなあ」

頭を振って心情を表している男に対し、彼の話を聞いていた相棒もちげえねえちげえねえ、と頷いていた。

やれどこそこの騎士は腕っ節は強いが人望は皆無だの、なにがしの騎士団は衆道に走りすぎて自滅しただの、知っている騎士の話について片っ端からやいのやいのと話題に上げて盛り上がっている2人組の男たち。その背中越しに、カウンターに座ったレイルはミルクが入った杯を片手に興味津々とはかりに聞き耳を立てていた。

街道筋の町サイレアはその立地から人の流量が多いため、町としての規模は比較的大きく、旅人のための施設も多い。当然、レイルの実家たるテルミト亭以外にも飲食を楽しめる店は多々存在し、このリユルゾ亭もその1つだった。

ただ、リユルゾ亭は完璧な酒場で、テルミト亭と異なり昼間から酒類の供出も行っており、レイルの実家とは様相を異にしている。

そのリユルゾ亭になぜ彼がいるのかといえば、この店の店主フェンソールロムが父ロイドの旧友だったからである。今でも親交厚い2人は度々お互いを助け合っており、ちょっとした不都合も支えあう間柄だった。今日2度目の使いに出されたのも、仕込みに使う調味料をすっかり切らしたフェンソのために届けるよう命じられたからだ。

指示通りリユルゾ亭を訪れ、フェンソに言いつけのままに届け物を渡すと、幼い頃からレイルのことを可愛がってくれてきた彼は、

お駄賃とばかりにミルクをご馳走してくれた。フェンソはロイドと正反対の性格をしており、非常に温厚でよく氣遣ってくれる優しい人物だったのだ。

2人の性格を比較すると水と油と言っていていいほど異なり、どうすれば長い間付き合い続けていられるのか甚だ疑問であったが、レイルの理解が及ばぬところでうまが合うのだろう。

よくわからない2人の縁というものに首を傾げつつお駄賃のミルクをすすり、レイルはここぞとばかりに油を売っていた。

酒場にもかかわらずリウルゾ亭は比較的静かな店で居心地がよく、レイルもこの店のカウンターの端で油を売るのが心地よいひと時になっていたのだ。

決して客が入っていないわけではなく、店内の雰囲気は落ち着いているためにお客もその雰囲気を受け入れ、騒ぐよりもゆっくりと酒を嗜むことに喜びを感じてから、と以前フェンソが静かな理由を説明してくれたが、まさにその通りだと思う。子供の自分でさえ居心地がいいと思うのだから、大人にしてみればよほどいい店に違いなかった。

フェンソにはレイルと同一歳の娘ミスリイがおり、いわゆる『幼馴染』というやつで今も腐れ縁が続いており、いつもならリウルゾ亭に使いにくるとせつかくの落ち着いた店の雰囲気を台無しにするかのごとく勢いで話し相手の獲物にと絡んでくるのだった。

幸か不幸か、日中外出していた疲れで当の本人は早晩就寝してしまったとのこと。決して悪い娘ではないのだが、たまに度が過ぎるお喋り娘の邪魔が入らないのは素直に気が安らぐことで、レイルはささやかな安息の時間を楽しんでいた。

リウルゾ亭の雰囲気よさは折り紙つきだが、レイルがこの店を好きな理由がもう1つあった。店内が静かなために、耳を澄ませば客同士の話が聞こえてくることだ。

客層は当然ながら旅人が多いため、酒場での談話も当然サイレアの外のことがほとんどだ。珍しい話や驚くような話が次から次へと

聞こえてくるため、実に飽きない。さらには、彼が胸躍らせるような武勇伝も聞けるため、リユルゾ亭で聞き耳を立てるのは日課のようになっていた。

今日も旅人たちの話を聞いていたのだが、丁度真後ろの円卓を囲んでいる2人組の談話は当たり前で、各地の騎士や騎士団の話に花を咲かせていたのである。

これ以上もない話題に、レイルは時間が経つのも忘れて彼らの話に思いを馳せていた。

「しかしだ。最近ほとんど勇猛果敢な騎士の話を聞かなかったが、ラミニュランの神聖騎士団は精強だな」

「ああ、大南征なんて夢物語を完遂させちまうぐらいだからな。奴らにかなう騎士団なんぞ、この辺りにやもついねえんじゃねえか？」  
「言えてるかもしれん。あとは、フレアミスで起きた内戦で活躍したっていう奴らぐらいか？ 単に強さって面で言えば」

情けない騎士の話題を経て、再び名のある騎士団の話へと移ったようだ。ラミニュラン帝国の話は聞いたことがある。

ただ、その後に上げられた『奴ら』というのはいったい。膨らんだレイルの疑問をさらに増大させるかのごとく、彼らはさらに話を続けた。

「聞いたことあるぜ。嘘か誠か、今の政府を勝たせた立役者だったとかよ」

「ああ。化け物みたいな強さだった、と伝え聞いている」

「でもよ、そいつら、ハーなんとか隊って言ったか？ とにかく面子のなかに女も何人かいたって言うじゃねえか。極めつけは主席があの『聖女』だろ？ 反政府軍の象徴だかなんだか知らねえが、おおよそどこぞの娘を祭り上げて、士気の高揚に使ったんじゃないか？」

「確かに。実際はどいつもこいつもお飾りだったんだろう。どこまで効果があったか知らんが、現実に当時の反政府軍は戦力として政府軍に劣っていたものの、士気旺盛でそのまま時の政府を打ち倒し

てしまったんだからな。結局のところ、現政権の力が本物だった  
てだけさ」

「となると、やっぱりラミニュランの騎士が一番ってことになるな。  
ここらからももっと骨のある奴に出てきてもらわねえと、ファルア  
リアなんてあつという間に滅ぼされて、俺らもおちおち商売してら  
んねえってもんだ」

「ああ、まったくだ」

一通り話しきると、2人は声を上げて笑っていた。

一方、レイルの胸中は複雑な感情に見舞われていた。途中までは  
心躍らせて聞き入っていたものの、終盤彼らが口に出したとある隊  
の話や、その主席と言われた『聖女』のくだりを彼ら自身が否定し、  
貶していたことに強い不快感が湧いたからだ。

貶されていた対象についてまったく知識がないが、人が貶されて  
いるのを喜ぶような性根を彼は持っていなかったのである。戦時を  
駆け抜けた人間を誹謗することは例え真実がどこにあるとも、平  
穩な酒場などで安易に口にしていいものだと思わない。

それまで心地よかったのが一転して嫌な気分になる。その時だっ  
た。彼の心情を代弁するかのように、彼と2人の男が形成していた  
空間に1人の人物が押し入ってきたのは。

「今、聖女の話をしていたな」

若い男の声だった。だが、決して青臭くなく確たる『意思の力』  
が込められた声であった。

気になったレイルは、そつと頭を傾け、横目で後背を窺った。

黒いマントの男が立っていた。歳の頃は20代半ばぐらいだろう  
か。マントと対照的な栗色の髪を短く刈り込んだ長身のその男は、  
精悍な面立ちに絶妙に配置された灰色の双眸をもって、例の2人を  
射るように見下ろしていた。

「は？　なんだてめえ」

突き刺さるような視線に腰が引けつつも、男は大して価値のない  
矜持を守るためかあえて強気な言葉を吐いていた。だが、黒いマン

トの男はそれをまったく齒牙にもかけなかったのである。

「加えて、彼女とハーキューリー隊の連中を侮辱した。そうだな」

口にする言葉に抑揚はない。ただ、落ち着きはらった声には、子供のレイルにもわかるほどの確たる怒りが滲み出ている。それをより至近で聞かされている2人の男にわからないはずがなかった。

「だ、だからなんだってんだ」

案の定、男の口調が瞬く間に怪しくなる。ほんのつい先ほどまでの威勢はどこへやら、だ。

「彼女らを侮辱する奴は俺が許さん」

マントの合わせ目が若干揺れ、隠された彼の身体が少しだけあらわになる。黒いマントの向こうには、板金鎧を改造した軽装甲を身にまとい腰に長剣を下る武装された身体があつた。彼が長剣の柄に手をかけたためにマントの合わせ目が揺れたのである。

「な、なんなんだよいたい！ 頭おかしいんじゃないか！？」

「おい行こう。こんなやばい奴相手にしてられん」

完全に吞まれきつた2人はそれぞれに捨て台詞を残すと、尻尾を丸めて逃げる犬のようにそそくさと席を立ち、店の外へと消えて行った。

あつという間のできごとだった。暴言の2人が出て行つたのを契機に張り詰めた空気が緩み、面倒ごとには関わりたくないと思を飲んでいた周りの客も再び各々の世界を楽しむべく会話を再会させている。

ただ、レイルはまだ黒いマントへとその視線を釘付けにさせられていた。

2人が出て行くのを確認した男は、長剣の柄から手を離しマントの合わせ目を直すと、冷たく凍るような視線をこちらへ向けてきたのだ。驚き、慌ててカウンターへと顔を戻す。杯を両手で持ち、顔を伏せる。中に入ったミルクを見つめ、視線を上げない。

すると、石造りの床を踏み歩く長靴の音が一步、また一步とこちらへと近づいてくるのではないか。にわかに心臓の拍動が早まり、背

筋が凍る。

自分はなにも言っていないのにもかかわらず、あの冷たい視線で見据えられ、レイルの意識は完全に吞まれていた。

足音はすぐ傍まで近づき、拍動も最高潮に達した時、隣の座席に誰かが座る物音が。

強張った身体に抗い、反射的に隣を見る。すると、あの男がそこに腰かけていた。そして、彼は灰色の眼差しをこちらへ向けていたのである。

「子供がなぜこんなところにいる」

生まれて初めて体験する、静かなる威圧感。怒鳴られているわけでもないのに身が竦んだ。答えようにも声が出てこない。

「ああ剣士さん、すいません」

男の視線に射竦められ微動だにできないでると、慌てつつも丁寧さのこもった声が2人の間に割って入った。

「その子はあたしの友人の息子でして。使いに来てくれたのを労っていたところなのです」

助け舟となった声のおかげで、金縛りにあつたかのように動かなかった身体に自由が戻ってきた。既に男の視線は外れ、カウンターの向こうを見ている。助け舟の主がいる方であり、レイルもそこらを見やった。

フェンソだった。寂しくなってきた金色の頭髮に、見るからに人の良さそうなふつくらとした面立ち。なにかと気にかけてくれるこの店の主人が、慇懃な態度でレイルを庇ってくれていたのである。年齢に見合った場数を踏んできているからか、丁寧な物腰は崩さないものの彼はまったく臆した様子を見せず、一步も引かない姿勢を見せていた。

「そうか。仕事を果たした対価を得ていたんだな。勘ぐつてすまなかった」

フェンソの言を聞き納得したのか、黒いマントの男は頷き、意外にも素直に謝罪してきたのだ。それまでの強硬的な言動から最もか

け離れているであろう行為を見せつけられ戸惑ったものの、逆にそんな彼に丁重な対応を取られてしまえば、とまどいながらも反射的に恐縮してしまう。

「い、いいんです。気にしてないですから」

「そうか、ならばいい」

短いやりとりだった。感情が欠落しているような素っ気ない態度はおそらく生来のものなのだろう。自分の非を素直に認めてしまうような潔い人柄から決して悪気がないことはわかるのだが、こうもあつさりしていると拍子抜けしてしまう。

鋭い眼光、存在から滲み出る威圧感、そして腰の長剣を見せつけながらも抜かずしてその場を制した男の迫力に圧倒されはしたが、実は彼に対する好奇心の方が恐れを上回っていた。騎士への思い……いや、レイルの心の奥底にしまつてある思いがそうさせていたのである。

ところが、当の本人は実に我が道を歩んでおり取りつく島もないとはいえ、とても話しかけられるような相手ではない。ここまでだった。

「俺はまだなにも頼んでいないが」

訝しげな男の声が。横目で見ると、カウンターに両肘をついている彼の前にビールが並々と注がれた杯が置かれていた。

「こいつは、あたしのおごりです」

フェンソだった。温厚な表情ににこやかな笑みを乗せて男を見ていた。

「彼らは常連なのですが、あまり品がよろしくなくてね。とはいえ、客であることには変わりませんで、どうにもできずに少々困っていたところだったんです。おかげで助かりました。これで、彼らも少しは懲りたでしょう」

肩を竦め、おどけたようにしている店主。これを一瞥した男は、表情を変えず黙したまま杯に手を伸ばしていた。フェンソのささやかな好意を快く受け入れる思いを表すかのように。



「剣士さん、フレアミスからお越しになったんですか？」

ビールを嚙下する男を横目で見てみると、ただでさえ近寄りがたい外見の彼にも臆することなく、相変わらずの調子で談話を続けるフェンソ。思えばまったく性格は違えど、ロイドもどんなお客にも分け隔てなく接していた。長年商いをしているということはどういうことなのかと妙な感心を感じる。

だが、レイルの心をより動かしたのは、例の男が「ああ」と答えたことだ。無愛想なその面持ちから絶対に談話など続けることはないと思っていたため、意外なことに驚いた。

好奇心をかきたててくれる男が口を開いてくれるのならばこれにこしたことはない。なおも話を続ける2人を、レイルはこれ幸いと見守った。

「よくわかったな」

「先の一軒で『聖女』っておっしゃってましたでしょ？　ここいらまで名が届く聖女様なんて、今時分ではフレアミス帝国　ああ、今はフレアミス連合評議国でしたな。そのフレアミス連合評議国建国の功労者で、多くの民を救ったとされている『フレアミスの聖女』様ぐらいですからね。もともと、あたしのこの話も旅のお客さんからの受け売りで、委細については詳しく知りませんが……ま、そういうことです」

「そうか。酒場の店主でもその程度の知識なら、三下風情が馬鹿なことを口にするのも無理はないということか……」

表情は変えていなかったが、男の口調にはどこか悔しげで切ない響きが込められていた。

「フレアミスの皆さんに、好かれてらっしゃるんですね。聖女様は」男を慮ったのか、フェンソによる話題の『聖女』について肯定的な感想が。これに男は、さにもあらんといった様子で頷いていた。

「ごく自然なことだ。彼女、それに彼女を支えたハーキュリー隊がいなければあの国はいずれ滅んでいたろうよ、内憂外患でな。だが、彼女たちがあの国の膿を全て出し切ってくれた。だから今があるし、

皆が彼女たちを忘れない」

「それだけの働きをなされたということは、さぞ剣の腕前も相当なものだったんでしょう」

「相当、などというものではない。彼女はエウロニア一帯で認められる称号を受け継いだ現『剣聖』だ。店主も剣聖号については知っているだろう」

「存じ上げております。剣の道を究極まで極めた者が代々受け継いでいく、剣士最高の称号ですな。ですが、剣聖号の世代交代があったとは今まで知り及びませんでした」

「そうかもしれん。正式に式典等が行われて委譲されたわけではないからな。当のフレアミスでさえ、聖女としての彼女を知っているも剣聖としての彼女を知らん輩は少なくない。国外ならなおのこと窺い知らぬ者も多いことだろう」

男はそこで息継ぎをするかのように杯をあおり喉を潤すと、ほんのわずかではあるが過去を懐かしむかのように初めて表情を和ませ、続けた。

「彼女は本当に強かったよ。俺も腕に覚えがあつたが、彼女は別格だった」

「剣士さん、立ち合つたことがあるので？」

「ああ、初めて見えた時はお互い敵同士だったからな。何度か立ち合い、持てる力を振り絞つて剣を繰り出したが、全て彼女の聖剣に阻まれた。それどころか、その聖剣の餌食になるところだった。斬られなかっただけ幸いというところだろうな」

どこか自嘲気味に語る男はあるが、その表情に悔しさや憎悪は皆無だ。命をかけて戦つた相手なのだろうが、彼の口調には相手に対する敬意と賛辞が窺い知れた。それはすなわち、心から相手

『フレアミスの聖女』を認めている証だろう。

強者のみが知りえるであろう『敵を称える』という感覚にどこか羨ましさを感じつつ、レイルはこの青年剣士がもしかすると相当名のある人物なのではないか、と思い始めていた。

フェンソらの話で『フレアミスの聖女』が比類なき功績とともに恐るべき剣術の達人ということはよくわかった。

では、その彼女と渡り合ったというこの男は。

立ち合ったことを騙るなら、わざわざ自らの力が劣っていたようには口にしないだろう　斬られなかっただけ幸い、などと。だいたい、男の言動を見聞きしているととてもなにかを騙るような人物には見えない。

興味を通り越し、レイルの思いは憧憬へと変わろうとしていた。

「……酒が入ったからか珍しく舌が滑らかになってしまったな。雑談は終わりだ。店主、実は聞きたいことがある」

盛り上がってきたと思った矢先、男は省みたのか不意に昔話を止めてしまう。代わりに口にしたのは、彼がここに来た本当の目的であろう内容だった。それは、胸ときめかせる物語の終焉に落胆したレイルの目を大きく見開かせる。

「人を探している。亜麻色の髪の女性だ。年の頃は20歳ぐらいになると思う」

嚙下したミルクを吐き出しそうになった。男がフェンソに尋ねた人探しの対象　それは至極見知った人間の特徴に合致していたからである。

ただ、男の質問を受け、首を傾げながらも答えるフェンソが戸惑ったレイルの心中を落ち着かせてくれる。

「20歳ぐらいで亜麻色の髪の女性、ですか。この町にも若い娘は多いですし、なにせ街道筋ですからねえ。亜麻色の髪の娘もよく往来しているます。もう少しなにか特徴がありませんかね」

まさしくその通りで、亜麻色の髪の若い女性など別段珍しくもない。そもそもあの彼女といきなり重ねてしまう方がおかしいと、レイルは勝手に納得し、自らを落ち着かせるためにも再びミルクを口に含んだ。

「『ユイリス・レンフィア』、と名乗っているはずだ」

さすがに今回は堪えることができなかった。レイルは白い液体を

思う存分カウンターに吐き出した。

「おいおい、大丈夫かい？ 変なところに飲み込んでしまったのかい？」

突然ミルクを噴出したレイルを心配し、怒るところか優しく声をかけてくれるフェンソ。

「ご、ごめんなさい。ちょっとむせちゃって。あ、お、俺戻らないと。油売ってるって父さんに怒られる」

「おやそうかい。ああ、いいいいいよ、あたしが片付けるから」

作り笑顔を無理やり浮かべて自らを取り繕いつつ、席から立つ。汚してしまったカウンターをどうにか綺麗にしようとすると、店主はやっぱり気にするなと氣遣ってくれた。

「本当、ごめんなさい。おじさん、ご馳走様。またね！」

フェンソの言葉に甘えると、レイルは例の男を視界に入れないよう踵を返してリユルゾ亭を後にした。

急ぎ戻らないといけないことを思い出したことは本当であり、現に足早にテルミト亭へと向かっているが、きっかけとなったのはもちろん男の言葉だった。

あの男はユイリスを捜している。亜麻色の髪の若い娘という特徴だけならまだしも、なんと姓名並べて名指ししたのだ。勘違いの類であるはずがなかった。

立ち居振る舞いはぞんざいだが決して悪い人間には見えない。ただ、過酷な戦場を渡り歩いてきたあの男のような人物と、殺伐とした空気がまったく似合わない明るいユイリスに接点を見出すことができず、困惑する。友人知人がユイリスを探している、という形にはどうしても見えないのだ。

もしかすると昔の恋人かなにかかも 不意に浮かんだ思いに、レイルは胸がちくりと小さく痛むのを感じた。

これまでにない感覚に戸惑うが、すぐに軽くかぶりを振って無理やり打ち消す。

そんなことよりも、彼のことをユイリスに伝えるべきかどうか。

いずれが適切なのかをテルミト亭に着くまでに考えねばならない。  
降って湧いた話に頭を痛めつつ、足取りが重くなりそうになりながら歩を進めるのだった。

違和感を覚えたのは、聞き覚えがある音色が鼓膜を打ったためだ。テルミト亭へと小走りに向かっている最中、あともう一息というところまでの路地へさしかかっている時に当の自宅方面から聞こえてきた音色。それはリュートが奏でる旋律だった。

リュートとは、共鳴口、卵を半分に割ったようなマホガニー製の胴体、その胴体から伸びる短い棹と、途中から後方に折れ曲がった棹の先端から支点を経由して胴体に張られている羊の腸でできた複数の弦が特徴的な楽器である。しかも、弦を指で弾く、というより撫でつけるようにして音楽を奏でるという特性を持っていた。

今はもう辞めてしまったが、ついこの間までテルミト亭には母以外にもルイズという若い女給があり、給仕がひと段落した頃に彼女が客の要望に応えて披露していたのがそのリュートによる弾き語りだった。

どこで覚えたのか、その演奏と歌声は旅人たちの乾いた心を潤し、大層人気だったことは記憶に新しい。度々レイルも心を和ませてもらったものである。

が、当の演奏者はもうこの町にはいない。また、この辺りでリュートを所有している店や人家は他になく、やや甲高い独特の物悲しい旋律をつま弾き出しているのはルイズが残していった我が家のリュート以外には考えられなかった。

とはいえ、両親がリュートを弾けるはずもなく、結局誰にも触られることなくほこりをかぶっていたのだ。それが今、美しい音色を奏でている。

いったい誰が弾いているのだろうか。

不可思議なできごとに釈然としない思いにかられながらも、レイルはたどり着いた我が家、いや、我が店の扉を開けた。

リュートの音色は確かにテルミト亭のなかから奏でられているも

のだった。9割方埋まった店内はむさ苦しい男どもで一杯だったが、やかましいのが身上の彼らにもかかわらず静かに耳を傾けている。

基本的に音楽とは無縁な彼らが神妙な面持ちでいるのはいつ見てもどこか滑稽であり、なんとも言えない苦笑いが込み上げてきそうになるのを堪え、レイルはリュートを弾く奏者の姿を探す。

瞳に飛び込んだのは意外な人物。

店の奥の壁際に置かれた椅子に足を組んで腰かけ、膝上に乗せたリュートの弦を軽やかにつま弾いていたのは、なんとユイリスだったのだ。

演奏に集中するためか、はたまた自らが奏でる旋律に聞き入っているのか、彼女は瞳を閉じたまま軽やかに指を動かしている。

数多くの弦を有し、ただ演奏するだけでも至難なリュートから美しい音色を導き出しているその姿は、昨日今日リュートを弾き始めたのではなく、それなりに経験を積んできたということを雄弁に物語っていた。

美しい音色に聞き惚れ心ここにあらず、という状態になりつつあったレイルだが、むつつりと顔をしかめた父親がカウンターから手招きしている姿を視界の端に捉えてしまい、一気に現実へと引き戻させられた。

回れ右して逃げ出したい衝動にかられるが、実行に移せばどんな酷い目に合わせられるか知れたものではない。被害を最小限に押さえるためにも、ここは堪えるしかなかった。

「どこほつつき歩いてたんだ、この馬鹿息子が」

カウンターへ歩み寄ると、早速辛辣な言葉が向けられてきた。ただ、ユイリスの演奏に配慮してか怒鳴られることはなかった。

「フェンソおじさんのところでお駄賃もらって話し聞いてた」

「また油売ってやがったな。つたくしょうがねえ野郎だ、猫の手も借りてえ時に」

肩を竦めながらも正直に話すと、ロイドは眉間に皺を寄せて目を吊り上げた。が、すぐに鬼の形相を緩める。

「まあいい。ユイリスが給仕を手伝ってくれたからよ、どうかこうにか方がついた。今日ばかりはユイリスに免じて許してやる。後で礼言つとけよ」

意外にも強く叱責されることなく、あっさり赦免されてしまった。いつもなら拳骨の1発や2発、当たり前のように飛んでくるというのに。

虚を突かれて目を瞬かせたが、父親の態度がなぜいつもと異なり軟化しているか、そのからくりに気づく。

確かにユイリスの演奏に氣遣つてるのもあるのだろうが、この短気な父親が怒鳴り散らさずにいられるのは彼の言う通り店の仕事をユイリスが手伝ったからだろう。カウンター近くでゆったりと壁に身を預けてユイリスの演奏に聞き惚れている母親の姿を見れば、ユイリスがどれほど貢献したか己ずと知れてくる。でなければ、母親はいまだに店内を右往左往していたに違いないのだから。

綺麗な人は気難しいという偏見だけでなく、家事も満足にできないし、だいたいがそのようなことは一切しないという偏見を持っていたレイルは、またしても自分の偏狭さに恥じ入る思いを重ねていた。

とはいえ、給仕はともかくリュートの演奏までしているのはどういう経緯なのか。父にその旨を問いかけると、明快な答えが返ってきた。

「ルイズのことを話したから給仕を手伝ってくれたんだが、弾き語りの件も話していたらなんとそれまで言うじゃねえか。なんでも歌とリュートが得意で、路銀が寂しくなってくると町々の酒場で弾き語りをして小銭を稼いで旅を続けたんだとよ」

「それでリュートを」

「ああ。少しでも店の役に立ちたいって言うからよ、とりあえずやってみなつて言ったらこれだ。俺は音楽のことはよくわからんが、ルイズに勝るとも劣らない腕持ってるってのは直感的にわかったぜ。なによりもこいつらが聞き入ってるのがいい証拠だな」



顎をしゃくって店内を示すロイド。その先にはユイリスの奏でる音色に耳を澄ましているむくつけき男どもがいる。

「音楽なんぞくその欠片もわからん奴らを黙らせて聞き惚れさせてるんだからよ、それだけでも大したもんだ」

そう言う彼もまんざらでもない様子でユイリスを見ている。この父親をも籠絡してしまう彼女のリュートに脱帽しつつ、レイルはふと気になったことを尋ねた。

「父さん、ユイリスは歌とリュートが得意って言ったんだよね。今はリュートを弾いているだけだけど、もう歌ったりもしたの？」

「いいや。とりあえず何曲か歌なしで弾いから弾き語ってみるってたぜ。最近リュート触ってなかったから、最初は練習代わりなんだとさ」

なるほど、と頷く。とすれば、彼女の歌声はこれから耳にするこ  
とができるわけだ。

凜とした張りとき愛らしさを併せ持った彼女の声で歌えば、きつと素晴らしい歌を披露してくれるに違いない。いやがおうにも期待が膨らむ。

彼らの思いを受けてか、弾いていた曲が丁度よく終わる。男たちの無骨な拍手と歓声が店中に響き渡り、静から動へと切り替わった感情の盛り上がりが彼らを支配していた。

堂に入ったもので、熱烈な拍手を受けても動じることなく軽く会釈して応えるユイリス。音楽で路銀を稼ぐという常人にはできないことをしてきた実績が彼女をそうさせているのだろう。

レイルも心からの拍手を送っていると、それに彼女が気づいた。どこか嬉しそうに頬を緩め、こちらへ向かって軽く手を振ってくれる。

その愛らしい様に吞まれ、ぎこちない笑みを浮かべて反射的に手を振り返す。すると、そのやりとりを見ていたお客の何人かが思い切り嫉妬を込めてこちらを睨みつけてきた。こうなると浮かんだ笑みも苦笑いに変わらざるを得ない。

男たちの痛い視線を気にしないよう努めながらユイリスへ手を振っている、彼女は小さく頷いて店内を見回し、言った。

「皆さんありがとうございます。それでは、リユートに合わせて『生命の祈り』という歌を歌います。ご清聴いただければ幸いです」とたん、汀にうち寄せた波が一斉に引いていくように、静まり返る。

静寂を見届けたユイリスは再び目を閉じ、ゆっくりと弦をつま弾き始めた。

前奏だろうか、リユートの音色をあらためて皆に堪能させた後、彼女はゆっくりと唇を開いた。

蒼くまばゆい空

希望を映し出して

白く優しい雲

恵みを与えて

はるか緑の野は

癒しを導く

紅く燃ゆる日輪

豊饒の約束

悠久の時が

静かに満ちる

木漏れ日のゆらぎ

葉揺らすそよ風

この大地に生きる

全ての息吹に

儚くも一握りの

幸よあまねく

この大地に生きる

全ての息吹に

永久に安らかなる  
とわ

光よあまねく

歌い終え、リユートの調べも静かに幕を下ろす。

静まり返る店内。身動きすらない男たちに戸惑ったのか、ユイリスは怪訝な表情を浮かべたまま再度会釈をする。

だが、まだ男たちに反応はない。さすがに心配になったのか、探るように皆を見回すユイリス。

「あの、お気に召さなかった……のかしら」

その一言が契機となった。

とたん、割れんばかりの拍手と店の外まで余裕で聞こえてしまうであろうほどの歓声が一斉に沸き起こった。

ユイリスの歌声が気に入らなかったから皆黙っていたのではない。あまりの素晴らしさに圧倒され、言葉を発することすらできなかったのだ。

「すげえ、すげえよねえちゃん！」

「俺あ感動して泣きそうになっちゃったよ！」

感極まった彼らの歓声を聞けば、皆がいかにユイリスの歌に心を揺り動かされているかがよくわかる。店にいた男たち全員が立ち上がり、思い思いに熱のこもった言葉を投げかけ、惜しめない拍手を送っていた。

レイルも音楽について詳しいわけではない。それでも、リユートの腕はともかく、彼女の美声は彼のルイズを遥かに超越していた上、聴く者をその世界に引き込み魅了してしまう奥深さに溢れた歌声だと感じたのは、理屈などでは推し量れない領域で心を揺さぶら

れたからに違いない。いつの間にか、自身も手のひらが痛くなるほどの拍手をしていたことが、なによりも彼女の歌声に心から惹かれた証である。

それにしてもまさかこんな特技がユイリスにあったとは。

なるほど、これならば路銀が乏しくなった時に美声を披露すれば懐を温めることはできるだろう。彼女が女1人で旅を続けてこられた真相に、妙に納得するレイルだった。

『生命の祈り』によって一発で『テルミト亭の歌姫』と客らに認められ、我先にと群がってきた彼らに声をかけられているユイリスの、少々困った表情を浮かべながらも笑顔で応対している姿を何気なく見やりながら、ふと彼らとは反対側に目をやる。

皆がユイリスのもとへと馳せ参じて行ってしまったために、打ち寄せた波が引いた後のようにその一帯は空席だらけになっている。

だからこそだった。1人残っている若い男の姿にすぐに気づいたのは。

痩せ型で頬もこけ気味の男は、年の頃はまだ20歳前後ほどであり、短く刈り込んだ銀髪と蜥蜴を思わせるような細く鋭い目元が特徴できだった。

レイルの体が強張った。

まるで彼の態度に呼応するかのように当の男もレイルを見やったからである。

男は、口元を醜く歪めた。獲物を見つけて歓喜した様を見せつけるかのように。

おもむろに立ち上がると、彼はユイリスと彼女のことで盛り上がっている他の客のことなど見向きもせず、悠然とした足取りでこちらへ向かってきた。

これに、レイルは身動き1つできずに立ち尽くしている。眼差しは男から外すことができない。握り締めた拳は小刻みに震えるえるだけで、振り上げられることはなかった。

自身より頭1つ分大きい男は、レイルのもとまでやってくると視

線も口調も見下ろす形で言った。

「久しぶりだな。元氣そうだなによりだ」

本来であれば、再会を喜びつつ相手の息災を喜ぶ挨拶の言葉。

それも、彼が口にするのとまったく優しさも労わりも欠片もない。

上っ面だけの単なる言葉並べにしか過ぎないというのはいつもながら感情を逆なでしてくれる。レイルは強張って動かない体に歯噛みしながらも、せめてもの抵抗の意を込めて男をにらめつけた。

「そんなに怖い目をするなよ。お前に逢えて俺は嬉しいんだぜ？」

ここのところ仕事が忙しくて、腕がなまって仕方ないと思っていたところだったからな」

男は薄気味悪い笑みを顔面に貼りつけたまま親指を立て、その指先を屋外へと向けた。

「い、今からなのか？」

「今夜は月が明るい。夜の闇は障害にはならないぜ」

降って湧いた話にまともに言葉が出てこない。見透かしたように鼻で笑い、男は続けた。

「わかってるよな、自分の立場。ただでさえあの娘の件で譲歩してやってるんだぜ？ ま、俺はかまわないけどな、この店には新しい女給が入ったようでもあるし」

男の視線がにわかに動く。眼差しの先には、客たちに囲まれた美声の歌姫が1人。男の意図がなにを指し示しているかはすぐに理解できた。

「わかった、わかったよ。だから、彼女にも、ユイリスにも手は出さないって約束しろ」

ユイリスまでこの男の脅威にさらさせるわけにはいかない。レイルに選択権は一切存在していなかった。

「ほう、ユイリスって言うのか、あの女」

レイルの憤りなどまるで眼中にないかのごとく、男の視線はユイリスに向けられたままだ。

怒りが男に対する苦手意識を上回った。固まったままだった腕が

自然と降り上がりかかる。

「おいおい、こんなところでやるのか？ 彼女に迷惑かけちまうぜ」

男は困ったように 実際には微塵も困ってなどいないに違いないのだが 肩を竦めると、顎をしゃくってユイリスの方を指し示す。

彼女を巻き込まないと決めた以上は、今ここで揉め事を起こすのは得策ではない。なにより両親にまで知られてしまう。頭に血が昇っていたためにカウンターにいる父親のことを失念していたことに気づき、恐る恐る横目で見やる。

レイルの決意に対して天が味方してくれたのか、はたまた邪な存在の気まぐれか、父はこちらのやりとりに気づいた様子なく、ユイリスと彼女を囲んで騒いでいる客たちの様子を面白そうに眺めていた。

安心すると幾分冷静さが戻ってきた。レイルは振り上げかけた腕を下ろした。

とはいえ、安息の時間が戻ったわけではない。彼に選択肢など与えられていなかったのだから。

「とにかく、今夜は付き合ってもらうぜ」

冷たい現実をそのまま表しているかのような物言いだった。踵を返してテルミト亭から出て行く男の背中、有無を言わさぬ壁となつて存在していた。

力を込めた拳を握り直すと、皆に気取られぬよう注意を払い、レイルは男 ゲイン＝ガルドの後に無言で続いた。

満天の星空の真ん中に、真円を描いた満月がことさら存在感を誇るようにして浮かんでいる。夜空の王のような風格に溢れた丸い天体の美しい姿をそのまま見とれていた気持ちにかられるが、体中の傷に冷たい夜風が撫でつけたことで走った鋭い痛みによって、幻想的な星空とは真逆の現実へと引き戻される。

両手両足を投げ出すようにしてギョーム河の河原に仰向けになつて倒れていたレイルは、木剣で打ちつけられた全身の打ちみの痛みを堪えながら、ゆっくりと上体を起こした。

「どうした、もう終わりなのか？ 早く立てよ」

体を起こすと正面にはグエインがいた。瞳に嗜虐的な光を灯した彼は、己がレイルのことを痛めつけたにもかかわらず、まるで他人事のように立ち上がることを強制していた。

「こちとら体がなまって仕方ないと言つたろう。はいここまでつてのはいささか早すぎるってもんだ。もう少し楽しませてくれよ」

余裕に溢れる様を体現するように、一切構えず手にした木剣を肩に担ぐようにしているグエインの言葉には、皮肉という香辛料がたっぷりとまぶされていた。

その程度ならば散々聞かされてきたためにいまさらどうということとはなかったのだが、彼が立て続けに発した台詞は看過できるものではなかった。

「約束だろ？ 『果し合い』に負けたくせに、ずうずうしくも寝言を漏らす誰かの顔を立ててやってるんだ。それとも、もう誰彼はばからずにおまえの可愛いミスリイをいただいてもいいってことなんだな？」

「誰ももう終わりって言つてないだろ！」

はらわたの煮えくり返る思いが体中の痛みを上回り、傍に転がっていた自身の木剣を引っつかむとレイルは跳ね起きるようにして立

ち上がった。

木剣の切っ先と憎悪に満ちた眼差しをグエインに叩きつける。

「おお怖いねえ。でもよ、そうこなくっちゃな」

まったく恐怖心など感じていないだろうに、肩を竦めて見せるグエイン。その目は歓喜に満ちていた。

許せない。

レイルの体は不敵な男に向かって飛び出した。

渾身の力を込めて右上段から木剣を繰り出す。

男は唇の端を歪めて待ち受けていた。

木剣が空を切る。

叩きつけられるべき相手を失った切っ先が大地をえぐり、攻撃が失敗したと悟った時はもう遅かった。

嗜虐的な笑みを満面に浮かべた男の顔が視界一杯に広がったかと思つと、次の瞬間肩口から凄まじい衝撃が全身を貫いた。

あまりの痛みに膝が折れ、踏ん張ろうとする意思が湧き起こる間もなくレイルは前のめりに倒れ伏した。

「残念だったなあ。えれえ気迫だったが、そんなもんだけじゃ相手は倒せないぜ」

上の方から嘲笑が響いてくる。すぐにも立ち上がって、再度木剣を叩きつけたかった。

それは虚しい願望だった。彼の肉体は今の一撃を受けたことにより限界を越えてしまったのだから。もはや、体の自由は効かなかった。

せめてグエインをひと睨みしてやらねば収まりなどつかない。このまま大地を舐めるだけというのはあまりにも惨めだ。

首をほんの少し傾けて見上げる動作にもかかわらず、体の自由が利かなくなると驚くほどの労力を要した。

それでも懸命に首を傾けようと、そのことに集中していたからだろうか。

グエインの嘲笑がいつの間にか止んでいたことに気づいたのは、



それまでの余裕などどこかへ捨ててしまったかのように驚愕に表情を凍りつかせ、木剣を振りかざしたまま全身を強張らせてた彼の姿が瞳に映りこんでからのことだった。

答えはすぐに判明した。

なぜならグエインの喉元には、細いながらも木剣ほどある長さの木の枝が微塵も揺らぐことなく突きつけられていたからである。

ただでさえ驚くべき光景ではあったが、耳をついた言葉はレイルをさらに驚かせた。

「そこまで。もう彼はなにもできない」

女の声。それも、聞きなれた女性の声だった。

視線をグエインの喉元から細枝を伝わせていくと、聞こえた声に違わぬ人物が月明かりに照らし出されていた。

いつも柔和な微笑みをたたえていたユイリスの横顔は、それまで積み重ねてきた彼女の印象を全て打ち砕いてしまうほどに冷徹なもの一色で染められていた。一切の妥協や反論を許さない、毅然とした意思の力が彼女の全身から放たれていることは、疲弊した意識のなかでも感じ取ることができた。

今の自分でもわかるのである。であれば、氷の意思を直接ぶつけられているグエインはどうか。油汗をたらし、小刻みに震えていることから答えは明らかだった。

にもかかわらず、彼の体が弾け飛ぶようにしてあとずさったのはほとんど反射的なことに違いなかったが、その行動は徒労と終わる。瞬きするほどのほんの少し前と同じ光景が繰り返されていたからだ。細枝の先から逃れようとしたものの、グエインの喉元にはユイリスの氷の意思が突きつけられたままだった。彼の逃げ足など足元にも及ばない驚くべきほどの反応を見せ、ユイリスは先ほどと変わらぬ光景を再現したのである。

いや、完全な再現ではなく若干の変更があった。

先ほど、触れるか触れないかの距離でグエインに突きつけられた細枝の先は、わずかではあるが今は彼の喉元にめりこんでいたのだ

から。

「これ、ただの細い枝だけど、私ならこれでも貴方の喉笛をたやすく貫くことができるの。嘘か誠か、試してみる？」

とんでもないことを事も無げに言つてのけるユイリス。こちらに背中を向ける形でゲインを追い詰めていったために彼女の表情は窺い知れないが、あの冷然とした表情のまま彼に言い放つたであろうことは容易に想像できた。

なぜなら、あれだけ傲慢な態度を続けていたゲインが、なにも言い返すことができずにととう腰を抜かしてその場に尻餅をついてしまったのだから。

いや、彼女にあの動きで細枝を突きつけられれば、大抵の人間はなにもできずに圧倒されるに違いない。無茶なことに聞こえる彼女の言も、本当に為しえてしまつたのではないかと思わされるほどに。いったい、ユイリスは何者なのか。

剣術を修める段階になど到底及ばぬ今のレイルでも、ユイリスの体捌きが尋常ではないこと、あのような動きはなにも知らない市井の女性になど逆立ちしても真似できないことは理解できる。

ゲインに袋叩きにされた傷の痛みも忘れ、微塵も臆する様子のない彼女の背中を、レイルは惹きつけられるように見入っていた。すると、ゲインが戦意を喪失したことを見て取つたからか、こちらを振り返つた彼女と目と目が合う。

あの冷徹な眼差しを向けられるのかと一瞬竦んだものの、それが杞憂であることはすぐにわかった。それまでの、感情の欠片も感じさせない表情などあたかも幻だったかのように、彼女は至極心配気な面持ちを向けてきたのだから。

「レイル、しっかり」

細枝を放り捨てて小走りで駆け寄つてきた彼女は、膝を折つて座りこみ、ゆつくりと上体を抱き起こしてくれる。そのまま自分の膝上に優しく載せてくれた彼女は、次に体のあちこちを確認するかのようになんとそつと触り出した。

どのみち体の自由が効かないので為すがままにさせていると、ユイリスは肩を撫で下ろしてつぶやいた。

「よかった。やっぱり折れてなかったわ、貴方のここの骨」

安心したもののそれまでの心配がたたたたたようで、安堵のため息を漏らしたユイリスはレイルの鎖骨を指さした。そこは最後にグエインから強烈な一撃を受けた肩口からそう遠くなかった。

「他の傷も数は多いけど、打ち身で済んでる。折れたりはしていないから。大丈夫、きつとすぐによくなるわ」

彼女の指摘には迷いがなく、的確のように思える。確かにありえない方向に腕や足は曲がっていないし、骨を折ったことはないために折れた痛みというのはわからないがそこまで酷い激痛というのも感じなかった。

色々と彼女に尋ねたいことがあったもののそれらは頭のなかで錯綜し、ようやく口にすることができたのは至極単純な問いかけだった。

「どうして、ユイリスがここに？」

「お店での貴方と彼、尋常じゃない雰囲気だったから。心配だったから、貴方たちが外に出ていった後どうにか私もお店を抜け出して探したのよ。でも、すぐに追いかけられなかったからなかなか貴方たちを見つけれなくて。けど、間に合ってよかった」

言って、彼女はようやく強張った表情を緩め、困惑と安堵が入り混じったような微笑みを浮かべた。

ユイリスの様子から、彼女が心から気にかけてくれているということがわかる。素直に嬉しく思え、傷の痛みも引いていくような気がしたが、それも束の間のこと。次に彼女の唇が紡ぎ出した言葉は湧き上がったしばしの安寧を根こそぎ吹き飛ばす十分な威力を持っていた。

「それで、なぜこんなことに？」

当然の問いかけではあった。

逆の立場であつたら自分も同じ台詞を吐くだろう。

ただ、それは今最も耳にしたくない台詞でもあった。ユイリスの唇からこぼれた問いかけは、まさに忌避したい台詞そのものだったのである。

できるのであればこのまま黙っていたかった。

だが、彼女はそうすることを許してはくれなかった。口調こそ優しかったが、こちらを見下ろしているユイリスの瞳には一切の嘘やごまかしを許さない光が灯っていたのだから。

もはや言い逃れることは叶わない。レイルは観念し、これまでの全てを打ち明け始めた。

ことの発端は半年ほど前、当のグエインとリウルゾ亭の当主であるフエンソの娘ミスリイの間で起こったいざこざだった。

もちろん2人に面識などはなかったのだが、サイレアを跨ぐ街道を利用している隊商の1人としてこの町に立ち寄ったグエインが、たまたま町外れで出会ったミスリイに目をつけてちょっかいを出したのがきっかけとなった。レイルはその場に偶然出くわしたのである。

当然のことながらミスリイは彼を拒絶していたのだが、それでも執拗に迫るグエインの姿を見、レイルは座視して看過することなく2人の間に割って入った。

もつとも、ミスリイをその場から逃がすことには成功したが、その道の手練でもないのに歳も体格も上の大人の男相手に立ち向かって無事に済むはずもなかった。レイルはグエインに叩きのめされてしまった。

この時は素手で立ち向かったのだが、善戦空しく先ほど同様に大地に大の字になって天を仰ぐこととなったのである。

それでも彼は諦めず、ミスリイに手を出すなど息巻くと、思いもかけない提案がグエインから持ちかけられたのだ。

すなわち、ミスリイに対して余計な手出しをしない代わりに、グ

エインが属している隊商がサイレアに立ち寄る度に剣術の相手になれ、という条件だった。

グエイン曰く、最近剣術に入れ込んでおり仕事の傍ら木剣を振るって修練しているとのこと。

ただ、より実戦を意識した修練をするには相手がいた方がいいに違いないのだが、隊商にはその相手がいないという。そこで、修練の相手としてレイルを求めてきたのだった。

力ではグエインに敵わない。彼の提案を足蹴にしてもミスリイを守ることはできない。

彼の修練の相手になる　レイルはその選択肢を受け入れたのである。

大人の助けを求めることも考えなかったわけではない。

しかし、レイルは男としての矜持が、座して負けたままにいることを許さなかったのである。彼はまだ大人ではなかったが、もうただの子供でもなかった。

こうして、グエインとの間に結ばれた取り決めに従い、彼がサイレアに立ち寄る度にレイルは剣術の相手を務め続けてきたのである。「そう、そんなことがあったの……」

レイルの上体を抱き起こし膝上で支えた状態のまま黙って彼の話を聞いていたユイリスは、表情を曇らせながらそうつぶやいた。と、彼女はなにか続けようとしたものの躊躇する素振りを見せた。

それでも意を決したように唇を開いた彼女からの問いかけは、今回の一件が暴露した時点でいずれ明らかになることであり、もはやレイルにとつて動揺することではなかった。

「ねえ、レイル。貴方が日々鍛錬を積んでいた目的っていうのは」「その通りさ、あいつに勝つためだよ。取り決めたあの日　半年前のあの日から欠かさずに」

自分で決めたからには、誰の手も借りずにこの問題を解決したいそれが彼の信念となり、以来、彼は彼なりにグエインをねじ伏せて全てを取り消させるための努力を続けてきたのである。残念な

がら今のところはその努力も実を結ばずにいたが。

「それじゃ、貴方から騎士になりたいと半年前ぐらいに打ち明けられた、とご両親から聞いていたけど、騎士のお話は鍛錬のことがお2人に万が一知られた時のさながら逃げ道？」

真剣な眼差しを向けて来るユイリスの鋭い指摘に、レイルは素直に頷いた。

親に今回の一件を知られたくない以上は、もし鍛錬していることが明らかになってもその理由づけを事前に匂わせておけば色々詮索されることはないだろうと考えたためだった。

グェインとのがなくとも、元々レイルには心躍らせる武勇伝や強い剣士への純粋な憧憬が多少なりともあり、その様子を両親は見ている。突然騎士への道を切望したとしても、驚きこそすれ意外には思われないという布石もあった。

「この一件、ミスリイさんには？」

「親にだって言っていないんだ。ミスリイにだって言うもんか。これは俺自身が選んだ道だから。誰にも頼らないで片付けるって始めたことなんだ。だけど、ユイリスに助けられちゃったもん……情けないよな、俺」

絶対にどうにかしてやると始めたことだったが、結局なにも進展しないまま今日までできてしまった拳句のこの結果であるのは動かし難い事実だ。

悔しかった。自然と手に力が込められ、拳を握り締めた。唇をかみ締め、伏目がちになる。

不意に覚えのある柔らかい温もりが頬を包み込んだ。

目を見開くと、全てを受け入れてくれるような優しい微笑みを浮かべたユイリスがこちらを見下ろしている。頬を包み込んだのは、温かい彼女の手のひらだった。

「そんなことないわ。貴方は情けなくなってる。だって、まだ終わったわけじゃないでしょう？」

そう言っただけで彼女は急に茶目っ気を出したかのように片目をつむっ

て見せていた。

「いったいどういうことなのか目を瞬かせていると、彼女は『まあまかせなさい』という風に頷いた後、グェインへと視線を移したのである。」

「話は聞かせてもらったわ。レイルと貴方の間で結ばれた取り決め、ことの経緯はどうあれレイルが同意している以上は『有効』と私も認めます。でも、こんなことはいつまでも続けてはいられないと思うの。そこで相談なのだけど、1つ取引とイかないかしら？」

なにを思ったか、いきなりグェインに取引という提案を投げかけるユイリス。予想しなかった彼女の言動に、レイルは口を大きく開けたままにも言うことができなかった。

「日をあらためて貴方とレイル、2人の手合いの機会を設けること。そして、そこでもしレイルが貴方を圧倒して事実上の勝ちを収めたら、ミスリイ嬢はもちろんのこと、彼にも今後一切の手出しをしないということ。どうかしら、受けてくださる？」

なにを頼んだわけでもないのに彼女は独断で次から次へと取り決め事項を並べていく。

事実として、それらはこちらにとってのみこれ以上のないうまみのある提案だった。ただそれは、相手が受け入れてくれた場合に有効なのであつて普通に考えて受けいられるわけがなかった。

ユイリスに圧倒されてから腰を抜かして呆然とし、これまでの過程を彼女に伝える間も魂を抜かれたようにしていたグェインだったが、彼女の提案には我を取り戻し、さすがに目を剥いていた。

「そ、それじゃ俺が勝つたらどうするんだ。あんたの話だと一方的な取引じゃねえか」

もつともな反応だった。ユイリスの提案した取り決めは、そのままであればグェインにとってなんら得はないからである。彼が勝つた場合について言及されていなかからた。

グェインの指摘は的を得てはいるが、言うがままに彼が勝った場合の話しまで進んでいくのであればもう後戻りできなくなってしまう

う。

ユイリスが止めなければレイルはグェインにそのまま弄られていたのであり、すなわち2人の現在の力関係を如実に表している。このことを考えれば、日をあらためたとしてもレイルがグェインに勝つなどという楽観的なことを誰が思いつくというのだろうか。

これ以上話が進むことを止めなければならない。慌てて声を上げようとした彼を遮り、ユイリスはとんでもないことを口にしたのである。

「貴方が勝つたら　そうね、貴方の好きなようにしていいわ」  
「ユイリス!？」

レイルは声を裏返して彼女の名前を叫んだ。当たり前である。ユイリスは涼しい顔をして、とんでもないことを表明したのだから。自分が立ち入る機会をつかみ切れない間に事態はとんでもない方向へと進むうとしてしている。立て続けの驚くべき事態に目を白黒させていると、すっかり余裕を取り戻したグェインも彼女の提案を受けて即座に切り替えしてきた。ユイリスに負けず劣らない要求を突きつけてきたのである。

「じゃあ、あんたには俺のものになってもらうぜ」  
無茶苦茶な要求にも驚いたものの、それ以上に意外だったのは当のユイリスがさらに涼しい顔　それこそ親しい友人からのたわいのない頼まれごとを2つ返事で受けるかのような顔で、  
「ええ、かまわないわ」

などと答えたのである。これにはたまらず声を張り上げた。

「ちょ、ユ、ユイリス!　待ってくれよ!」

止めようとするが、彼女はこちらを一瞥して『大丈夫よ』と小さい声で制すると、再びグェインへと視線を戻した。

「俺は明日ここを経つが、一週間後また仕事で立ち寄る。立ち会いの日はそれでいいか？」

一方のグェインは既に立ち上がり、何事もなかったかのように服についた埃を払いながら先ほどの無様な姿などまるで嘘のような口



ぶり。そんな彼に対し、ユイリスも何事もなかったかのごとく至極平然と頷いている。

2人の間であつという間に話が進んでまとまってしまったことに異を唱えようと身を乗り出すと、目敏いグェインに咎められた。

「見苦しいぜ、レイル君よ。女に守ってもらっておいてごたごためかすな。ま、短い時間でせいぜい腕磨いておくんだな」

見下した笑みを浮かべながら吐き捨てたグェインは、最後にユイリスへと『待つてろよ、俺のユイリス』などという気色の悪い捨て台詞を残して踵を返した。

去っていく仇敵の背中を苦々しく見つめていたが、すぐに我に返り、全身の打ち身の痛みなどおかまいなしで体を起こしてユイリスから離れたレイルは、彼女と真正面から向き合った。

「どうしてだよユイリス。どうしてあんな取り決め交わしちゃったんだよ。見てただろ？俺はあいつに叩きのめされてたんだよ！？」

これまでだつてそうさ。それなのに、勝てるわけないだろ！？」  
最初は冷静でいようと思ったものの、言葉を連ねているうちに段々と熱を帯びてしまう。

先ほどグェインに叩きのめされたこと、これまでもそうだったことを顧みると虫唾が走ったが、どんなに悔しくても目を背けても事實は事実。現時点でレイルがグェインに勝てる要素などはなにもない。

にもかかわらず、ユイリスは勝手にグェインとんでもない取り決めに交わしてしまった。あまりにも無謀すぎる取り決めであり、もしレイルが負ければ彼女はグェインの手中に落ちてしまうのである。ただレイルが負けるだけでは済まされないのだ。自然と声を荒げてしまうのも無理のないことだった。

ところが、当のユイリスは先ほどからずっと涼しい面持ちで、自分がないに取交わしたかも自身の今置かれている状況がいたいどれほど危機的であるかもまったく意に介していないようだった。

「ユイリス！ どうしてそんな落ち着いていられるんだよ！？」

「それはそうよ、レイルが勝つんだから。レイルにもミスリイさんにも、そして私にも、彼は指一本触れることはできないわ」

「どうしてそんな、そんなことが言えるのさ!？」

彼女がなおも落ち着き払っているの、レイルはさらに強く迫った。

返ってきたのは、射抜くように真っ直ぐと向けられた双眸と、意外な言葉だった。

「言えるわ。だって、貴方は本当に強いから」

まったくもって予想もしていなかったことを言われ、今日何度目の絶句を味合わされるレイル。そんな彼をよそに、ユイリスは少しも揺るぎのない口調で、

「私にはわかるの。貴方が持っている『力』のことを」と言い切った。

どうしてそこまで言い切れるのかその根拠がまったくわからず、レイルが言葉を失ったまましていると、ユイリスはまぶたを伏せ、おもむろに立ち上がった。

「確かに、今のままでは彼には勝てないでしょうね。でも、貴方が本来持っている力は彼を凌駕しているわ。これまで勝てなかったのは、その力を有効に引き出せていなかったから」

再びまぶたを開き、天上の月を見上げながらなにかを確かめるかのようにゆっくり、静かに語る。満月と美しいユイリスの姿が重なり、ついレイルはその光景に見入ってしまうが、彼女の言葉から彼女が先ほどなにを為しえたかを思い出す。

「ユ、ユイリス、いつたい君は……。そ、そうだ、グエインへのあんな細い枝での突きだって、普通の女の人にはできないよな……」

勝てることなどできずとも、何度も対決したことでグエインの力量はよくわかつている。一流の剣士などには及ぶべくもないだろうが、町の不良者などよりはよほど優れた剣を使う。剣術に傾倒していると吹いているだけでなく、実際修練を重ねている結果に違いない。

考えるまでもなく、ただの市井の女がどうこうできる相手ではなかった。

にもかかわらず、ユイリスはグエインを遥かに圧倒し、つけ入る隙をまったく与えなかった。あのグエインが腰を抜かしていたのである。その光景は今思い返すと実に胸のすくものではあるが、それとユイリスの一件はまったく別のことだ。

そもそも、彼女はあくまで旅の人であり彼女の経歴は謎に閉ざされている。

先日、例のトランクをギョーム河の川縁に取りに行った時、彼女の過去を聞ける機会があつたがあえて聞かなかった。人それぞれ、聞かれたくないことがあるという父親の教えに共感していたのだから。

今は状況が違う。どうして彼女がそこまで自分のことを押すのか、その根拠はいつたいどこからきているのか、そしてそこまで押せる彼女とは何者なのかを確かめねば前へ進むことはできない。

彼女からの答えを求め、レイルは河原に座り込んだままユイリスを見上げた。

月を見つめていた彼女もこちらの視線に気づき、空色の瞳を真っ直ぐに向けてくる。そこに、一切の揺らぎはなく、問いかけているこちらがまるで詰問されているかのような気になってくる。

固唾を飲んで反応を窺っていると、彼女は形のよい唇を開き、少しもよどむことなく語り始めた。

「私はただの旅の女よ。でも、女の1人旅は危険が大きいわ。であれば、自然と自分で自分の身を守る術を修める努力をするのが最低限の身だしなみというもの……わかるでしょ？」

確かに彼女の言う通りである。1人で諸国を回る旅の女性が、まったく自身を守る術もないという方がおかしい。

「その点、私は貴方よりも多くの経験を積んできているし、実戦も経験しているわ。だからこそ、貴方が持つ力もわかるのよ」

繰り返し重ねられる言葉。ユイリスはレイルに対してしきりに「

力』があるという。しかもそれはゲインを凌駕してしまうほどである。

ユイリスには戦う力が確かにあるのだろうし、それはゲインに対して証明してみせた。その彼女であれば、他人の力を見抜くこともできるのかもしれない。だが

「でも、俺にはそんな力……わからないよ」

それがレイルの正直な気持だった。

いくら言葉で言われても、実際問題当の本人には実感のつかめない話に他ならない。なにより、いくら努力してもことごとくゲインに返り討ちにされている現実を見ればユイリスがどんなに持ち上げてくれてもそれを安易に信じるなどできるわけがない。

伏し目がちになり、肩を落としてうつむく。

と、月明かりを遮るように目の前に人影が立ちはだかった。

「彼と戦うことを選んだのは他でもない、貴方でしょう？ そのために酷い目にあっても、これまで頑張つてこれたんでしょ？」

正論が胸を突いた。今回、いつになく徹底して叩きのめされたために意気も消沈していただけになおのこと胸に迫る言葉だった。

だからこそ、自分を客観的に省みることができた。確かに今日は酷くやられたが、だからといってこれまでの努力を自分自身で否定することなど馬鹿げている。

なにより、彼女の言う通りゲインと戦う道を選んだのは他ならぬ自分なのだ。であるのなら、その道を追求するのが筋というものではないか。それこそ、あらゆる手を尽くして。唇をかみ締め、レイルは顔を上げた。

腰をかがめ、両手を両膝に当ててこちらを覗き込んでいるユイリスは、先の厳しい物言いが嘘のような優しい微笑みを浮かべて、

「だから、ね？」

と一言。

そこまで言われて奮い立たないほど、レイルは腰抜けではない。弱気になっていた自分の心と決別するかのように表情を引き締め、

彼は亜麻色の髪の麗人を見つめ返しながら頷いた。

「その意気。貴方の勇氣、最後まで諦めないという心、どうか忘れないで。大丈夫、私がついていくから」

輝く太陽のように明るい笑みを一杯に浮かべたユイリスは、威勢のいいことを言いながら身を起こしていた。少し前まで悲壮感に埋もれていたレイルだが、現金なことに彼女のその笑顔に魅了されて見とれてしまう。もっとも、次に彼女が放った一言によってあっさり我に返らざるをえなかったが。

「私にまかせて。今度はレイルが彼を引きずり倒して叩きのめせるようにしてあげるから」

白い歯を見せて茶目っ気たっぷり大言を吐いて笑うユイリスに対し、レイルは信じられないものを見たかのように目と口を大きく開いて言葉を失うほかなかった。

私にまかせて 誰あろう、ユイリス「レンフィアが口にした言葉である。

次から次へと大言を吐いたのは伊達ではなく、グエイン「ガルドとの一件から一夜明けた早朝から彼女の指導は開始された。

朝靄がまだそこらに立ちこめる、まだ人々が寝静まっている時刻。レイルとユイリスはギョーム河岸へと赴いていた。

元々この時間、レイルは半年前から散歩と称して毎朝ギョーム河岸へ出向いては秘密の修練を積んできていたのだ。そこにユイリスが帯同するといっても散歩の道連れということで両親への言い訳はついた。

加えて漁もして店の食材を手に入れろという理由をでっち上げ、さらに数時間を稼ぐことに成功。反面、量の多寡はあれど実際に獲物を持ち帰らなければならないという負債を負うことになってしまったが、それは心配ないとユイリス。

実際に修練するのはレイルだから、私が釣りすればいいでしょう？ と至極簡単に言ってくれる。

そんな簡単に釣れるもんか、と釣りを愛好する身ならではの文句が口を突いて出そうになったが、戯言はすぐに喉元までも出なくなっただ。

ユイリスが指導する修練が始まったからだ。

「剣の構えはなかなかのものね」

「武勇伝を聞かせてくれた元騎士のおっさんから基礎のさわりを教えてもらったからさ」

言われるがままに携行した木剣を構えると、ユイリスはあたかも感心したかのごとく笑顔を見せた。

しかし、それは悪戯な魔女の笑顔だったことにすぐに気がつくこととなる。

「それじゃ、ちょっと打ち込んでみるわね」

えっ？ と彼女がなにを言っているのか理解できずに目を丸くするレイル。

言葉の意味を理解する間もなく、木剣は乾いた音とともに彼の手から大空高く舞い上がっていた。

手が恐ろしく痺れている。当然だ。握りしめていた木剣をユイリスが同じく手にした木剣で思い切りなぎ払い、弾き飛ばしたからである。

なんの予告もなしに行われた上、あまりの手の痺れに呆然としてしまったが、弾き飛ばされた木剣が河原に落下した音が契機となって我を取り戻す。

「い、いきなりなにすんだよ!？」

「あら、いくら手合いだからって真剣勝負には違いはないわ。取り決めがあっても油断した方が負けるのは自明の理よ。修練はもう始まっているんだから、常に意識を張りつめておかなければいけないわ」

「そ、それにしてもいくらなん」

レイルは最後まで抗うことができなかった。

先ほどまでの笑顔がまるで嘘のように凍りつくような冷めた瞳がこちらを見据えていたのだから。

「レイル、私が貴方は一週間で彼に勝てると言ったのはね、馴れ合いを一切なくしてそれこそ死ぬ気で修練するという前提を踏まえて言ったのよ。どんな理不尽なことでも乗り越えて心と体を虐め抜いてこそ、貴方の持つ潜在能力は初めて花開くわ。私の言っていること、間違ってる？」

言い返せない。多少強引とはいえ、彼女の言動は目指すべき方向を違えていなかったのだから。

だが、彼女が次に放った言葉には即反応する。そうでなければ、自分はここに立っている意味などないのだから。

「彼に勝ちたくないの？」

「勝ちたいさ!」

試すような眼差しを向けてくるユイリスに対し、拳を握りしめ、視線を逸らすことなく見返した。すると、こちらの意志を押し量るかのように黙っていた彼女だが、不意に相好を崩した。

「結構、男の子はそうでなきゃ。それに、レイルに頑張ってもらわないと、私、あの彼の慰みものになっちゃうわよ」

満足したように澄まし顔で頷いているユイリス。

さすがに呆れて、それは自分が言い出したことだろ、という文句が喉まで出かかったが、堪えて何も返さない。彼女の助け舟がなければ負け続けの泥沼から抜け出さすきっかけさえつかむことができなかったのだから。

それに、ここで文句や愚痴をたれることは今直面している問題からただ逃げることにしかならない。今はユイリスを信じ、彼女についていくしかないのだ。

弾き飛ばされた木剣を黙って取りに行き、再びユイリスに向かって構えを取る。

これに、少し驚いたような表情を見せた彼女だが、それはすぐに微笑みに変わっていた。

見当違いなのかもしれないが、彼女の微笑みはどこか自身の頼もしさを感じてくれたような色を湛えていた。

ユイリスの修練は初日から過酷を極めた。

まず、木剣の素振り千本。回数も尋常ではなかったものの、それ以上に一振り一振りについての正確さを徹底することについて特に厳しく指導された。

脇を締め、振り上げた木剣を最短距離で鋭く振り抜く。簡単なように毎回正しい形を維持するのは至極難しい。少しでも形が崩れたり剣筋が揺らいだりすると、すかさず注意を受けた。

それでもどうにか終えた後に待っていたのは、地獄の体捌き修練だった。



まずは下半身の動きが大事と、決められた順番での足捌きをとにかく何回も繰り返し返させられた。同じ動作の反復も苦痛だったが、それを重ねる体力の問題もあった。

不幸中の幸いは、元々恵まれた体力を持っていた上にこの半年の独自修練が生きていた点である。走り込みによって下半身の地力がしつかりついていたために、どうにか彼女の指導にも耐えることができたのだ。並の少年ならばとうに根を上げていたに違いなかった。足捌きの次は上半身も使った全身での体捌き。

小枝を結んだロープを巨木の枝からおおよそ上体の高さにくるよういくつもぶら下げ、その下に立つ。そしてユイリスが長い棹で次々と小枝を叩いていくのだ。

当然ながら小枝は不規則に揺れまわり、一群の真下に立っているのだから当然それらがぶつかってくることもある。これを教え込まれた体捌きの基本姿勢を保ったまま全てかわすという、過酷を極める修練だった。

ぶらさがっている小枝も全てが同じ高さにあるわけではない。例えば目線の高さの小枝をかわしてもそこだけに気を配っていると、次に腰辺りへ小枝が迫ってくるともうかわせない。

小枝だけに当たってもほとんど痛くはないが、修練の意義をまっとうするために消耗する体力は尋常ではなかった。結局ほとんどかわせないままユイリスから休憩の指示が出た時には、既に足腰が立たなくなっていた。

ところが、ユイリスの指示はあくまで休憩であり、決して修練の終了とは言わなかったのである。

そう、この後に恐怖の実戦修練が待っていたのだ。

実戦修練に際して、ユイリスから出された課題はただ1つ。

素振りと体捌きで学んだことをとにかく忠実に守って打ち込んできなさい。彼女はそれだけを口にする、至極自然体で木剣を構えた。

その美貌を除けば、どこにでもいるごく普通の市井の女性にしか

見えない彼女が手馴れたように木剣を構えている姿は、何も知らなければ誰もが激しく違和感を抱くだろう。

一方、レイルは彼女がごく普通の女性などという概念をもはや捨てていた。

グエインと対峙し彼を圧倒したユイリス、素人には及びもつかない過酷な修練を次々と与えてくるユイリス、そして一見自然体に見えてどこからどう打ち込んでいいかわからないほど隙のない眼前のユイリス。

彼女がただ者ではないと証明する最後の仕上げは、この実戦修練だった。

隙はなくとも打ち込まねば修練にもなにもならない。逆立ちしても彼女にかなわないのは百も承知で、与えられた彼女の言葉を意識しながらもレイルはユイリスへと立ち向かった。

教えられたばかりのこと　剣の扱い方を忠実に再現し、力一杯打ち込む。

両腕に強烈な衝撃が走り、危うく木剣を弾き飛ばされそうになった。力を込めてどうにか情けない事態は回避したが、打ち込んだはずの木剣は明後日の方を向いていた。

ユイリスが己の木剣でこちらの目一杯の打ち込みを振り払ったのだ、それも片腕で。

呆氣に取られそうになるも、そんな暇はなかった。

木剣を振り払った後の彼女の腕は、緩い楕円を描いて戻ってくるなどというなまやさしい軌道を描かず、鋭角に切り替えして再び迫ってきたのだから。

慌てて避けようとするが、気がついた時には左太ももに彼女の木剣がめり込んでいた。

激しい痛みが体の芯を貫き、意図せず片膝をついてしまう。それでも、決して痛いとかんだり、弱音を吐いたりはない。

「レイル、体捌きは？　今のは左足を引いてかわすか、手首を捻って木剣で受けるかしなければいけないわ。真剣なら今の一撃で貴方

の足、斬り落とされていたわよ」

木剣を支えにしてどうにか立ち上がると、待っていたのは情け容赦のない指摘だった。いつものユイリスの面影など一切なく、いたわりの言葉も一言すらない。

だが、それも全て自分のことを考えてくれているからこそなのだ。手厳しい指導にすぐに根を上げ、不満をぶちまけるような腐った性根を持っていないレイルは、彼女の思いを無駄にしないためにも痛みを堪えて立ち上がった。

なにくそ、と己を励まし、今度は力加減を調整して彼女の対応に反応できるよう再び打ち込んでいく。

ユイリスが手加減をして受け手を務めているのはレイルの目にも明らかだった。しかも彼女は動きやすいズボンなどではなく、いつものスカート姿。それでも、彼の木剣は彼女の体をかすりすらしなかった。

もつとも、彼女に対してまともに打ち込んで行けたのは、最初の1撃の他には2、3度ほどしかない。

実際はほとんど守勢に回るしか打つ手はなく、ユイリスの木剣はこれでもかというほどレイルへと襲いかかってきたのである。

ユイリスの剣は疾風のごとき。彼女の剣を基準とするならば、もはやグエインの剣術などどんなに間口を広げても比較の対象にすらならない。

彼女の剣速は常軌を逸していた。どうにか切っ先を視界に入れ、反応し、回避しようとするが、彼女の剣からは絶対に逃れられなかった。

さらに、軽快さが女性の剣という印象があつたものの、彼女の剣はさらに恐るべき破壊力までも伴っていた。あのほっそりとした体のいったいどこから屈強の男顔負けの凄まじい力が出るのだろうか。最初に受けた太ももへの一撃といい、直撃すると体の芯まで響いた。何度も息をつまらせるほどの苦痛が伴った。

それでも、ユイリスは修練を止めなかった。

もちろんレイルも止めはしなかった。逃げ出したい思いは皆無だったかと問われれば、答えは否だ。

だが、彼の意地が、矜持が、それを許さなかったのである。ミスリイのため、ユイリスのため、なにより自分のためにも。

とはいえ。夢中でユイリスに立ち向かったが、いつの間にか先日グエインにやられた時同様、河原に大の字になってへばっていた。気ばかり急いても、慣れていない体が先に限界を迎えるのは自明の理だった。

「お疲れ様。今回はここまで」

なんとかして立ち上がるうとしていたところに天より降ってきた救いの声。

先ほどまでの一切の妥協を許さない冷徹なユイリスではなく、いつもの優しいユイリスだった。既に天に昇った朝日の輝きに負けな、柔らかな笑顔を浮かべつつ手を差し伸べてくる。素直にその手をつかむと、軽々と引き起こされた。

「よく頑張ったわね。貴方ぐらいの年頃の、いわゆる普通の男の子だったら、最初の千本すら全うすることもできずに音を上げているわ。私の修練を一通りやり通すことができたのは、貴方がこれまで独自に修練を重ねてきた成果よ」

厳しさに満ち溢れた剣とは違って変わって、穏やかな声でこの半年の成果を褒めてくれるユイリス。空色の瞳は優しい光をたたえていた。

褒められてへそを曲げるような偏屈ではなく、まだ大人社会の汚さに影響されていない素直な心のままのレイルにとつて、彼女の言葉は激しい修練で疲弊した心身を少なからず癒してくれた。

とはいえ、妙齡の美しい女性から褒められるなどということに慣れていない彼は、気恥ずかしさに空色の瞳からつい視線を外してしまふ。それを知ってか知らずか彼女は、「大丈夫？」と労ってくれた。空色の瞳から逃れたのは疲れたからではないのですぐに否定すると、彼女は満足そうに頷いていた。

「でもね、肝心なのはこれから。なんと言っても今日を入れて彼との手合いまで実質6日しかないもの。まとまった時間は朝しか取れないけど、少しでも時間を見つけて、できることをしていきましょうね」

輝くような笑顔もつかの間、それまでの笑顔から一転して表情を引き締めた彼女の意図は、締めるところは締める、というところにあるのだろう。

それこそ望むところである。この半年味わってきた屈辱を思えば、肉体的な厳しさが勝るユイリスの修練の方がはるかに耐えられる。もう鬱屈した日々には戻りたくないし、紆余曲折あったとはいえグウェインに勝って全てを清算できるかもしれない機会を得た今こそ全力を尽くす時だった。

レイルも表情を引き締め、真剣なまなざしを彼女に向けながら頷いた。

気概を込めた姿勢にユイリスも納得してくれたのか、再び相好を崩してくれている。今はそれだけで十分だった。

修練を終えたレイルとユイリスは、休む間もなく慌てて川釣りをすることとなった。

朝の散歩だけでは説明のつかない時間を外出で費やしたが、こうなることは事前にわかっていたため、これを偽装する目的で『店用の食材を確保する漁をするのだ』と無理矢理両親を納得させて出て来たからである。

当初はレイルが修練している間に手すきのユイリスが獲物を釣り上げる、という目論見だったのだが、見通しが甘かった。

なかなかどうして、世の中の均衡は保たれているものである。天は二物も三物もユイリスに与えていたが、こと釣りの技術に関してはその限りではなかった。

レイルが必死になって木剣を素振りしている横で彼を指導しつつ

釣り糸を垂れていたユイリスだが、引きが来るどころか彼女の釣り竿は微塵も動かなかったのである。

長い旅の最中、幾度も魚を釣り上げたことがあると彼女は言っていたが、話を聞くとどうも削って槍状にした木の枝を駆使し、小さな溪流の浅瀬で直接小魚を獲っていたことを指しているようだった。あれほどの剣術を見せつけるユイリスのことだ。その方法で魚を獲ることぐらいぞうさもないことだろう。

しかし、まかり間違ってもそれは『釣り』と呼べるものではなく、今回一匹たりとも釣り上げることができなかったのは至極当然の結果だった。

ユイリスの技術的問題はとりあえずさておき、これから回を重ねて行けばもちろん不漁に終わる時もあるだろうが、初日からいきなり手ぶらで帰るというのもいまひとつ説得力に欠ける。

結局、修練が終わった後に2人で必死になって釣りをする羽目になったのだ。

さすがに釣りを趣味としているレイルだけあって、ユイリスとは違い目に見えた結果を出した。

時間が限られているのでさすがに次々と、とまではいかなかったが、携行した籠の底が見えなくなる位には釣り上げることができた。これならば両親から疑惑の目で見られることはないだろう。

一方ユイリスの戦果は、小指ほどの大きさの小魚一匹。剣術等々でレイルがユイリスに勝るものはなかったが、こと釣りに関してはユイリスの完敗だった。

「もつと簡単にいくと思っていたのに。なんだか自信無くしちゃうわ」

サイレアへと戻る途上、小さな林に切り開かれた林道を並んで歩いていると、気持ち肩を落としたユイリスが力無くぼやいた。

ということは「あれ」で自信があつたのかと。さすがにどう応えていいかわからず、レイルは引きつった笑みを浮かべるだけだった。とはいえ、なにをやらせても完璧、ないし完璧に近い結果を見せ

てきたユイリスにも苦手なものがあつたと判り、これまで以上に親しみを覚える。考えるまでもなく全てが完璧な人間など存在するわけもないのだが、これまでのところ目立った隙をほとんど見せなかったユイリスだけに、今回の一件は彼女との距離を一層縮めてくれたような気がしていた。

いまだにあの結果が気に入らないのかぶつぶつと愚痴を垂れ流し続けている姿に対し、胸中で苦笑することは禁じ得なかったが。

剣術や剣術に対する心構えは彼女から教えを請うているが、お礼に釣りの仕方を教えるというのも、もしかしたら少しでも借りを返せるのかもしれないあ、などとたわいもないことを考えていると、不意にユイリスの足が止まった。

突然歩みを止め、いったいどうしたのだろうか？ と隣の彼女の顔を見上げようとした時。

「頭下げて！」

鋭い叫び声。同時に、いきなり頭を押され、視界の中で空が回った。

次の瞬間、目の前にあつたのは雑草がちらほら生えた茶色い大地。レイルはすぐに自分が地面に押し倒されたことに気づいた。

押し倒した張本人はもちろんユイリス。彼女も大地に伏せ、油断なく周囲を見回していた。

「ユ、ユイリス？ いったいどうしたんだよ」

当然の質問である。説明抜きで地面に押し倒されたのだ。心の準備もなにもなかったので、倒された時に体をかばって地面に着いた手も痛い。いささか惘然とした表情をして抗議の姿勢を見せるのも当たり前のことだった。

が、レイルは二の句がつけなかった。ユイリスはグェインに対して見せた、あの恐ろしいほどの氷の表情をしていたのだから。

もちろんそれはレイルに対してではなかったが、他者に決して反論を許さない圧倒的な威圧感の前に言葉を失わざるを得なかった。

「ごめんなさい、レイル。でも仕方なかったの。その幹、見て」

何が起こったかさっぱりわからず、挙げ句にユイリスの厳しい表情を見せられ呆然としていたからだろう。さすがに周囲を警戒する姿勢は解かなかったものの、こちらに配慮してくれたのか顎をしゃくるようにして頭上を指し示していた。

言われるがままに見ると、林道脇に立つ木の幹に数本の鋭い金属が突き立っていた。それは紛れもなく短剣であり、丁度人の頭当りの高さに突き立っている。もしユイリスが押し倒してくれなければ、命中していたのは自身の頭かもしれないかった。

さすがに恐ろしくなつて生唾を飲み込む。そうしている間にも、ユイリスは意識を張り詰めさせ、いつでも不測の事態に対処できるようにいつの間にか木剣を握り締めていた。

「いるわ。でも1人？」

彼女の言葉に恐る恐るレイルも周囲を見回すが、人の姿など視界に入っていない。

「気配に悪意は感じない。いったいなにが狙いなのかしら」

なるほど、ユイリスは相手の気配を感じ取っていたのだ。とすると、相手が短剣を投げたのを直接見たわけではなく、投げる気配を感じ取って身を伏せたということになる。

そこでふと思う。

昨日から少しずつ蓄積されていた疑問だ。

彼女は自身が身につけた戦う技術は、旅の最中に襲い来る脅威から自分の身を守るためだと言った。

その主張は至極真つ当だ。しかし、女性の身であればおのずと限界があるだろう。幼い頃から剣士や騎士を目指して修練した上での戦う技術と、旅路の中で身を守るために後々覚えた戦う技術には必ず差が出てくるはずだ。なぜなら後者はあくまで自衛を目的としており、最低限の戦う力さえあれば事足りるのである。

だが、先ほど見せた彼女の反応といい、視界にない相手を気配で感じ取る能力、なにより昨日の対グェインから今朝の修練まで存分に見せつけられた筆舌し難い強さを考えると、どう鼻屑目に見ても



自衛の為の力を遙かに超越しているとしか思えなかった。

彼女にどんな過去があったのかはわからないし、そのことを彼女が隠している以上知る術はない。

だが、彼女に問うことはできない。これまでもやんわりと拒絶されているし、なにより父親譲りの『人それぞれ、聞かれたくないこともある』という考えがレイルには浸透していたからだった。

ユイリスに謎は多かったが、決して信義にもとるような人物ではない。今は彼女を信じてついていけばいい。

そう考えると、こんな時は彼女の強さがとても頼もしかった。もっとも、比較するのも愚かしいが、彼女に比してなにもできない自分の力のなさに幾ばくか気落ちさせられもしたが。

「どういうこと？ 無警戒で近づいてくる」

色々と思いを巡らせているレイルとは違い、片時も気を抜いていなかったユイリスはやにわに立ち上がった。

レイルも彼女に倣い、慌てて立ち上がる。続けて表情を崩さないまま彼女が見据えている方向を彼も見、息をのんだ。

木立の間を抜け、人影がこちらへと向かっていった。

見覚えのある人物だった。

忘れるはずがない。昨日リウルゾ亭で対面した、ユイリスを探していたあの黒いマントの男だったのだから。

「き、気をつけてユイリス。あいつ、昨日の夕方、リウルゾ亭でユイリスのことをフェンソおじさんに色々聞いていたんだ」

あの青年の言動からは悪意を感じはしなかったが、なにせ身なりが身なりである。加えて、彼の言を信じるのであれば隣国フレアミスからはるばるユイリスを探しに来ているというではないか。よほどのことがなければそこまでできないし、あの男のいでたちからはどうしてもいい方向に考えることができなかった。

どうにか絞り出した声でユイリスへ注意を呼びかけたのはそのためだったが、レイルの危惧は途中で霧散させられることとなる。

黒マントの男を見据えたまま微動だにしない彼女の異変に気づき、

不審に思ったレイリスはそつと首を巡らせ、覗き込むようにしてレイリスの顔を見上げた。

すると彼女は、「大丈夫」と一言。

いったい全体なにが大丈夫なのか見当もつかない。そうこうしている間にも男は着実にこちらへ近づいてくる。男は短剣を放つてきたが、武器はそれだけではないはずだ。彼が腰に長剣を下げていたのを、昨日その目に焼き付けていたのだから。

レイリスは確かに強かったが、彼女が今手にしているのはただの木剣である。真剣相手には分が悪すぎる。

にもかかわらず、彼女は逃走を促す素振りを見せるどころかまったく臆した様子を見せていなかった。

が、すぐにその疑問は解決することになる。

「心配いらないわ。知り合いだから」

感情の抑揚なくつぶやいた彼女の言葉にさらに驚いた。ついにすぐ目の前までやってきた男と知己なのだというのだから。

「3年ぶりの再会にしてはあまりにも随分なご挨拶ね」

久方ぶりの再会だと自身で言いながらも、決して再会の喜びなどに表情を緩めていないレイリス。諸手を上げて歓迎していない様子がありありと伝わってくる。もっとも、いきなり短剣を投げつけられて笑顔で迎えることができる方がおかしいというものだが。

一方、男の方も表情に変化はまるでなく、感情を表に一切出していなかった。

本当に2人は知り合いなのだろうか？ という疑問が脳裏を過ぎるものの、内容はどうあれ、知り合いでなければできない言葉の応酬をすぐに見せつけられることとなった。

「貴様の腕が落ちてないか確認したただけだ」

「その割には射角に遊びがあったようね。直撃射線からはわずかに外れていたようだけど」

「一応貴様が腑抜けていた場合のことを考えた。腑抜け相手にもし当ててしまったら寝覚めが悪いからな」

まったくもって旧知でなければ不可能な掛け合いである。きつい物言いを互いに投げ掛けているが、2人が知り合いなのは違いないのだろう。

しかし、それにしてもどうしてこの男はユイリスに対して突っ掛かるような言い方をするのだろうか。元々仲が悪いのであれば、国を跨いでまでわざわざユイリスを探すことなどしないだろう。いったいどういう類の知り合いなのかレイルには見当もつかなかった。

ただ、男の次の一言とそれに併せた行動が場の空気を一転させたのは間違いなかった。

「もつとも、本当に腑抜けていたらいつそ直撃させてしまってもよかったのかもしれん。この宝環の持ち主ならば、避けることができて当然のことなのだから」

言って、彼は腰に下げた小さな袋から大事そうにこれまた小さな木箱を取り出した。手のひらに載せたそれを開け、中で折り畳まれた厚手の布包みを丁寧に開いていく。

嚴重に保護された布の中央には、小指の先ほどの円形物が収められていた。銀色の指輪だった。

とたん、ユイリスの表情が驚きの色へと変化する。どんなことにも泰然とした様子でいた彼女が初めて見せた表情だった。

「どうしてそれを貴方が」

「戦師が俺に託された。貴様のもとへと届けるよう。俺がわざわざフレアミスから出向いたのはそのためだ」

男の言葉を受けて明らかに狼狽しているユイリスだったが、努めて冷静でいようとしているのが拳を握り締めている様子からもありありとわかる。

「いったいなにがあったの？」

彼女は押し殺した声で、男の真意をただそうとしていた。男は容赦なく言い放った。

「戦師イスカムは亡くなった。貴様の行く末を案じながら」

よほど男の言葉が胸を抉ったのだろう。ユイリスは目を見開いて

言葉を失っていた。見る間のうちに顔色は青ざめ、先ほどの氷の表情が嘘のように消えている。あまりに衝撃的だったのか、よるめいて倒れそうになるのを必死に踏ん張って耐えていた。

「嘘、嘘よね、ウル」

「俺が『調和の宝環』を持ってここにすることがなよりの証拠だ」彼の言葉、『調和の宝環』という言葉には決定的な意味合いが込められているのだろう。

「そんな、先生が亡くなるなんて、そんな……」

これまで出したこともないか細い声を漏らしたユイリスの反応が、ウルと呼ばれた男の言葉が全て事実を述べていることを証明していた。

情勢はもはや決していた。

が、男はなおも彼女への追及の手を緩めない。

「戦師の御身が病に冒されていたのは貴様も知っていたはずだ」

「でも、先生は微塵もそんな様子を見せなかったわ」

「そういう方だということも貴様はよく知っていたはずだ。にもかかわらず、貴様は己の責務を放棄して逃避した。違うか」

「違う、私は逃げてない。私は、自分を見つめ直したかっただけ。

自分の進むべき道がわからなくなったから、だから」

それ以上、彼女は言葉を紡ぎ出さなかった。否、出せなかったに違いなかった。

俯き、齒を食いしばり、拳を握り締めた彼女の肩は震えていた。

まなじりからは透き通った雫が2つ3つ頬を伝ってこぼれ、大地に弾けた。ユイリスが初めて見せた、『弱さ』だった。

彼女を放つてはおけないとは思ったものの、息を吞んで2人のやりとりを見つめていたレイルの体は緊迫した場の雰囲気にながれ、だのかいつの間にか強張り、見えないなかで拘束されているかのように自由が効かなくなっていた。

呪縛が解けたのは、踵を返して半身になった当事者の1人が去る際に言葉を投げかけてきたからだ。

「少年。レイル、と言ったな。頼んだぞ、彼女を。また出直す」

旧友に厳しい言葉を投げかけ、あまつさえその友人を追い詰めてもまったく悪びれることなく言い放った男は、そのまま立ち去っていった。声をかけて制止する間もなく。

残されたのはただただ呆然としている自分と、肩を落としてうつむいているユイリス、そして再び静まりかえった小さな林。

先刻までは想像もしなかった重苦しい空気が、辺りを支配していた。

幾つもの果て無き道程を越え<sup>みちのり</sup>  
来るは遠き見果てぬ大地  
久しく見えぬ郷里の夜空を偲<sup>かいな</sup>び  
思ふは強くも優しき母の腕

戻れぬ昨日に落涙尽きぬ  
辛苦の明日に悲嘆の吐息

深く静かに想いを強め  
折れてはならぬ己が心  
信置く標を胸に抱き  
曲げてはならぬ己が道

地と水と蒼天と  
我はいつも共にある  
父と母と温もりと  
我はいつも共にある

いつも通り彼女の歌が終わりを告げ、リュートの響きが鳴り止むと、しばらく誰も言葉を発しない。黙ってその余韻に浸るだけ。自身の歌声を確かめるかのように目を閉じて弦を爪弾いていた彼女が、しばしの後にゆっくりと双眸を開いた時、誰ともなく歓声を上げるのだ。彼女の歌声に喝采を贈るために。

異様なほどの熱気に包まれ、奏者兼歌姫を称え賛辞を呈する声がそれほど広くはないテルミト亭・食堂のそこかしこから上がる。

熱狂的な彼らの声に、彼女も椅子から立ち上がり深く頭を下げた。

それでもあくまでいつもの彼女だ。周りに流されず、興奮した観客にも泰然とした様子で応えている。

すっかりお馴染みとなったテルミト亭の歌姫と観客たちの姿を、レイルは食堂の片隅から不思議なものを見るような目をして眺めていた。

彼女　ユイリス「レンフィアがウルと呼んだあの男との一件から1日が過ぎた日の晩。

ユイリスは以前と変わらぬユイリスでいた。

ウルに諺られ、懸命に反論するも結局言葉を失い、齒を食いしばって黙って涙するしかかったユイリス。

あの後、彼女は心配したレイルの問いかけに「大丈夫」と答えた。涙を振り払ったものの、さすがに堪えたのかしばらく1人にして欲しい旨を告げてくると、彼女は1人テルミト亭へと帰って行った。それまでの彼女とはまったく異なった一面を見せたあの一件は、レイルにとって衝撃的だった。

だからこそ心配でならなかった。あれほどの落差を見せつけられてしまっでは。

やはり放っておくことができず、間を置いて自身も帰宅した後、彼女の部屋へと向かおうとした。

が、そう物事上手くいくはずもなく。

一緒に出かけたはずの2人が別々に帰宅してきたことについて、両親からしつこく理由を問い詰められた。どうもユイリスは帰ってきた時も沈鬱な表情をしていたようで、それを心配したからこそその反応だった。

ロイドなどは、お前がろくでもないことをして怒らせたんじゃねえだろうな、とまったくもって失敬極まる言葉を投げかけてきたが、まともに反論しても無駄な労力を消費するだけなので、どうにか適当にやり過ごしてユイリスの部屋の前までたどり着いた。

とはいえ、いざ彼女を目の前にした際、いったいどのような言葉をかければいいのか。

扉を叩くために持ち上げた拳のやり場に困っていると、突然扉が開かれた。

「あらレイル。なにをしているの？ 拳を振り上げたりして、なにがあったの？」

現れたのは当のユイリス。不思議そうに小首を傾げつつも、微笑みを湛えている。

悲しみ、憤り、口惜しさ、それらが全て入り混じったかのような涙を先ほど流していたのがまるで嘘のような笑顔だった。

あまりにも劇的すぎるユイリスの変わり身に、レイルはただ呆氣に取られるしかなく、鼻歌交じりに食堂へと歩いていった彼女の背中を黙って見送るしかなかった。

それからの彼女は、ウルとの一件などまるでなかったかのようにいつも通り明るく振舞っていたのである。

しかもそれは無理して演じているのではなく、本当になににもなかったかのように自然な振る舞いだった。

明けた翌日の修練の厳しさも変わらず的確な指導であつたし、給仕も精力的にこなしていた。歌姫としての役割も先ほどの歌唱を見ればいかにいつも通りだったか窺い知れるというものだ。

あそこまで普段通りの有様を見せつけられると、あの一件は夢か幻かと思ってしまうても無理もないほどで、実際レイルは段々自身の記憶に自信を失くしかけたぐらいである。

だが、知己から謗られたユイリスが初めて感情を爆発させたあの事件は紛れもなく起きた事実である。

どれほどの度合いかはわからない。

ただ、彼女はやはりいつもの自身を演じていたのだから。

一度衆目から注目が外れた時、ほんのわずかの間だけだが彼女がもの思いにふける姿をレイルは目にしていた。以前には見受けられなかったその姿こそ、ユイリスが自身の心の揺らぎを隠せない証であつた。

彼女の心をそこまで動かした、ウルの一連の言葉。なによりウル



という男や、彼女の先生というイスカムという人物との関係。つまるところ、やはり彼女の隠された過去にこそ全ての要素が集中している。

人知れず悩む彼女の力になるためには、彼女という人物をより深く知らねばなにも始まらない。

だが、ユイリスがたどってきた道についてはこれまで一貫して壊れ物を扱うかのように触れてこなかった。また、その姿勢は彼女にもよく伝わっている。

今になって、彼女に問うことが果たしてできるだろうか。

客に誘われたのだろう。いつの間にか客たちの間に入り、苦笑いしながらも酒を勧められるのを受け入れている『作られた笑顔』のユイリスの姿を遠目に、レイルは表情を曇らせるのだった。

使いに行くのは頻繁ではないが、大抵が夕方から宵の口にかけて行くことが多かった。特段の理由があるわけではなく単なる偶然なのだが、だからこそ日中に行く機会も当然あった。

以前であれば今ほど気にするほどはないのだが、しばらくはできれば日中に行くことは避けたかった。

とはいえ、あの父親に指示されて拒絶できるわけもなく、レイルはしぶしぶ重い足取りを使いの先　リウルゾ亭へと向けていた。

修練を開始して3日目。それは同時に、ユイリスが初めて見えざる心を晒した日から3日経過したことを意味する。

だが、日数の経過はユイリスにさらなる変化を何ももたらさず、相変わらずの明るさと、修練の時の厳しさを保っていた。そして、時折ほんの一瞬見せる思いふける様子も。

グェインとのことに加え、ユイリスのことも気にかげざるを得ない毎日。もう十分手一杯で、この上面倒ことを背負い込むのは誰であつても避けたいのが然るべきというものだ。

ところが、その面倒ことを背負い込む可能性がリウルゾ亭には存

在しており、しかも日中こそ最も危険なのだ。

が、訪れることから逃れる術はなく。後はもう、面倒ごとが留守でいることを願うばかりだった。

街道筋の町として賑わうサイレアの街中とは対照的に、まったくもって浮かない表情をしたレイルは、とうとうたどりつきたくはなかったリウルゾ亭へと到着してしまう。

テルミト亭よりも町の中心にあり、加えて日中から酒類を供出していることから客入りもよいリウルゾ亭。店の入り口横に張り付きそつと店内を覗き込んで見ると、相変わらずの盛況ぶりで食事や酒を酌み交わしている客たちの談笑が押し寄せるかのごとく聞こえてくる。

賑わっている店内を見回しつつ、レイルは始めになさねばならぬこと　面倒ごとの在、不在の確認を最優先で行った。

しらみつぶしに見回したところ、面倒ごとを目にすることはなかった。どうやら奥に引っ込んでいるか、外出しているようだ。

であれば、使いの用件を手短に済ませて一刻も早くこの場を立ち去ることが最善の道。

安心したレイルは、いざ店内へと足を踏み入れようとした。

「なんでそんなこつそり入ろうとするの？　家に」

聞き覚えの非常にある声だった。加えて、今最も聞きたくない声でもあった。

声のした背後を恐る恐る振り返ると、『面倒ごと』が不思議そうな表情をしてこちらを見つめていた。

「ねえねえ、どうしてなかなか中に入ろうとしなかったの？　会いたくない人でもいるの？」

矢継ぎばやに問いかけてくる『面倒ごと』だったが、レイルがリウルゾ亭になかなか入らなかった理由を言い当て、さらにその答えが当の本人であることなどまったく気づく様子もない。

「べ、別になんでもないよ、ミスリイ」

当然のことながら訳を言えるはずもなく、動揺しながらもレイル

は面倒ごと　ミスリイルロムへ愛想笑いを浮かべた。

癖のある栗毛を背中に流し、決して美人ではないが鼻周りにソバカスを散りばめた愛くるしい面立ちが特徴であるエプロンドレス姿の少女は、レイルの拳動不審な態度を特段気にするでもなく、ふうん、と頷いていた。

顔を合わせまい、と十分気をつけてきた努力を一瞬で崩壊させたことなど露も知らないであろうミスリイに、レイルは胸の中で深いため息をついて肩を落とした。

レイルにとって、ミスリイは幼馴染とっていい間柄の少女である。2人の父親に親交があったことが出会いのきっかけとなり、互いに明るく人見知りしない性格もあってすぐに打ち解けた。

成長した今は各々家業の手伝いがあるため、さすがに昔ほど毎日顔を会わせて遊んだりはしていないが、ほどよく仲の良い間柄を保っていた。

とはいえ、ミスリイの度が過ぎた明るさ、あまり物事とを深く考えない性格にレイルが振り回されることも多かった。

他にもない、今現在レイルにとっての最大の面倒ごと　ユイリスをも巻き込んだグエインとの一件の発端は、彼女とグエインのいざこざにあつたのだから。

ミスリイにしつこくつきまとったグエインに非があるのは当たり前だが、彼をそうさせた要因の1つに、ミスリイの発言が絡んでいることも否めない。

あっけらかんとしたあの性格である。当初軽く絡んでいたグエインの心を逆なでする発言　「気持ち悪いのよ、このでくの棒」などと言い放っていた　を考えなしにしまったのも別段不思議ではなかったが、事実としてグエインのつきまといが深刻になったのはそれからのことだった。

それでも大して気にしていなかったミスリイの楽天さとは裏腹に、幼馴染の一大事に体を張って立ちはだかったレイルだが、結果はこれまでの通りである。

とりあえずグエインのさらなる暴走を押さえ込むことには成功した。事実として、グエインはミスリイの前には顔を出さなくなった。だが、毎度グエインに叩きのめされた拳句、ユイリスを巡って決闘してみた手合いをする羽目になり、さらにそのために厳しい修練を積みされることにもなった。

実はこれら一連のことをミスリイはなにも知らない。彼女が知っているのはごく初期段階、ミスリイへのこれ以上のつきまといを諫めるためにレイルがグエインに啖呵を切った時ぐらいまでである。もちろんそれは、彼女にいらぬ心配や負担をかけたくなかったというレイルの思いやりがあつたからこそだが、さすがにまったくにも知らずにのん気な様子でいるのを見せられると複雑な心境になつてしまうのもいた仕方ないというものだ。

このような苦心をさせられることまで元から承知の上などあるはずもなかったが、それでもミスリイには黙り通すと決めたからにはもはやその道を突き進むしかない。

「今日は何のご用？ あ、わかった。またさばりに来たんでしよう。おじさんに怒られちゃうよ」

そう言つて無邪気に笑うミスリイを見ると、やはり彼女には何も言わずにいて正解だったとつくづく思う。彼女のような人間が不安や悲しみに沈んでいる姿など、決して見たくはないのだから。「ねえねえ、どうして黙つてるの？ そう言えばレイルの家に凄く綺麗な人が逗留してるのよね？ もしかして、その人に体よくあしらわれてたりして。だからなんだか疲れてるように見えるのかしら」

何も言わずにいたのをいいことに、ミスリイは好きなことを言いたい放題。

いったい誰のおかげで苦労させられていると思つてゐるんだか、と喉まで出かかるとをどうにか堪える。多少は辛酸を舐めた方が実は彼女のためなのでは？ などということが脳裏を過ぎり、レイルはやり場のないやるせなさにため息をついた。

その反応にミスリイはさらに勝手に盛り上がっていたが、ふとした瞬間から彼女の声など耳から入らなくなる。

ミスリイの言葉が静止したのではない。レイルの意識がある一点に注がれたため、彼女の声など気にならなくなったのだ。

レイルが聞いていようがいまいがお構いなしに我が道を行くミスリイの肩の向こう、人通りを隔てたリウルゾ亭のはす向かいの店から出てきた人影。

「あつ！ ちょっと、レイル！」

背中に追いつがるミスリイの声を振り払い、駆け出したレイルが求めるのはただ1つ。

人ごみの中に去り行く、黒いマントの男の背中だった。

リウルゾ亭のはす向かいにある店から出てきたのは、ユイリスを完膚なきまでに言い負かした男、ウルだった。容姿はもちろんのことで、特徴のあり過ぎるあの黒いマントを見間違えるわけがない。

行き交う人々の合間をぬって、ひたすらウルの背中を追う。

なぜなら、レイルの身の回りで当人以外にユイリスの過去を知る唯一の人物こそウルなのだから。本人に直接話を聞けないのであれば、事情をよく知る彼に聞くほか手立てはない。

人の過去、とりわけこれまで壊れ物のように触れずにきたユイリスの過去を、ここにきて知ろうとする行為に躊躇いがないわけではない。

ただ、これまで彼女のことを色々と案じてきたにもかかわらず、実は何一つ本当の彼女のことを知らない自分が齒がゆく、その思いは少しずつでも蓄積されていた。

普段冷静なユイリスをあれほど取り乱させる、彼女の過去。ユイ

リスのことを慮るからこそ、いったい彼女に何があったのか。それが知りたかったし、その思いがレイルの背中を押したのだった。

黒いマントを何度も視界から失いかけつつもどうにか追跡し、幾つもの路地を抜けていく。街路の人々が障害となつて満足に走っていくことができないなか、それでもレイルは懸命にウルを追いかけた。

にもかかわらず、彼との距離は微々たるものしか縮まらない。

ウルは大人であるがゆえに歩いているとはいえ歩幅がレイルとは違う。それ以上に、急流の最中にある岩場の間を流れるように抜けていく木の葉のごとく、人ごみを人ごみと思わせないほどの身のこなしで先へ先へと歩を進めていくウル。

その時は突然やってきた。

レイルの頑張りが天に認められたのか、ほんのひと時、自分とウルとを結ぶ直線上を遮る者がいなくなったのだ。

好機だった。ユイリスを知る男に、レイルはあと一步と迫った。手を伸ばし、声をかけようとした。

横から現れる大きな影。

反射的に歩を止めるレイル。

彼の行く手を遮ったのは、横道から突如飛び出してきた大男だった。驚いているレイルを尻目に、彼はレイルの行く手を横切つて知らぬ顔で通り過ぎていった。

時間にして、わずかな間。

だがそれは致命的な間でもあった。

つい先ほどまで視界に捉え、手が届きそうだった黒いマントの男の姿は、レイルの眼前から忽然と消え去っていたのだから。

我が目を疑い、慌てて周囲も見回して見るが、いない。

予期せぬ邪魔のせいでウルを完全に見失ってしまった。せつかくの好機をみすみす見逃してしまったことに愕然とし、レイルはその場に棒立ちになる。

「なんだよ、あと少しだったのに」

口惜しさが言葉となってこぼれた。

やるせなさに肩を落とし、しばし俯いていたレイルだが、彼の眼は急に見開かれた。

ほんのわずか、ではあったが不意に背後から異質な気配を感じたからだ。

通行人などのものではない。レイルは咄嗟に振り返った。

「ほう」

何かに妙に感心しているような声が振り向いた彼を迎えた。

短く刈り込んだ栗色の髪 of 青年は、黒いマントをたなびかせながら灰色の瞳をまっすぐこちらに向けていた。

追いかけて追いかけて、どうにか間近に迫ったものの見失って、諦めざるを得ない状況に陥ったにもかかわらず、追いかけてきた相手が今、目の前にいる。

思ってもみなかったことに、レイルはなにを言っているかわからず視線を泳がせた。

「使いをさばった上に、彼女を放っぱりだして鬼ごっこをしてくれているのか？ 少年」

先に口を開いたのはウルだった。

彼は先日 of リュルゾ亭での一件を覚えていた。なにより、先ほど自分がリュルゾ亭を訪れ、間口でミスリイと話していたことに加え、彼をつけていたことに気がついていて。わざわざ背後から近づいてきたことも、彼がはるか前からこちらの動向を見知っていたことを証明していた。

恐るべきウル of 鋭さに息を呑むが、レイルはどうにか踏みとどまった。

「しょ、少年なんて名前じゃない。俺の名前はレイルだ」

それは明らかかな強がり、あまり意図せず言葉が先に出たような状況ではあったが、こうなればやぶれかぶれである。すると

「そいつは悪かったな。レイル、か。良い名だ。俺はウル、ウルゼツクだ」

意外にも彼は素直に謝罪し、自ら通称ではない正式な名前を口にした。それも、これまであまり表情を見せたことがなかったにもかかわらず、わずかとはいえ口元に笑みを浮かべて。

思ってもみなかった反応に目を丸くしていると、ウルゼックは踵を返して歩いて行ってしまう。

次から次へと予想外の事柄が起きているので、どう対処していいかわからなくなり立ち尽くしていると、

「どうした、俺に用があるのだろうか？ ついてこい」

先に行くウルゼックは立ち止まり、半身だけ振り返って言った。

またもや意外な彼の心配りではあったが、おかげでレイルの戸惑いは晴れた。慌てて彼の背中を追いかけた。

レイルはウルゼックに付き従った。

しばらくは無言で歩を進める2人。

「ユイリスから相当な訓練を受けているようだな」

歩きながら、唐突に話しかけてくるウルゼック。もちろん振り向いたりせず、顔は前を向いたまま。

黒いマントの男は行動がいつも唐突だったが、さすがにここまで立て続けに起きると少しずつではあるが耐性がついてくる。彼が修練のことを知っているととしてもそれほど驚くことなく受け入れられた。

「さっきのことだ。徹底していたわけではないが、俺は気配を殺していた。まさか気づいて振り向かれるとは思っていなかったからな少々驚いた」

驚いたと言っているが、彼の喋り方には抑揚が乏しいためあまり驚いているように聞こえないところが彼らしい。

表情も伺い知れないだけに真偽は定かでなかったが、ウルゼックの話は続いたため、レイルは黙って耳を傾け続けた。

「初めて出会ったあの酒場の時からわずか数日しか経っていないにもかかわらず、だ。目覚しい進歩だな。あの時は気づかれる兆候など一切なかったのだから」



そこまで聞いてふと疑念が湧く。

唐突なウルゼツクのことである。ユイリスから修練を受けていることを見知っていたとしてもありえない話ではない。閉鎖された室内で修練をしているわけではなく、ギョーム河の川べり近くで行っているのだ。なるべく人目につかない場所を選んではいるが、誰にも見られない隔絶した場所というわけではない。

偶然通りかかったウルゼツクに修練を見られる可能性も無きにしても非ず。

だが、一連の言動を顧みるとどうも腑に落ちない。特に、先の「あの時は気づかれる兆候など一切なかった」という一言が引っかかる。

レイルは、ウルゼツクという人物のことを洗いざらい思い出し、鍵となる事柄を脳裏で検証した。いや、検証するまでもなかった。簡単なことだ。

ウルゼツクはなんのためにサイレアに来たのか。そう、ユイリスを探していたのだ。初めて出会ったリユルゾ亭でも彼はユイリスの所在を尋ねていた。

その彼に、あの場面で自分はこういう反応を示したか。ユイリスという単語が出ただけで慌てふためき、あまつさえそのまま脱兎のごとく走り去ったのである。

よほどおめでたい人間でもない限り、ユイリスのことを知っているからこそ動揺して逃げ去ったと考えて然るべき。

そう、あの後レイルはテルミト亭までウルゼツクに尾行され、ユイリスの所在、ユイリスとの関係を既に把握されていたのである。一昨日、修練の帰りに見えたのも決して偶然などではなかったのだ。人を探しているのだからそこまで行ったとしてもまったく不思議ではないのだが、ウルゼツクという男のやることは徹底しており、自分とはあまりにも違う格に素で感嘆を覚えた。

もっとも、口から出たのは、自分がまったくの道化で彼に全てを見透かされていた気恥ずかしさを隠す言葉だった。

「なんだよ、全部知ってたのかよ。意地悪いよな」

「ほう、頭の回転もいいようだな。ユイリスが目をかけているのもわかるというものだ」

どうやら本当に褒めてくれているようなのだが、例によってウルゼックの声で言われてもあまり褒め言葉に聞こえない上、一連のできごとからすると逆に皮肉を言われているような自虐的な気持ちに陥ってしまう。

今、これ以上言葉を交わす気力を失い、レイルは以降黙ってウルゼックの後をついていくのだった。

ウルに連れられてきた先は、町はずれの小高い丘の上。立ち木が一本生えており、根元付近に野営の跡があった。立ち木の根元上辺りには大きな洞があり、そつと覗き込むとそこには麻布に包まれた荷物や巨大なトランクケースが隠されていた。

「ここで寝泊りしているのか」

「旅の暮らしが長くてな。宿よりも野営の方が気楽でいい」

言って、ウルゼックはその場に座りこんだ。レイルも彼に倣って彼の眼前に腰を下ろす。

「その様子だと彼女からなにも聞かされていないな」

頷き、レイルはユイリスと出会ってから今日までの一連の出来事をかい摘んで話した。

ギョーム大河の河岸で行き倒れていたユイリスを助けたこと。

以来、彼女は療養のためにテルミト亭に逗留していること。

自分の揉め事に助け入ってくれた上に、問題を解決するための手を打ってくれたこと。

そして、解決するための手として自分を鍛えてくれていることを。

ウルゼックは黙って聞いていたが、やがて口元を歪めて小さく苦笑いした。

「俺、なにかおかしいことでも言った？」

「いいや。昔とまったく変わらん行状に、彼女は彼女のままだと安

心したところだ。むしろ、あまりに変わつたらんことに少々呆れたぐらいでな」

言葉とは裏腹に、ひとしきり微笑した後の彼の表情はとても穏やかだった。呆れよりも安心して思っている方が強いことを如実に表しているに他ならない。

感情を面に出さないウルゼックがわずかでも変化を見せていることから、それだけユイリスを案じる思いと彼女との深い結びつきを彼から感じる。

自分にはそこまでの繋がりなどない。レイルは羨ましいと思う気持ちとともに、どこかやるせない思いも湧き上がるのを感じ、戸惑いを覚えた。

心の動揺を読み解かれまいと、レイルは戸惑いを払拭するかのごとく口を開こうとした時、ウルゼックの鋭い声が彼を制した。

「それで、どうしてレイルはユイリスに何も尋ねない」

いきなり最も痛いところ近くへと迫る言葉。レイルは顔を強張らせた。

「彼女に何も聞けず、それでも彼女のことが知りたいから俺のところへきたのだろう？　だが、なぜ彼女に話を聞けない？　直接本人から聞いた方が早いだろうに」

追い討ちをかけるかのように、矢継ぎばやに問いかけてくるウルゼック。

彼の言い分は正しい。

しかし、彼の言う通りにはできなかった。なぜなら

「ユ、ユイリスは自分の昔の話をしたがらないんだ。それに、父さんに『人それぞれ聞かれたくないこともある』って言われてきたし、俺もそう思うから。聞けなかったんだ、なにも」

そう、だからここに来た。ウルゼックに尋ねるために。

だが、それは同時に核心を突かれる危険も孕んでいた。なにより、今まさにウルゼックによって核心　自身の行動に『つじつまが合っていないこと』　を追及されようとしていたのだから。

そして、自ら墓穴を掘ってしまったことにもすぐに気がついた。話の流れで自らつじつまの合わない行動をしていることを証明しまったのだから。

話術や駆け引きには確かに長けてはいないが、自分で自分の首を絞めたことぐらいはわかる。レイルの自己判断は間違いではなかった。

「なるほど、いい心がけだな。だが、彼女のことを俺から聞きだしてしまつたら結局同じことなのではないか？」

凍るような冷たい視線をこちらに向けながら、ウルゼックはレイルが危惧した通りの正論を投げかけてきた。

ユイリスを追い込むほどの男である。こんな基本的なことに気づかないわけがなかった。

ウルゼックが対話の機先を制した時点で、こうなることは既に決まっていたのである。

過去を知られたくないというユイリスの姿勢を尊重しながらも、その裏で彼女の過去を探るといつつじつまが合わない事実。非難されても文句は言えなかった。

もはやウルゼックにユイリスのことをまともに尋ねることなどできるはずなく、レイル自身も黙しているしかない。そう思っていた。

「それでも」

溢れ出す言葉。握り締めた拳に力が入る。頭の中が真っ白になり、押し留めることはできなかった。

「それでもユイリスのことが心配だったんだ！」

叫んだ。そして、我に返って自らがなした行為に驚いた。

叫ぶつもりなど毛頭なく、それどころか放った言葉の内容自体、考えてもいなかった。ほとんど無意識的に、感情の赴くまま出てしまった言葉だった。

「お、俺、いったい、なにを」

興奮も一瞬で醒め、我を取り戻したレイルは、自身の行為に動揺

し、視線を泳がせる。

彼が灰色の双眸を落ち着かせたのは、ウルゼツクが彼の名前を呼んだ時だった。

ウルゼツクを見やると、彼の眼光から冷たさは失われていた。ユイリスの今を知って安堵した時の穏やかなものに戻っていたのである。

「案じているのだな、彼女のことを」

彼の瞳には、レイルを非難する色などなく、ユイリスに対する思いを吐き出したことをむしろ喜ぶような優しい光が湛えられていた。本心から心配しているからこそ出た叫びであつたが、筋から言えば無茶苦茶なもので、てつきり批判されると思つただけにレイルは怪訝な表情を浮かべるしかない。

予期せぬ反応を見せたウルゼツクだが、彼はさらにまつたく予想外の言葉を投げかけてきた。

「もしや貴様、彼女に惚れたか？」

まつたく考えていなかった問いかけだっただけに、一瞬彼が何を言っているのかわからなかった。脳裏で反芻してみても言葉の意味を理解してからようやく、だがあつと言う間に赤面する。

「そ、そんなんじゃない！ き、綺麗な人だと思つてはいるけれど」興奮したり冷静になったり、そしてまた興奮したりと、もはや自分でも何を言っているかわからなくなつてきているため、言わなくてもいいことを口走つてしまふ。羞恥に顔を真っ赤にしたまま慌てて口をつぐむが後の祭り。

しっかりとその耳に届いた証として、ウルゼツクは声を上げて笑い出した。それは、表情をほとんど変えない彼が初めて見せた満面の笑みだった。

微笑笑したり穏やかな表情を見せたりと、ほんのわずかな変化はこれまでもあつたが、彼がここまで感情を露にすることなどなかった。なによりその外見からは想像もできなかっただけに、恥ずかしさも忘れてレイルは目を丸くした。

「正直な奴だな、レイルは。気に入った。貴様のような人間は好感が持てるぞ」

ひとしきり笑った後、彼は一言謝ってからそう言った。どうやらまたしても褒められているようなのだが、あれだけ笑われてから言われても素直に喜んでいいのかわからず、レイルは今日何度目かの複雑な表情を浮かべるしかなかった。

「まあそう腐るな。俺はお前を買っているんだぞ。素直に喜べばいい。それに、彼女のことも案ずることはない。彼女はとても芯の強い女性だ。必ず自らはじめをつける。そういう人間だ」

自分のことはともかく、あれほど責めたユイリスのことも称えるウルゼツク。ユイリスに冷たく当たっていたのがまるで嘘のようだった。

「ウルはユイリスのことが嫌いなんじゃないのか？ こないだあんなに責めていたのに。それが今日は、なんだか褒めてるみたいだ」

訝しげに問うと、ウルは再び破顔した。

「俺は彼女のことを嫌ってなどいないぞ。むしろ敬意を払っている。だからこそ、だ。ま、貴様も大人になればわかる」

だからこそだと言われても、言っていることとやっていることが食い違っているようにしか思えず、レイルはどこか釈然としなかったが、ユイリスがとても芯の強い女性であるという言には諸手を上げて賛成だ。

今まで見せたことのない一面を突然見せられたためにユイリスのことが心配でなくなっていたのだが、ウルゼツクから諭されたことでユイリスという人物がどんな人間であるか、思い出させられた。

今は彼女を信じて待つことこそ、ユイリスを慮ることになるのだ。「時が来れば彼女の方から胸の内を明かしてくれるだろう。それまでは彼女を信じ、見守ってやってくれ」

異論は一切ない。レイルは深く頷いた。

会談の席は終わりを迎えた。どちらからともなく、2人は立ち上

がる。

別れ際、ウルゼツクは言った。

「彼女に伝えてくれ。俺はしばらくここに逗留している。気持ちに整理がついたら、会いにこい、と」

修練を始めてから早くも5日目。

ユイリスは相変わらず何事もなかったように振舞っていた。手厳しい指導にもより一層拍車がかかるぐらいに。

あまりに普通でいる彼女の姿に、ウルゼックとのやりとりを忘れてしまったのではないかとも思われる。

だがそうではない。いまだに時折、ふと物思いにふける瞬間は現出している。彼女は決して忘れていくわけではなかった。

すっかり通い慣れた修練場からの帰り道を5日目の修練を終えユイリスと並んで歩くレイルは、彼女のことを案じながら、一方でウルゼックとの一件　彼からの伝言を言いそびれていることを気にしていた。

時機を逸するとはまさにこういうことかと、もどかしい思いが山積していくことに気が重くなっていく。ただでさえ色々な問題ごとが次から次へと生まれている最近の状況である。やるせない鬱積した感情は蓄積される一方で、自然と小さなため息を漏らした。

今この瞬間にでも伝えてしまえば何も問題はないのだが、意図して次から次へと思ったことを口から放り出せる性格ならば、そもそも端から面倒ごとを背負い込むこともなく、苦勞はしていない。さらに言えば、この帰り道で彼女は物思いにふけることが多かった。

案の定、この日も物思いにふけてしまったようで、それが証拠に隣を歩いていたはずのユイリスの姿がいつの間にか、ない。

横を見て、後ろを見る。すると、かなり離れた後方を、彼女は空虚な視線を漂わせたままとぼとぼ歩いていた。そもそもこんな状態の彼女に伝言しても、果たしてちゃんと聞いてもらえるのか怪しいところである。

レイルは再び　今度は多少大きな目の　ため息をつくも放って



おくこともできないので、ユイリスの注意を喚起するために呼びかけようとした。

その時だった。聞きなれない音が急激に近づいてきたのは。とっさに反応、腰を屈めて身を縮こませる。

同時に、視界の端に黒い小さな塊が映り込んだ。

それが何かを認識しようとするよりも早く、音は聞こえた時とは逆に今度は急激に小さくなって消えてゆく。

だが、レイルは黒い塊の正体を音が消えゆく間際に見極めていた。親指大ほどの大きさの黒熊蜂だった。蜂の一種である黒熊蜂は、丁度この辺りのような林 修練からの帰り途上にある、ユイリスとウルゼツクが一戦交えた林道に差し掛かっていた に生息し、攻撃的な性質を持つ上に、生死にかかわる猛毒の毒針を有しているとても危険な蜂だった。

一旦は飛び去ったと思われた黒熊蜂だったが、再び羽音が強くなってくる。

いずこからかと慌てて首を巡らし、迫る脅威を求めた。

その姿を再び視界に捉えた時には、丁度まっすぐこちらに向かってくるところだった。

身を翻しどうにかかわすことに成功するも、飛び退った黒熊蜂の次なる行き先に居るのは、なんとユイリス。さらに当のユイリスはまったく気づいていない様子で、無防備だった。そう、悪いことに『物思いにふける瞬間』どころか、『物思いし続け』、自分の世界へと入り込んでいた、彼女は。

いつものユイリスならこの危機にも問題なく対応するのだろうか、今の有様では言わずもがなである。

「ユイリス、危ない！」

駆け寄る余裕はない。レイルはあらん限りの声を振り絞って叫んだ。

これで彼女も危険を感じて避けてくれる と思いきや、なんとユイリスはまったく反応せず、相変わらず自分の世界の真っ只中。

一方、彼女の事情なぞ勘案してくれるはずもなく黒熊蜂は一直線にユイリスへと向かっている。

もはや間に合わず、彼女はその毒針の餌食になってしまおうかと思われた。

ところが、思いも寄らぬできごとが起きたのである。

なぜか黒熊蜂は、ユイリスの直前で、まるで彼女を避けるかのように突如として向きを変えて飛び去ったのだから。

いったい何がそうさせたのか、はたまた黒熊蜂の気まぐれか、それはわからない。

わかつているのは、黒熊蜂はこちらへの襲撃をまだ取りやめたわけではないということだ。

彼の小さな襲撃者は三度方向転換し、今度はユイリスの背後から彼女へと襲いかかるうとしていたのだから。

もはやユイリスに危機からの回避を任せてはいられなかった。

レイルは持てる力を振り絞って疾走した、ユイリスへと。

同時に、腰に結び透けていた木剣へと手をかける。

必死で駆けるレイル。

だが、心の中は不思議と冷静だった。

高速で迫る黒熊蜂の姿も正確に視界に捉えていた。

迷うことはなかった。

今だ！！

胸中で叫びながら、ついにレイルはこん身の力を込めて木剣を抜き放った。

紙を握りつぶしたような音がし、羽音は消え、辺りに静寂が再び訪れる。

鋭い軌道を描いて振り抜かれたレイルの木剣は、違うことなく黒熊蜂を木の刃に捉え、撃破。粉々に砕け散った黒熊蜂の遺骸は木々の幹にべつとりと張り付いていた。

「や、やったのか……？ お、俺」

ユイリスを助けなくては　その思いだけで木剣を振るったレイ

ルである。もちろん黒熊蜂を粉碎できる自信も目算もあるはずなどなく、だからこそあの小さくとも獰猛な昆虫を倒せたことがにわか  
に信じられない。

しかも、剣を振るった時の冷静さや、なにより鋭い剣さばきはと  
ても自らなし得たこととは思えなかった。自分でも思っているのである、  
まるで別人になったようだった、と。

自分自身が行い、さらに功を奏したことなのではあるが、レイル  
は戸惑うばかりだった。

「助けてくれたのね、レイル」

我に返ったのは、聞きなれた美しい声が耳に届いた時だ。

見ると、周囲とレイルの有様から状況を判断したのか、何があつ  
たかを理解した表情でユイリスがこちらを見つめていた。

怪我をすることもなく無事な彼女の姿を見て安堵するも、同時に  
沸々と怒りが湧いてきた。それが言葉となって彼女へと向けられる。  
「も、物思いにふけるのもいいけど、大概にしないといくらユイリ  
スでも怪我をするよ！ そんなのユイリスだってわかってるだろ！  
？ しつかりしなよ！」

感情の赴くまま、想いのたけをありのままにぶつける。彼女が心  
配だからこそ、だ。

対し、ユイリスは心底申し訳なさそうな表情をし、「ごめんなさ  
い」と素直に詫びの言葉を口にしていた。

「貴方に命を救ってもらったのはこれで2度目ね。ありがとう、助  
けてくれて」

「べ、別に。当たり前のことをしたただだよ」

神妙な顔をして礼を言うユイリスにレイルは照れを隠せず視線を  
外したが、すぐに真顔で彼女のことは見あらためることとなる。

「貴方に話さなければならぬわね、こないだのこと。2度も助け  
てもらったのに、これ以上黙り続けてはいられないもの」

彼女は覚悟を語っていた。

ならば、当然こちらでも覚悟を示さねばならない。それが彼女に報

いることとなるのだから。

「俺も、ユイリスに伝えなきゃいけないことがあるんだ」

黒いマントの男からの言葉を伝える意思を固めたレイル姿が、亜麻色の髪を持った麗人の瞳に映りこんでいた。

着実に空へと昇る日差しに、大河ギョームの水面はそこかしこで輝きを放っていた。

照り返す光は河の流れに合わせて多彩に変化を見せ、実に美しい心を洗い流してくれるような光景を、レイルはユイリスと河べりに並んで腰かけ、眺めていた。

ウルゼツクの時といい、今回の黒熊蜂の時といい、すっかりいくつきの場所となってしまったあの小さな林から修練場であるギョーム河・河岸へと引き返した2人は、しばらく雄大な景色を黙って見つめていた。

「ねえレイル。貴方とこうして2人だけで静かにお話しする機会って、そう言えばこの近くに私のランクケースを取りに来て以来ね」  
静寂の時を止めおもむろに唇を開いたのはユイリスだった。

「あれからまだそんなに経っていないのに、なんだかもう何年もサイレアにいるような気分になっていたわ。だからかしらね、気持ちが緩んでいたのかもしれないのは」

隣に座るユイリスを見やると、穏やかな語り口調とは裏腹に硬い表情の彼女は、伏目がちに大河へと視線を向けたまま肩を落ち込ませていた。いかに彼女が『平静』という偽りの衣装で着飾っていたかがよくわかる。

彼女に、その意気を落ち込ませるきっかけを生んだ人物の話をするのは少々怖かったが、彼とのことは話さねばならないことだった。  
「俺、おとといウルに会ったよ」

意を決し言葉を紡ぎだすと、伏目がちだったユイリスの双眸は大きく見開かれ、やがて彼女はその空色の眼差しをこちらへと向けて

きた。さしもの彼女も驚きを隠せないようで、透き通るような蒼さを持つ瞳は『なぜ』の思いに揺れていた。

「た、正しく言うと、街中でウルを見かけたから後をつけたんだ。もつとも、あっさり気づかれちゃったけどね」

真っ直ぐな、それもこの美しい瞳で眼差しを向けられると、何度経験しても動揺してしまう。つい、どこか軽口を叩くように喋ってしまうが、それでも空色の双眸は視線を外すことはなく黙ってこちらを見据えていた。

真摯な姿勢には真摯な姿勢で応えねばならない。気持ちを浮つかせ、それにいつまでも甘えているわけにはいかなかった。

レイルは気持ちをあらため、表情を引き締めた。

「ユイリスのことをもつとよく知れたかったんだ。でも、ユイリスには聞けなかった。だから、ウルから話を聞こうと思って彼を追いかけたんだ」

なぜ彼女のことを知れたかったのか。

もちろん彼女のことが心配だったからだ。父親からの受け売り言葉を基に『過去の詮索はしない』旨を以前この河原で彼女に面と向かって言ったのである。一度口にした以上、たとえ彼女の身を案じたからという理由であっても、その過去を知ろうとする行為は約束を違えることになってしまう。

ましてや既にウルゼツクにも指摘された点であるし、なにより誰よりも自分がよく分かっている。

だからレイルは、ウルゼツクの後をつけこと、ユイリスの過去を知りたかったこと、その事実しか口にしなかった。

ウルゼツクとやりとりした際には気色ばんでしまったが、今は違う。当のユイリスを目の前にしているのだ。自分の思い、言い分はあれど、レイルはそれを胸の奥にしまった。是か非かを決めるのは他でもない、ユイリスなのだから。

黙したまま彼女の眼差しをしつかりと受け止める。すると、彼女はそれまで硬かった表情を和らげた。

「ありがとう、レイル。私のことを心配してくれたから、ですものね」

ユイリスはレイルを責めたりしなかった。レイルの思いは彼女へと通じていたのである。

彼女が罵詈雑言を吐くような人物ではないことはよくわかっていたが、それでもどんな言葉が返ってくるかわかるはずもない。何を言われても仕方ないという覚悟を決めていたものの、緊張せずにいられたかという答えは否だ。レイルは、彼女の言葉を聞いて内心胸を撫で下ろしていた。

「でもウルは何も話さなかったんだ。ユイリス自身ではじめをつけるだろうから、彼女を信じてやれ、って言うて」

「そういうところも相変わらずね、彼……。私に伝えなければいけないことって、もしかしてウルからの？」

彼女の問いにレイルは頷いた。

「俺はしばらくここに逗留している。気持ちに整理がついたら、会いにこい」って言うてたよ」

ウルゼツクからの言伝で それは、2人がやり合ったあの林での一件で心を乱したユイリスではあるが、彼女が再びウルゼツクの前に立てるよう必ず自身の心と向き合うことを信じる思いを内包したものだ。

裏返せば、ユイリスの気持ちに整理がつくまで待つ、という意味が隠されていることからウルゼツクの彼女を慮る気持ちがよくわかる。聡明なユイリスが彼の思いに気づかないわけがなかった。

ユイリスは思いを確かめるように目蓋を伏せ、一言、静かに『ありがとう』とつぶやいた。それはもちろんレイルにも向けられた言葉ではあったが、彼にだけではないことはレイルもわかった。

再びユイリスが目蓋を開いた時、彼女の双眸にほんの少し力強さが宿ったように見えた。

彼女の中で何かが変わったのか……それはわからなかったが、少なくともユイリスが良い方向に気持ちを傾けたことは間違いないさそ

うだった。

「私の番ね、今度は」

強張っていた表情を解し微笑みまで浮かべたユイリスは、再びギョーム大河へと視線を移し、ゆつくりと語り始めた。

「ウル……ウルゼツク」ラインローグ。そう、彼は私にとって言うなれば『兄弟子』にあたる人なの。時機はまったく違うけど、同じ先生に師事を仰いだことがあるから」

「そういえば、ウルは『戦師』、って言ってたよね」

「ええ、イスカム」スカラー戦師。私たちの先生。先生は偉大で有名な剣士だったから。私は剣術の教えを受けたことはほとんどないけれど、もっと大切なことを教えていただいたわ。だから先生とお呼びしているの。師事を受けたのはとても短い間だったけれども、迷いに苛まれていた私を先生は導いてくださった」

陽光に彩られた河面を眺つつ、ユイリスは過去を懐かしむように一言一言を噛み締めながら言葉を紡ぎ出していた。

「先生のお体が病に冒されていたことはもちろん知っていたわ。でも、まさか命の灯火を消してしまうほどの病だったなんて、思ってもみなかった。辛そうな素振り、一度もお見せにならなかったから……。でも、ウルが言っていた通り、先生は私たちに心配をかけまいとしていたんでしょうね。そういうお人だったから……」

せつかく戻りかけたユイリスの穏やかな表情がやや曇る。彼女にとつて大切な人物であり、しかも亡くなっていることがわかった人物の話をしているのだ。無理からぬことだった。

「優しい先生だったんだね。俺も会ってみたかったな」

彼女を励ます意味も込めて、彼女の先生のことを称える。もちろん決してうわべだけのものではない。ユイリスほどの人物が敬愛しているのだから、相当な偉人だったのだろう。純粋な思いから出た言葉だった。

その思いを感じ取ってくれたのか、ユイリスは口元をほころばせた。表情を曇らせた硬さは少し残っていたが、嬉しさがそれを上回

っているのだろう。満足そうな様子が彼女の心情を物語っていた。  
「そう言えば」

たどっていた記憶の系の先に忘れていたことを見つけたのか、唐突に目を大きく見開いたユイリスは河面からこちらへと向き直った。  
「先生はことあるごとに私のことを『最後の弟子』とおっしゃっていたわ。私はてつきり、今後は自らの人生を中心に扱われるからだとばかり……。他ならないご自身のお体のこと。今思えば先生はご自身の命が長くないことをご存知だったんだわ」

いまさらではあるが、彼女の先生たるスカラー戦師が己の寿命がそう長くないことをわきまえていたことを証明するできことに気づいたユイリスは、再び肩を落としてしまう。

気を取り直したり落ち込んだりと忙しい彼女だったが、それだけ彼女にとつて恩多き人であったということがあらためてよくわかる。こんなにも目まぐるしく感情を変化させた彼女を見たのは初めてであり、スカラー戦師がいかにユイリスの心の支えだったのかを表していた。

しかし、ユイリスの恩師はもうこの世にはいない。

その事実が、とうとう彼女に本心を語らせることになったに違いなかった。

「貴方に色々と偉そうなことを言ってきたけど、私、ウルの言う通り自らの責務を棚に上げて旅に出てしまったの。いいえ、逃げ出したのも同然ね……。どこへ歩んで行けばいいのか、わからなくなってしまったから」

ユイリスが語るのを黙って聞いていると、彼女は途中から逃れるように視線を外した。

「最後に先生にお会いしたのは、もう3年ほど前になるかしら。故国を後に旅立つ決意をし、先生から託されていた『調和の法環』をお返しするために。『調和の法環』を持つ者にはとても重い責務が科されているの。だから、自らの進むべき道もわからなくなっている輩が持っているわけにはいかなかったわ」



自らの行いを否定するかのように、もしくは非難するかのように、言いながら彼女は小さく頭を振った。小さくため息をつき、伏し目がちになる。唇を噛み締め、彼女はそのまま瞳を閉じた。

しばしの静寂。

ユイリスの独白を黙って聞いていたレイルは、もはや彼女の思うようにさせてやろうとただひたすら彼女の動向を見守った。

「でも」

言って、ゆっくりと目蓋を開く。蒼く澄み渡った空を、同じ色の瞳で見上げながら言葉を重ねる。

「でも、先生はおっしゃった。『あくまで預かるだけですよ』と」  
その彼女の台詞で全てが繋がった。過日、ウルゼツクが持つて来ていた『調和の宝環』は、スカラー戦師が亡くなった証であると同時に、彼の戦師が己の死を境に再びユイリスへと託すためにウルゼツクに持たせたものだつたのである。

ユイリスは自らが『調和の宝環』を持つに足る人物ではないと考えていたのだろうが、彼女の先生は最期まで彼女こそが所有者たる資格の持ち主であるという思いを貫いたのだ。

彼女がそれほど敬愛する人物の思いなのであれば、受け入れるのがそれこそ師への恩返しになるのではないか。

これまでユイリスのたどってきた道はきつと複雑で、ひと括りに語れるものではないだろう。それでも、スカラー戦師の思い、彼女を信じ見守ってきた思いは彼女のためになることはあっても、彼女を間違った道へと誘うはずがない。

「あれから3年。もう、3年経ってしまった。なのに、私はまだ迷い、煩っている」

苦悩するユイリス。

それでも、彼女は賢明な女性だ。はっきりとはわからなくとも、己が目指さねばならない道は薄々気づいているはずだ。言葉通り、迷っているだけに違いない。

それがなんとももどかしい。そのもどかしさが己の心を突き動か

したのか、レイルは自分でも不思議に思うくらい滑らかに語り出した。

「ユ、ユイリスってさ、多分すごく難しく考えすぎなんだよ。ユイリスが生きてきた世界は俺なんかには到底理解できない世界なんだろうけど、でも、ユイリスならもつと肩の力を抜いて、一番いい道を歩んでいけると思うんだ」

「レイル……」

雄弁に語る様に驚いたのか、ユイリスは眼を大きく見開いていた。「ユイリスの先生だって、きっとそうあるべきだって思ってるに違いないよ。ユイリスのことを信じているから、その、すごく大切な『調和の法環』だって預かっていてるだけって言ったんだと思う。ユイリスに渡すために、ウルに託したんだと思う。どんなに迷ってても、大切なものを持つ資格はユイリスにこそあるって思っていたから、だから預かるだけって言ったんじゃないのかな」

話を黙って聞いてくれていたユイリスに対し、レイルは熱っぽく続けた。

「他の誰でもない、ユイリスの先生なんだよね。だったら、先生を信じてあげなきゃ。先生の遺志に応えるためにも、生徒はやらなくちゃならないことなんだと俺は思う」

ウルゼツクから言われた、ユイリスを信じること。そのことに重ねながら、レイルは頭の中に浮かんだ思いの丈を全て紡ぎ出した。言ってしまったからさすがに我ながら偉そうなことを語りすぎたかと思い返すが、ユイリスには機嫌を損ねたり不快に感じたりしている様子などなく、むしろなにかまぶしいものを見たかのように目を細めて微笑んでいた。

「な、なに？　どうかした？」

自分が自分でないくらい語り倒した後だからこそ、ユイリスの態度にはかえって不安を呼び起こさせられる。

やはりなにか余計なことを言ってしまったのでは、と戸惑っていると亜麻色の髪の麗人は、温かみのある優しい笑みを浮かべながら

頭を振った。

「なんでもないわ。ただ、なんだか凄くレイルが大人びて見えたから」

大人びて？ レイルは目を丸くした。的を外したことは言っただつもりはなかったものの、思ったままを喋っただけなの不評を買いこそすれ、まさか褒められるとは思ってもしなかったのだから。そんなに大人っぽいことを言っただろうか、と妙に気になって1人考え込んでいると

「貴方はいつも真っ直ぐね。貴方には大切なことをいつも気づかされる。そう、本当はね、私……」

笑みは浮かべているが、ユイリスの面持ちはどこか悲しそうだった。

言いかけて口ごもった彼女の言葉が気になったものの、その先を尋ねられるわけもなく。しばしの沈黙が2人の間を支配した。

先ほど同様、凍りついた時を解したのは、ユイリスだった。

やにわに立ち上がると、彼女は両手で己の両の頬を軽く張った。

乾いた音とともに、小さく「よし」とつぶやく声が聞こえた。

突然のできごとにその動向を見守っていると、彼女はこちらを見下ろし、言った。

「心配してくれて本当にありがとう。まだ、迷いは吹っ切れてないけれど、レイルのおかげで凄く元気が出てきたわ。私は大丈夫。貴方の言う通り、先生のご遺志ですものね。必ず、答えは出すから」  
ユイリスの言葉に嘘はなかった。彼女の表情からは何かに引つかかったようなものは消え失せ、晴れ晴れとしたものへと移り変わっていたのだから。

ようやく本当に戻ってきた、いつものユイリスだった。

これまで色々なことがあったが、重ねてきた苦労や思い煩ってきたことも報われた気がする。レイルはようやく心から安堵したのだった。

ただ、1つ忘れていたことがある。

ユイリスという人物が本来の自身を取り戻したらどうなるか、ということを。

「レイルが頑張っているんだから、私も頑張らなきゃ。手合いの日はいいよ明後日。今はもう、ゲインにいかにして勝つかしか考えないわ。だからレイルも、最後の力を振り絞ってね」

満面の笑みを湛え、奮起を促してくるユイリス。ただでさえ厳しい指導が続いているというのに、さらに熱を入れる意気込みも見せていた。

元気になってくれたのはまったくもって嬉しいことなのだが、元気になり過ぎてしまうのはいかなものかと、レイルは真剣に悩み始めてしまう。

「あら、どうしてそんなに難しい顔をしているの？ それより丁度いいわ。せっかく河原に戻って来たんだから、もう少しここで修煉していきましょう。貴方に教えておかなければならないことを思い出したから」

まさかそうくるとは思ってもみなかったので呆然とするレイル。

一方、ユイリスは彼の様子などおかまいなしのようにやる気に満ち溢れている。

「ゲインにあって貴方じゃないもの。その差を埋めるための『とつておき』だから。しっかり体で覚えてね」

つい先ほどまでこの場所で修煉していたというのに、また地獄を見なければならぬとは。

もちろん自分のためにやってくれているのだとはわかってはいるし、ありがたいことだとも思っているものの、頭よりも体が悲鳴を上げそうだ。

それにしても自分とゲインの差とは？ その差を埋めるための『とつておき』とは？

それらを知るためにも、今少しユイリスに付き合うほかはなさそうだった。

あの時に比べ月は真円から欠け始めていたが、その存在感は微塵も揺らぐ夜空に輝いていた。

ギョーム河岸に打ち倒され、強制的に月夜を見せつけられることになったあの日から早いもので一週間。レイルの姿は再び、同じ場所にあった。

彼の視線の先には、見慣れた男の姿。

ゲイン。彼は約束違わず、きつちり7日目に現れた。日中は一切姿を現さず、日が落ち、月光が支配する夜の世界が訪れてからテルミト亭にやってきたのである。

為すべきことはお互いわかっている。2人は無言でテルミト亭を後にし、このギョーム河岸へとやってきたのだった。

夜空の月が欠けただけで、場所も時間も前回とほぼ同じ。

だが、以前と異なりこの場にいるのは2人だけではない。

レイルには心強い味方、ユイリスがいる。彼女は少し離れた場所からこちらの背中を黙って見守ってくれている。

一方、ゲインにも連れ合いの男がいた。細身のゲインとは違い、その男は鋼のような筋肉に身を包んだ屈強な輩だった。

レイルがユイリスを伴ったように、ゲインも見届け人として知己のその男を連れてきたのだという。ユイリスが同席している以上、もちろん異を唱えることはできないしそもそも唱えるつもりもない。ゲインに誰が同席しようとか関係ない。倒すべき相手はただ1人なのだから。

雄大なギョーム大河から河岸に打ち寄せる穏やかな波の音がしっかりと聞こえるほど静まり返ったその場に、どこか喜色を含んだ男の聲が響く。

「この一週間でどれだけ力をつけたか知ったこっちゃないが、ま、覚悟はいいな？」

不敵な笑みに口元を歪めたグエインだった。

相変わらずの不遜な態度で、完全に彼はレイルを見下している。

だが、不思議と頭にこない。

やるべきことは全てやった充足感　それが気持ちを落ち着かせ、冷静さを維持させているのかもしれない。レイルは無言で頷いた。

「大言吐いたユイリスちゃんよ。約束、忘れてねえよな」

薄ら笑いを浮かべ、レイルの睨みつけるような視線を受け流していたグエインは、ユイリスの方を見やって言った。

約束　すなわち、レイルが彼に敗れるとユイリスが彼の物になってしまうということ。

穏やかだったレイルの心の水面に、さすがに小波が起きる。

一方、当のユイリスは彼の心中とは裏腹にいたって平静だ。

「ええ、もちろんよ。レイルが負けたら、貴方のお好きなように」

一切の動揺もなく、平然と言ったのける様は懷疑を通り越して感嘆すら覚える。

だが、彼女がそこまで自信を持っているのは、自分を信じてくれているからだ。彼女のその思いに応えねばならない。彼女のためにも、そして自分のためにも。

ユイリスからの返答を得て、ことさら嬉しそうに口元をいやらしく歪めたグエイン。余裕に満ちた彼の鼻っ柱をなんとしてもへし折らねばならない。絶対に負けるわけにはいかなかった。

「レイル」

胸中で気持ちを高めていると、後ろから呼びかけてくる声が。

半身だけ振り返ると、ユイリスが真剣な眼差しを投げかけてきていた。

「私が教えたことを全て忠実にこなせば、絶対に負けない。必ず貴方は勝てる。だから、常に冷静に、心を平静に」

いつでも自分を支えてくれたユイリス。親身になって自分を鍛えてくれたユイリス。最後まで助言をしてくれた彼女を、グエインな

どに決して渡してはならない。必ず勝つ　その思いを込めてレイルは頷き応えた。

「その意気。後悔のないよう、思いきりやってきなさい」

温かいユイリスに送り出され、レイルは一段と気持ちを引き締め  
る。

グエインに向き直ると、彼は侮蔑の表情を浮かべていた。

「最後まで女に助けられていい身分だねえ、レイル君。お別れ会はもう十分かい」

ユイリスとのやりとりを見、嘲笑し、皮肉をぶつけてくる。

明らかに挑発ではあるが、これまでであればやはり簡単に頭に血を上らせていたことだろう。

だが、今は違う。自然と受け流せる。

レイルが反応を示さないことに肩透かしを食らったようで、グエインは舌打ちすると

腰に下げた木剣を抜いた。レイルも手に提げていた木剣を構える。辛く苦しい修練の集大成。

いよいよ真価が問われる時が来たのだ。

手合いが始まった。

ついにこの時がやってきた。ユイリスは握り締めた拳の中が汗で湿っていることに気づき、微笑した。

自分が戦うわけでもないのに、なにを気負っているのだろうか。今教えられること、彼の力を伸ばせることは全てやり通した。後はもう、レイルを信じて託すしかない。

そもそも、そんなに気負ってしまうぐらいならこんな回りくどいことをせずとも一週間前のあの時、グエインを完膚なきまでに己が叩きのめしてしまえばよかったことである。

それをしなかったのは、あくまでレイル自身の手で解決させてけじめをつけさせ、さらには彼の成長を願ったからだ。

だとすれば、黙ってなりゆきを見守るのも己の責務である。

齒痒い思いを内包しつつも、ユイリスはレイルとグエインの戦いをその目に焼きつけようと手合いに集中した。

互いに睨み合い、動かないレイルとグエイン。

だが、2人の距離は打ち合うにはまだ遠すぎる。

どちらが先に仕掛けるか。その命題はすぐに解が導き出された。初めに動いたのはグエインだった。

突如として突進した彼は、レイルに迫り頭上に掲げた木剣を鋭く打ち下ろす。

色々と偉そうなことを口にするだけのことはあり、彼の剣撃は素人の域を出ている。未経験の人間であれば、あの剣撃をまともに受けてしまうことだろう。

その斬撃を、レイルはかわした。かすりもせず、体捌きを駆使し半身になってグエインの剣撃を鮮やかにかわしたのである。

一週間前までのレイルであれば、多少は打ち所をずらすことはできても避けることは難しかったに違いない。

しかし、今の彼はいとも簡単にやってのけた。もちろん偶然ではない。この一週間、何度も繰り返し繰り返し体に覚えこませた体捌きの修練の成果が花開いたのである。

自信をもって放ったのだろう。あっさりと自身の斬撃をかわされ、グエインは明らかに狼狽していた。

一瞬でも焦りを浮かべた表情を隠すかのように、グエインは続けて横なぎに木剣を振るった。

対するレイルは、素早く片足を引いて体を後退させると、またもやグエインの木剣をかわしたのである。

一度ならず二度までも。それは決して偶然ではないことを示していた。

一方で、かわしたレイルもグエイン以上に驚きの表情を浮かべているのが垣間見えた。

彼自身も信じられないのだろう。今まで痛い目に合わされてきた



グエインの木剣を回避できたのだから。

もつともなことだが、これは当然のことなのだ。それだけの地力を彼は持っていたし、その力を有効に発揮できるようにするための修練をこれでもかというほど施してきたのだから。

綿密にグエインの剣撃を読んで次にこう動いてこうかわす、といった頭で考えて回避したことではなく、体が先に動いてかわせたことについてもレイルは驚いているに違いない。それこそがまさに「体で覚えた」ということで、より高度な実戦になればなるほど必要不可欠のことだった。

頭で考えてから行動に移しては、命が幾つあっても足りないのが実際の戦いというものである。反射的に体が動き、相手の攻撃に対処し、防御あるいは攻撃に転ずるという、流れるように戦闘を組み立てていくことが理想だ。

完璧にこなせる領域までレイルが到達しているかと言えば、もちろんまだほど遠い状態ではある。

ただ、確実に一步は踏み出している。

焦ったグエインが畳み掛けるようにして始めた連撃にも、レイルは的確に対処して回避し続けていることがその証だった。

これまでならば確実に直撃していた剣撃を二度もかわされて心の均衡に微妙にずれが生じ、それが影響しているのだろう。グエインの剣撃は、剣を繰り出す度に微妙に鈍くなっているのが窺えた。

また、レイルに対する見通しの甘さがグエインの冷静さを簡単に欠かせた要因にも違いない。おそらく一週間やそこらで何が出来ると高を括っていたのだろう。その油断が仇となった。

ただでさえレイルの回避能力が向上しているのである。あの剣撃ではレイルに傷一つつけることはできないだろう。

そして、レイルもいつまでもかわしているだけで終わるはずがない。

彼に教えたのは相手の攻撃をかわす術だけでなく、相手を攻撃する術も含まれているのだから。

何度目かの斬撃をかわした後、レイルの腕が翻った。

木剣でグエインの剣撃を弾き返し、流れるように攻撃へと転じたレイルの打撃が彼の横腹に命中したのである。

痛さと、信じられない思いを顔一面に浮かべてよろめくグエイン。有効打を彼に与えたのは恐らく初めてに近いのだろう。打撃が命中したことに逆に一瞬驚いているレイルの姿があった。

が、すぐに我に返ったようで、続けて剣を放つ。対するグエインも歯を食いしばって痛みを堪えながら、今度は迫り来るレイルの攻撃を木剣で必死に防御していた。

大勢は完全に逆転し、レイルがグエインを圧倒し始めた。あれだけ自信に溢れていたグエインの姿は見る影もなく、今や一方的に守勢に回っている。

ユイリスにとって、こうなることは当初からわかっていたことだった。

始めはグエインが攻勢に出るだろうが、どの時機を経て切り替わるかはともかく、必ず立場が逆転することは2人の力を客観的に比較すれば自ずと答えが出ていたからである。

では、安心してこのまま結果を待てるか、と言えばそれはまた別の話だ。

しかもユイリスは、得体の知れない胸騒ぎを感じていたのである。確かにレイルは優勢に立ったが、ほんのわずかながらその剣先から攻撃当初の鋭さが次第に欠け始めているのをユイリスは見切っていた。

疲れから来ているものなどではない。大勢には影響はない程度だが、その変遷はレイルの心に、彼自身も気づいていない隙間『油断』が生まれた結果である可能性が高い。

また、確かに今やほとんどの面でレイルはグエインを上回っていたが、1つだけ確実に上回っていないことがあった。

それは『経験』である。

実は、今回の手合いでユイリスが最も懸念していた点こそ、2人

の経験の差だった。

様々な状態、状況を経験してこそ、戦闘においての臨機応変さや柔軟性は磨かれる。その経験が、レイルは相手よりも絶対的に不足していた。

もちろんその点も踏まえ、様々な想定をして修練も行った。

ただ、それはあくまで修練でのこと。台本のない実戦では想定し得ない事態も巻き起こるであろうし、仮に想定していたとしても、実際の事態に対応できるかと言えばそれはまた別の話だ。実際に対応できるかどうかを左右するものこそ、培った『経験』だからである。

胸騒ぎの果てにあるものがいったい何か。それはわからない。

わかっているのは、レイルの感情の変遷、そして2人の経験の差が胸騒ぎに影響を及ぼしているだろうということだけだ。

それでも、グエインに有効な手数がなければレイルの勝利は時間の問題である。

そう、このまま何事もなければ。

ユイリスは彼の勝利を祈った。

ただ、祈った。

いけるぞ！

守勢に回り、一方的に攻撃を受け止めるだけになったグエインが、ついにじりじりと後退し始めたのを見、レイルは勝利を確信した。

初めは半信半疑だった。

グエインに勝つための辛く苦しい修練を、わずか一週間とはいえこなしてきたのである。多少なりとも力はつけられた、という自信はあった。

しかし、これまでグエインと手合いをして勝てたことなど一度もない。

いつも負け続けてきたのである。力をつけた自信はあっても、確

実に勝利を収められる自信を持つまでには至らなかった。負けられない、という思いを固めることは話が違う。

ところが、実際に手合いが始まるとまったくもって予想しえない事態が起きたのである。

散々翻弄されてきたグエインの剣が、動きが、あたかも時の流れが遅くなったかのごとくはつきりと捉えられたのだ。さらに、ごく自然に体が動き、彼の攻撃を易々と回避することができたのである。毎度やられてばかりだったのがまるで嘘のようにグエインの剣をかわすことができたレイルは、自らの成長に驚いていた心が落ち着いてきた頃、ついに攻撃へと転じた。

素人ではないとはいえ、せいぜい毛の生えた程度の剣でしかないグエインには幾つかの隙があり、驚くほど錬度を上げたレイルはその隙をはつきりと認識していた。

苦し紛れに放ってきた突きを切っ先で打ち払い、間合いを詰める。がら空きとなったグエインの上体に対し、頭で考えるより体が反応し小さく振り抜いた斬撃を放った。

レイルの木剣は吸い込まれるようにグエインの横腹に命中。たちまち彼は苦悶の呻きを上げ、苦痛に顔を歪めながらよろめいて2歩、3歩と後退った。

まともな打撃を彼に与えたのはこれが初めてのことだけに、レイルは一瞬我が目を疑ってしまう。これまで散々煮え湯を飲まされてきたグエインに対し、一矢報いたのだ。信じられない思いに駆られても無理はない。

では、これは夢なのか、それとも幻なのか。答えは否。現実なのだ。

であれば、この好機を逃すことは愚の骨頂である。

修練によって著しいまでもに剣技を、戦術に対する才を伸ばしたレイルは、思考を素早く切り替え、すぐさま次撃を繰り出した。

さすがにグエインも必死になって堪えていたため、なかなか直撃を与えることはできなかったものの形勢は真逆になった。格段に素

早さと鋭さを増したレイルの剣撃が間断置くことなくゲインに襲いかかり、ゲインは反撃の糸口すらまったくつかむことができぬまでに追い詰められていったのである。

レイルの剣は手合いを完全に支配していた。

こここまでくれば、初めてにして大変価値ある一勝を確かなものと感じるのも当然のことだ。

不確かな自信を確信に変えたレイルの攻撃は、この手合いの終焉を飾ろうとしていた。

強烈なレイルの斬撃を受け損ねて体勢を崩したゲインは、たたらを踏むようにして後退るも踏ん張りが利かずにそのまま後ろに倒れてしまう。

丁度尻餅をついた形になるゲインだったが、その倒れ方に勢いがありすぎた。尻餅をついた衝撃で木剣を手離してしまい、まったくの無防備になってしまったのである。

ゲインにとっては絶体絶命の窮地。

レイルにとっては完全なる勝機だった。

手合いはあくまで修練の一環であるため、相手を必要以上に傷つけたり、ましてや殺すことが目的ではない。

よって、相手が戦闘力を明らかに失った場合は、その鼻先に木剣の切っ先を突きつけることで手合いの勝敗を決めるのが一般的な規定だった。

ゲインは武器を取り落とし、さらに尻餅をついた状態で明らかに無防備だ。

このまま彼の鼻面に木剣を突きつければ、誰が見てもレイルの勝利を疑う者はいないだろう。

記念すべき、初めての勝利。それがとうとう手の届くところまでやってきた。

ユイリスの厳しい修練に必死になって喰らいつき、辛く苦しい一週間を耐え抜いたこと。それだけではない、この半年の屈辱の日々を耐えてきたことが今まさに報われようとしている。

これから迎える結末に、胸が高鳴る。もはや後がないグエインは苦虫を噛み潰した表情でこちらを睨みつけていたが、今となってはまったく気にならなかった。

これまで味わったことのない勝利の高揚感に、レイルは頬を高潮させていた。

一步、また一步、倒れているグエインに近づく。

これで終わる。

なんとも言えない思いが胸の内一杯に広がるのを感じつつ、いよいよ木剣を宿敵の鼻先へと突き出そうとする。

その時だった。突然、急に胸焼けを起こしたような非常に不快な感覚に襲われた。

これまで感じたことのない感覚に、反射的にレイルの動きが止まる。

いつたいななんだ？

考えてみても心当たりはまったく浮かばない。

その答えを教えてくれたのは、この場において彼の最大の敵であった。

もちろん忘れていたわけではない。

ただ、自身に急激に湧き起こった不快な感覚に気をやってしまったのも間違いのないことだった。

それまで苦渋に満ちた表情をしていた眼前のグエインが、いつの間、唇の端に歪めて不敵な笑みを漏らしていたことに気づいた時はもう遅かった。

グエインの手が翻った瞬間、一瞬にして視界一杯に広がる無数の何か。

とつさに両手を目の前に翳して瞬間的に防御するが、間に合わなかった。

目をつぶるも、その何かが両の目の中に入ってしまったのである。激痛が走り、目を開けることができない。

慌てて手の甲で目元を拭うが、まったく効果はなかった。

異物が目の中に入ったことにより当然滝のように涙が溢れ出すが、事態はまったく好転しなかった。

突然、激痛は両目元だけでなく、腹の真ん中にも湧き起こった。痛みと共に襲い来る浮遊感。レイルは、自分の腹に何かが当たり、後ろへ弾き飛ばされたことを悟った。

一週間とはいえ、ユイリスの地獄の修練を耐え抜いただけあり、レイルは目が見えずとも反射的に受身を取って衝撃少しでも緩和していた。

それでも、背面から地面に叩きつけられたことには変わりなく、その衝撃に呼吸が一瞬止まりむせ返る。

目元と腹、さらに背中から襲い来る痛みという三重苦に、さらに四つ目の苦しみがレイルを襲った。憎きグェインの勝ち誇った肉声となつて。

「ざまあねえな、レイル。それなりに腕を上げたことは認めてやるが、しょせん付け焼き刃。たかだか一週間やそこで俺様に勝てるわけがねえだろ？」

痛みのせいで見開くことはできなかったが、片目をほんの少しだけなら開けることはできたため、涙の向こうにうつすらと映る男の姿を見た。

立ち上がり、いつの間にか取り戻した木剣を弄びながらゆっくりと近づいてくるグェインだった。

あとほんの少しだけ手を伸ばせば手に入った勝利。それが、ほんの刹那の気の迷いから失われようとしている。

満面に喜色を浮かべたグェインが、木剣を振り上げているのが見えた。斜め横なぎにそれは振り下ろされた。

衝撃と激痛が、再びレイルを襲った。

ユイリスが抱いた懸念は、現実のものとなつてしまった。

木剣を失い、さらに尻餅をついた状態に追い込まれたグェインに

勝機はもはやなく、レイルがとどめを示すために木剣を彼の鼻先に突きつけるだけで勝敗は決まるところだったにも関わらず。

なぜか。その理由は明白だった。

ユイリスは、グエインが尻餅を着いた時点で、逆にレイルに危機が迫ったことに気づいた。狼狽している表情とは裏腹に、グエインは戦意を失わず河原の『砂』をゆつくりと握り締めていくのを見逃さなかったからである。

一方のレイルはその彼の行為にまったく気づいていなかった。目の前の勝利だけしか見えていない状態に陥っていた。

このままではグエインの手から放たれた砂つぶてがレイルを襲い、まったく気づいていない彼は無防備なままその攻撃を一身に受けてしまうことだろう。

砂つぶてが目に入れば、痛みで目を開けられないのは必至。そうなれば勝負の趨勢は再び逆転し、今度は圧倒的に不利なレイルに勝機など塵ほどもなくなってしまう。

グエインが無法を働いているのであれば、それを理由に手合いを止めてレイルの反則勝ちと決定づけられるが、直接目を突くのは禁じられているものの砂を投げつけてはいけないという規定はない。手合いの掟が破られていない以上、一対一の手合いが一度始まってしまったら助けに入るのもちろんのこと、声をかけることすら許されない。もしそれをすれば、規定を犯したとみなされて逆にレイルが反則負けとなってしまう。

彼を助けることはできない。

それでも、まだ今ならば間に合う。自分の力だけで窮地を乗り越えられる。

グエインの異変に対しレイルが一刻も早く気づくこと　ユイリスはひたすらそう願った。

彼女の願いが通じたのか、レイルの動きが止まった。

気づいてくれた　ユイリスは歓喜に小躍りしそうになるも、すぐに凍りつく。遅かったのだ、全てが。



グエインの手が翻り、彼の手を離れた砂つぶては手をかざしてたレイルの防御をかくぐってその両の目に飛び込んだのだから。

懸念は、最悪の事態となって具現化した。

両目を潰されてしまったレイルは瞬く間に打ち倒され、それまで圧倒されていた鬱憤を晴らすかのごとく、グエインの陰湿な攻撃にさらされていた。

目が利かない中、レイルは激痛に耐えながらも勘を頼りに木剣を振り回して反撃を試みてはいたが、ことごとく失敗してしまう。

懸命に反撃しようとしている姿勢がグエインの嗜虐心を煽ったのか、圧倒的有利な立場となった彼は、満面に負の喜色を湛えてレイルの体にさらに木剣を打ちつけていた。

もはや、レイルがグエインに勝利するのは極めて難しい。皆無に近いと言っても語弊はないだろう。

すぐにも駆け出し、手合いを止めさせたかった。先ほどから握り締めている拳は、指の色が赤く変色し始めていた

だが、足が動かなかったのだ。一步を踏み出せなかった。

我が身が可愛いから？ 否 レイルの敗北はすなわち自身がグエインの慰み者になるということだが、無論そのような表面的で浅薄なことなど原因ではない。

この、絶望的な状況でも、レイルの勝利を感じる己の心が彼女を留めていたのである。

まだレイルは終わっていない。

ユイリスの教えた全てを、彼は出し尽くしていない。

彼には窮地を脱する手立てを教えてある。今のこの状況を覆せる方法を。

レイルがそれに気づき、実行できれば結果は自ずとついてくる。彼の勝利を邪魔してはならない。

誰が見ても勝負の帰趨、グエインの勝利を疑わないであろう状態の中、ユイリスはレイルが手合いを制することを信じた。

他でもない。とても短い間ではあったが、レイルは彼女が育てた

初めての『生徒』なのだから。

何度となく体験した痛みだが、今日味わった痛みはことさら度合いが激しかった。

それは単純な肉体的な苦痛以上に、精神的にとっても苦しいものだったからだ。

一時は勝利を確信するほど圧倒的優位に立ったにもかかわらず、今はただグエインの剣を体で受けるのみ。後ほんの少し手を伸ばせば得ることのできたものが失われたのだ。その喪失感は計り知れない。

それでもできることはしようとした。恐らく砂を投げつけられたため、目が開けられなくなり視界を失いはしたが、グエインの気配を頼りに木剣を振り回してみたのだ。

結果は全て空振り。まったく功を奏さず、逆に空振りしたところを攻撃されてしまった。

後は一方的に打たれるのみ。

砂の入った両目の激痛はまだ癒えず、まったく目を開けられない。かなり涙を流したが、効果は現れていなかった。

体に蓄積したグエインの打撃もじわじわと効いていた。最後のやりどころである自身の木剣を必死に握り締めていたものの、何度か腕を打たれたためにだんだんとその感覚が失われてきていた。

やっぱり、グエインには勝てないのか。

花開いた自信を無残に打ち砕かれ、レイルはもはや為すがままの状態になっていた。立っていることなど当然できず、河原に倒れ込み頭を抱えて丸くなってできる限りの防御の姿勢を取るのが精一杯。喪失感に連鎖して、絶望感が急速に胸の内を占めていく。

どうせ負けるなら、いつそ敗北をグエインに認める方がいいに違いない。これ以上、痛めつけられることはなくなるからだ。そこまでの思いが首をもたげ始めていた。

崩れ折れた体の痛みに、心まで折れそうになるレイル。

その彼を、崖っぷちで踏みとどまらせたのは、生涯で初めての、そして最高の剣の師匠の存在だった。

「いつもあっさり勝つてばかりじゃつまらねえからな。お前に花を持たせてやっただよ。そんなこともわからずに、お前、自分が勝てると思っただろ？ 残念だったな。あんないい女が手に入るつてのに、勝ちまではお前にゆずれねえよ」

ほぼを勝ちを得たことにすっかりご満悦になったグエインだった。レイルを打ちすえる手を休め、余裕たっぷりに言い放ったその言葉。もはや風前の灯火だったレイルの『戦意』を蘇らせたのは、グエインの勝利はユイリスの身柄が彼のものになってしまふという現実である。

単に自分が負けるだけならまだいい。

だが、自身の敗北はそれだけでは済まない。大切なユイリスをこのまま無為にグエインへ差し出すような結果に終わることなど絶対に許せなかった。

グエインに勝つしかない。

しかし、圧倒的に不利なこの状況をどう覆すか。

答えは自然と脳裏に浮かんできた。いや、蘇ったと言う方が正しいだろう。

そうだ、ユイリスが教えてくれた『とっておき』だ。

成功する可能性が必ずしも高いわけではない。

外せば、当然意図することをグエインに気づかれると考えて然るべきだろう。それでもこの状況を打開するには、もはやあの『とっておき』ぐらいしか思いつかない。

打たれすぎてしまった今の体の状態を考えれば、機会は一度きりだろう。二度はないと考え、ただの一度の機会を活かす覚悟をすべき時だった。

レイルの心は一つだった。

「何！？　なんだ、まだ動けるのか？」

グエインが驚く声を耳に受けながら、レイルは必死に河原を転がった。『とっておき』を行使するためには彼との間合いが近すぎる。距離を置くためにも、転がって間合いを取ったのだ。

「レイル君、諦めが悪いってのは感心しないなあ。男らしく、潔く負けを認めた方がいいんじゃないか？」

嫌悪しか抱けないグエインの声。

だが、今はその声ありがたい。なぜなら、気配は読みきれずとも、グエインの声が彼のいる方角、彼と自分とのおおよその距離を教えてくれるのだから。

彼我の間合いが十分取れたことを確認できたレイルは、久しぶりに二の足で立ち上がり木剣を構えた。それがグエインの気に障ったようだった。

「なんだよ、この期に及んで自分の置かれた立場に気づいてないよ。うだな。よし、わかった。そろそろ飽きてきた頃だ。勝負、決めさせてもらうぜ」

舌打ちしてそう吐き捨てた彼が歩き出す足音が聞こえる。グエインはとどめを刺しに来るつもりだ。

それでいい。それこそが『とっておき』を行使するに最も適した状況なのだから。

レイルは一度きりの機会を外さぬためにも、激痛が襲い来る両の目を少しでも開けようと試みた。

右目はあまりの痛さに開けることができなかった。左目も痛みは激しかったが、どうにか薄目を開けることに成功した。涙が溢れ出ているので見える光景も滲んでいる上、視界もほとんどない。

それでも近づいてくるグエインの姿、拳動を確認することができる。それで十分だ。

体中が痛い。立っているのもやっと。ただ、戦意だけは今日最も高かった。それが、極限状態に置かれながらも、冷静さを逆に高めていたのかもしれない。

わずか一瞬の機会を逃さぬべく、研ぎ澄まされた感覚が広がって

いく。だんだんと、グエインが河原の砂を踏みしめる音しか聞こえなくなっていた。

その時が、やってきた。

「これで、終わりだ！」

高らかに宣言しながら木剣を掲げ、グエインが飛びかかってきた。頭上に迫る、グエインの木剣。

今だ！！

ぎりぎりまで引きつけると、レイルは懸命の足捌きで後方へわずかに下がった。

必然、振り下ろされてきたグエインの木剣は目標を失いそのまま下方へ流れていく。その瞬間を待っていた。

持てる最後の力を振り絞って、レイルは腕を振るった。流れ行くグエインの木剣目掛けて。

それはまさに、後ろからの追い討ちとなった。

勢いがついていたところに、さらに強烈な打撃が与えられたのである。そのまま木剣を握り締めていることなど、できるわけがなかった。

あたかも抜け落ちるかのようにグエインの手から木剣は弾かれ、遠くへ飛んでいく。

だが、これで終わりではない。

ユイリスから授かった起死回生の技が真価を発揮するのは、次の一撃だったのだから。

思い切り振り下ろした木剣の力を殺さず、足を踏ん張り、膝のバネを上手く使って全てを反動に変える。

切り返される木剣。

滲む視界の向こうに一瞬垣間見えた、驚愕に染まるグエインの表情。

自然と放たれる絶叫。

鈍い音。

やってくる静寂。

全ては、終わりを迎えた。

人が倒れる、乾いた音が河原に響く。

後は、荒い息遣いだけ。

誰の息遣いか。紛れもなく、それはレイル自身の息遣いだった。

肩を大きく上下させて呼吸を繰り返したレイルは、そこでようやく自分が渾身の力をもって木剣を思い切り斬り上げたままの状態で固まっていたことに気づいた。

「勝負は、グ、ゲインは!？」

我に返ると、慌てて宿敵の姿を探す。すると、すぐ目の前で仰向けに倒れ伏している男の姿が視界に飛び込んできた。

全ての力を使い果たしたため、もはや緩慢にしか動かない体に鞭打ち、木剣を捨てて男の元へと歩みよる。ゆつくりとしゃがみ込んで手を伸ばし、男の体を裏返した。

それは、悶絶したゲインだった。もちろん死んでなどいないが、凍りついたその表情には恐怖と、そして苦悶の表情がありありと浮かんでいた。

最後の一撃　まったくの無防備となったゲインへ下から渾身の力を思い切り斬り上げた一撃は、違うことなくゲインの体へと命中し、彼を河原へと沈めたのである。

勝利は、レイルと共にあった。

「やった……、俺、やったのか……?」

信じられない思いが胸一杯に広がっていく。

ただでさえ垂れ流しだった涙が、さらにこぼれた。

だからだろうか。急激に両の目から痛みが引いていく。恐る恐る瞬きをしてみると、左右いずれの目も見開くことができた。

いつの間にか、背後から胸に回されている細い腕に気づいた。背中からそつと抱きしめられていたのだ。

「心配したんだから。でも、本当によく頑張ったわ」

耳元でささやく、彼を心から労う声。顔を見ずとも、もちろんすぐにわかった。

姿勢を少し傾け、首を巡らし振り向く。

「おめでとう、レイル。貴方の勝ちよ」

彼に勝利をもたらした、彼の敬愛する師匠が、これ以上ない温かく優しい微笑みをその美しい面立ち一杯に湛えていた。

木扉が開放された窓から射し込む月明かりはどこか優しかった。傷ついた体をベッドに横たえたまま、レイルは目を閉じて眠るでもなく空ろな視線を月と星の光がまばゆい夜空に向けていた。

劇的な逆転勝利を飾ったグエインとの手合いの後、レイルとユイリスはロイドたちに見つかからないようこっそりと帰宅。ユイリスから傷の手当てを受けてからこうして大人しくベッドに臥せったのだが、目蓋は重くなってくれそうもなかった。

一時は敗北寸前にまで追い込まれ窮地を味わったものの、ユイリスの教えを活かして危機を脱しグエインを打ち負かした興奮が冷めやらないから、ということもある。

だが、それ以上に衝撃的だったできごと。それが、彼を眠りの世界から遠ざけていた。

彼は何度でも回想する。

ほんの数刻前に起きた、驚くべきできごとを。

「見せつけてくれるじゃないか。だが、坊やにはまだ早いんじゃないか？」

抱きしめてくれているユイリスの心地よい温かさに、いつまでも体を委ねていたい思いにかられていたレイルを現実へと呼び戻したのは低い男の声だった。

泣き腫らした重い目蓋をどうにか開き、声のした方　倒れ伏したグエインを挟んだ向こうを見やった。

声の主は、グエインに同行したあちら側の見届け人の男である。



彼は不機嫌さを顔面一杯に貼り付けたまま、ふざけた口調とは裏腹の鋭い視線をこちらに向けてきていた。

「しかしなんだ。グエインが楽勝と言っていたから相手はどんなうすのろだと思っていたが、なかなかどうして、腕の立つ奴じゃないか。最後の技は目を見張ったぞ」

一方的に喋り倒している男。一見、彼はレイルを褒めちぎっているようだったが、眼光は決して好意的ではない。敵意が全身から滲み出ていた。

男の真意は、すぐに明らかとなる。

「と、大いに關心させてもらったが、それはそれ。俺の舎弟を叩きのめしてくれた事実は許しがたい問題だ。きつちり落とし前はつけさせてもらうぞ」

凍てついたような男の眼差しはさらに厳しいものとなった。彼はおもむろに背中へと腕を回すと、背後 服の中に隠し持っていたから長い棒のようなものを取り出した。

眼前に取り出したそれを両の手で持つと、一方へとゆっくり引張った。すると、中から現れたのは鈍く光る鋭い刃。小剣が仕込まれた偽装小剣だった。

相手は真剣を取り出した。レイルの背筋に冷たいものが走る。

こちら木剣を持っているとはいえ、今や満身創痍。満足に動くことなどできない。

ましてや相手は真剣なのだ。木剣で受けてどこまで持ちこたえられるかわからない上、万が一受け損なった場合どうなるか 答えは火を見るより明らかだった。

グエインに放ったようなとっておきの奥の手はもうない。まさに絶対絶命の窮地にレイルは唇を噛んだ。

突然、彼の視界が何かに遮られた。

ユイリスだった。レイルの背後にいたはずの彼女は、音もなくレイルを背後に追いやるようにして彼の眼前に立ったのである。

「で？ そんなものを取り出していったい何が言いたいのかしら」

真剣を持つ屈強な男を前にしても怯むことなく言い放つユイリス。度々彼女には驚かされてきたが、彼女に怖いものはないのか、とあらためて驚かされる。

男の方もレイルと同じ気持ちだったようで、偽装小剣にもまったく動じないユイリスに拍子抜けした表情を一瞬見せたが、すぐに我を取り戻していた。

「ユイリス、だったな。多少は剣の腕に自信はあるようだが、あまりいきがない方がいいぞ。上には上がいるということをわきまえるのが身のためだ。ま、俺も女子供相手に手荒なことはできればしたくない。この手合い、お前たちが負けを認めるならグエインのことは目をつむってやろう」

「あら、正々堂々と勝負に臨んでレイルは勝った。なのに、どうして負けを認めなければならぬのかしら？」

「気の強い女だな。少しは痛い目に合わないとか己の置かれている立場ってものがわからないのか？」

「どうして痛い目に合わされなければいけないの？ おかしいわね。最初の取り決めと話が違うわ。いったいどういうこと？」

明らかに男はこちらを脅していた。

いや、端から彼らはそのつもりだったのだ。万が一にもグエインが負けてしまったら、その負けを目の前の男が覆す算段をしていたのである。見届け人などという体のいい言葉を使って男が同行していたのは単なる見せかけだったのだ。

がっしりした体躯の男は、全身からグエインよりもはるかに手だれである雰囲気を含み出させている。低い声はその迫力をさらに増長させていた。

にもかかわらず、ユイリスは一步も引かない。むしろ、男を焚きつけるような言葉を次から次へと投げかけている。

いくらユイリスが相当な使い手であるとはいえ、相手は真剣を持っているのだ。さすがに不安が胸を過ぎるが、当の彼女は先ほどから一環して毅然とした姿勢を崩さなかった。

「『約束』、なんてものはその都度変わるものさ。そんなことも知らずに生きてきたのか？ おめでたい女だな」

「つまり、そちらはお互いが納得して取り決めた『約束』を反故にする、ということなのね？」

「そうだ、と言ったら？」

ぬけぬけと言い放つ男。これにはレイルも憤りを隠せず、拳を握り締めた。

怒りに気を高ぶらせたレイルだが、すぐに我に戻る。

返らされた、と言うべきだろうか。そつと後ろ手にユイリスの右手が差し出されていたことに気づいたからだ。

彼女が何を無言で言わんとしているのか。短い間ではあるとはいえ、彼女と交流を深め、彼女の弟子として修練を重ねてきたレイルはすぐに悟った。

悟りの答えとして、彼も無言で手に持つ木剣の柄を彼女の手に受け渡した。

「なら、私はもう影に徹する必要はないわね」

レイルから木剣を受け取ったユイリスは、そう言った後、後ろを振り返らぬまま小声で、

「レイル、相手が例え真剣を持っていたとしても、相手が間違っているのなら屈しては駄目よ。戦い方を間違えなければ、真剣相手だとしても恐れる必要はないわ。弱い己の心に負けず、勇気を持って事に当たれば道は開ける。よく見ていなさい、道を開いてみせるから」

と語った。彼女はそのままゆっくりと前へと踏み出す。

「ほう、やる気か。いいだろう、その小生意気な鼻っ柱、へし折ってやる」

偽装小剣を構え、男も前へと踏み出した。

もはやレイルにはユイリスを見守ることしか出来なかったが、不思議と不安はない。

彼女の姿勢、彼女が語った言葉、それらがレイルの心に深く響い

ていた。

彼は師匠の背中を静かに見送った。

いかな戦いになるのか。圧倒的にユイリスにとって不利な条件での勝負である。どんな展開になっても見逃してたまるかと、まだ痛み両目をどうにか見開いて動向を追おうとした。

図らずと行われたこの戦いは、だがレイルが想像できる程度の生易しいものではなかったのである。

勝負はたった一撃で終わった。硬いものを粉碎するような鈍い音とともに。

いったいいつ始動したのかもわからなかった。

気づいた時には、木剣を横に凧いだユイリスの姿と、その切先の方向に大きく吹き飛ばされていく男の姿。

弾かれるように宙を待った男は、二の腕に新しい関節を一つ作られた拳句、河原に体軀を叩きつけられて転がり、ようやく静止した後には微動だにしなくなった。

あまりにも衝撃的な光景に、両目に走る痛みも忘れ見入るレイル。目にも留まらぬ、という言葉があるが、誇張や比喻などではなく現実のものとして存在していることを彼は知った。

もちろん見切ることなどできるわけがないのであくまで推測だが、男の真剣など恐れるに足りないユイリスにとってみれば彼の動きなど蠅が止まっている程度のものなのだろう。だからこそ、相手が真剣でも躊躇せずに踏み込み、相手の剣が自身を害す前に打撃を与えられたに違いない。

と、顧みることはできても、一瞬でそれを為してしまった彼女の神速と言ってもいい体捌きと剣速はあまりに常軌を逸していた。

なにより、あれだけの体軀を持つ成人の男を、ただの一撃で、あのか細い腕で遠くへと弾き飛ばしたことなどとても人間技ではない。その破壊力がいかに壮絶だったかは、男に打撃を与えた木剣が衝撃に耐え切れずに折れ曲がってしまっていたことから分かる。

少なくともどんなに手だれでも、このような芸当は女性には不可

能だと直感が囁きかけてきていた。

修練を通して彼女の凄さは身に染みていたはずだった。修練では手加減していることもわかっていたが、ある程度彼女の本当の強さを予測していたつもりだった。

その予測が根本から間違っていたことを、彼は知ることとなった。つまり、修練の時、彼女は手加減どころか爪の先程度の力しか見せていなかったのだ。

レイルは凍りついたようにあまりにも凄まじい光景をただただ凝視するしかなかった。

一方、驚愕に呆然とするレイルをよそに、当の本人はいつの間にかにくだんの男の元へと歩み寄っていた。派手に宙を舞い、河原に叩きつけられた拳句二転三転しようやく仰向けで止まった男は、二の腕をありえない方向に曲げたまま力尽きていた。

それでもか細いうめき声が聞こえてくる。どうやら彼女は命まで奪ったわけではないようだった。

「聞きなさい」

男の傍に立ちはだかったユイリスは、意識が混濁しているであろう男を見下ろしつつ声を張り上げて言った。

「当初の約束通り、今後一切、レイルとレイルの近親縁者に害を為すこと、近づくことを私は許さない。これは警告よ。禁を破れば、次は命がないと思いなさい」

恐ろしいほど凍りつくような声だった。優しさや温かさなど微塵も込められていない、いつものユイリスからは想像もできないほどの冷徹さに満ちた声に、レイルは彼女が本気で怒っているということを感じた。

彼女はこちらに背中が多くを向けているため、その表情までを窺い知ることはできない。

だが、以前ゲインを制止した時同様、彼女の全身から一切の妥協や反論を許さない毅然とした意思の力が放たれていることを感じ、それ相応の恐ろしい表情をしているだろうことは認識できた。

緊迫した雰囲気がいりやりに立ち込め、レイルも固唾を呑んで事のなりゆきを見守っていたが、均衡を破ったのは当のユイリスだった。

「さ、帰るわよ」

彼女の声　いつもの優しい声だ　に、レイルは体の強張りを解いた。

言いたいことを言ったので満足したのか、それまでの冷徹な意思がまるで幻だったかのように、踵を返して事も無げにこちらへ戻ってくるユイリス。レイルを視界に納めたその表情には、薄っすらと笑みまで浮かんでいたほどである。

あまりにも急激な変化に目を白黒させたレイルだが、それでもどうにか心を落ち着かせてふと気になったことを問うた。

「グ、グェインたちは」

確かに憎むべき輩たちだが、今はもう何をすることもできない。傷を負って倒れている以上、いくら敵でもそのままにして立ち去るには若干気が引けたのである。

これに、ユイリスの答えは明快だった。

「放っておきなさい。手加減はしたから命を落とすことなんてないし、しばらくしたらこれに懲りて自分たちの足で大人しく帰るでしょう。それとも、約束を破って私を手籠めにしようとした彼らの面倒まで見ていく？」

彼女の言う通りだった。男が認めさせようとしていた敗北をもし呑んだら、結果は負けが付くだけでなくユイリスがグェインのものになってしまっていたのだ。

それを強要しようとしていた奴らの面倒などどうして見てやれようか。レイルは無言で首を横に振った。

「でしょう？　じゃ、帰りましょう」

満足げに笑みを浮かべたユイリスは、体が自由に動かないレイルの腕に腕を回して支えると、テルミト亭への帰路へと誘う。

こうして、悶絶しているグェインと意識が混濁したまま倒れた男を後に、2人は夜のギョーム河岸を後にしたのだった。

幾度振り返つても、いまだに信じられないほどのできごとだった。単に『強い』、という一括りの言葉で表現できないほどの、その場にいる者全てを圧倒してしまうような、そんな力をユイリスは見せつけたのだ。

思い出せば思い出すほど、なんだか自分がグエインに勝ったことなど遠い昔の大して重みのないものに思えてくる。

月の夜空から自室の天井裏へと視線を戻し、レイルは小さく嘆息した。

彼女の实力は果たして本当は幾ばくのもののなのか。もはや見当もつかない。

信じられないほどの彼女の力はレイルに衝撃を与えたが、その衝撃は同時に一つ、彼に気づかせることとなった。

あれだけの力を持つ彼女だ。文化や伝統を見るためだけに諸国を渡り歩いているという話に嘘はなくとも、旅をする理由はそれだけではないはずである。何らかの目的でこのファルアリア王国へと足を踏み入れ、このサイレア近郊までやってきたに違いない。

彼女がこの町へ来てからもう2週間近くが過ぎ去っていた。

失われていた体力はすっかり元の通りに回復し、さらに彼女が担ったレイルの修練師匠役も目的を達成している。

彼女は昔からこの町に居たわけではない。そして、彼女がこの町に居続ける理由は、もはや失われていた。

レイルは直感的に感じ取った。

ユイリス＝レンフィアとの別れが、もう目の前まで近づいているということ。

サイレアに来てからほぼ2週間が経ち町中も方々歩き回ったつもりだったが、思えばここに来るのは初めてのことだ。

真上に昇った太陽の日差しを心地よく受けながら、ユイリスはサイレア郊外にある小高い丘の緩やかな斜面を一步一步踏みしめて登っていた。

運命の手合いがレイルの勝利という結果で終わり、明けた翌日。

いつの間にか傷だらけで起きてきた息子の姿に大騒ぎとなったフユンフル夫妻にありもしないでごと　夜釣りに出かけ、化け物じみた巨大怪魚と格闘した末の有様というもちろん創作で、言い訳にならない言い訳　を信じ込ませるのに大層骨を折ったものだが、どうにかその場は収めることに成功。

レイルと共に胸を撫で下ろしたもののだが、彼が昨晚為し得たことに比べればほんの些細な後始末である。

厳しい一週間の修練に耐え抜き、レイルは見事に己の才能を開花させ、グエインを打ち破った。それも、グエインの狡猾な戦法を受けた上での勝利である。

今回のことは自らの力で難題を克服したということで大いに自信になったであろうし、一回りも二回りも彼のことを成長させたに違いない。

それはつまり、ユイリスの役目　すなわち、『剣と勇気を与える』務めも終わりを迎えたことを意味する。

そう、サイレアを離れる時がやってきたのだ。

ただ、その前にやっておかねばならないことがあった。

だからこそ、この丘へとやってきたのである。

「来たか」

小高い丘の頂き辺りにそびえ立つ巨木の元へと近づいた時、彼女を迎えたのは特徴のあるあまり抑揚のない声。

声の主は巨木の影から姿を現した。ウルゼック＝ラインローグである。



「必ず来るとは思っていた。様々な肩書きを持つ貴様も、元をたどれば我らの恩師イスカムが最後の弟子。戦師が認めた者が賢明な判断を下せぬはずがないからな」

3年ぶりの再会の際はあれほど辛辣だったウルゼツクだが、今は表情も語り口も穏やかだ。実際、色々と誤解を受けやすい性分をしている彼ではあるが、理路整然としながらも損得だけでは決して動かない義に厚い心に血の通った人間である。戦師イスカムから託された『遺志』を果たすためだけに、国を跨いでユイリスを探し回っていたことがその証の一つだった。

そして、彼は手に持った小さな木箱から戦師イスカムの『遺志』を取り出した。『調和の法環』という名の遺志を。

「ここへ来たということは、本来進むべき道へと進む、その決意をしたということだな」

大層な装飾はないが、何代にも渡って重責を担う証として受け継がれてきた銀色の指輪を手のひらにのせ、ウルゼツクはその手を彼女へと差し出してきた。

「レイルに、教えられたから」

ウルゼツクの真摯な眼差しを空色の双眸で受け止めつつ、ユイリスは調和の法環へと手を伸ばした。そして、左手の中指にゆつくりとはめ込んでいく。およそ三年ぶりに本来の持ち主のもとへと戻った瞬間だった。

「貴方に言われた通り、私は逃げていた」

あたかも何十年前も前からそこにあったかのように、見事にユイリスの指と馴染んでいるその名称通りの銀色の指輪が収められた左手を眼前にかざし、それを懐かしそうに見やりながら彼女は語り出した。

「あの戦争が終わって、隊を解散して旅に出たのは身も心も疲れていたから、安息を求めたかった　と、皆に残して国を去ったのは口実で、逃げ出した理由ではないわ」

ゆつくりと腕を下ろすと、やや表情を曇らせ、彼女はおもむろに

巨木へと歩み出した。

「私がフレアミスを去ったのは、平和になったあの国にとって私の力はあまりに強力すぎたから。私の力や影響力はあの国には不要なものだった。それどころか、私が居るだけで方々に悪影響を及ぼしかねなかった。私の居場所は、フレアミスにはなかった」

淡々と語りながら巨木の根元までたどり着いたユイリスは、そのまま俯き、瞳を閉じた。

「そして、それ以上に私がフレアミスを去った理由は、私が現実から目を背けて逃げ出した理由は、私自身に備わった力とこの先どう共生していけばいいか、目指すものを失ってしまったから」

段々と弱々しくなる声。それは、彼女が思い悩んできた胸の内を証明するかのようだった。それでも、彼女は語ることを止めなかった。

「この力があつたからこそ、私は私の故郷の皆が味わった辛酸と無念を晴らすことができたし、数々の困難も乗り越えられたわ。ひいては多くの人を救うことができた。だから何も後悔はしていないわ」

言って、ユイリスは閉じていた双眸を見開き、顔を上げた。振り返り、ウルゼツクへと悲壮な光を湛えた空色の瞳を真っ直ぐ向けた。「けれどその先は？ フレアミスを解放したその先は？ 一生、死ぬまで消えないこの力をどう使えばいい？ 私は自身の行く末に対して道標がなくなってしまうた空虚感に心を支配されてしまった」

いささか感情的になって心情を吐露してしまっただが、ウルゼツクは何も言わずに黙って独白を聞いてくれている。ユイリスはそんな彼に感謝しながらも、努めて冷静さを取り戻そうとした。

それでもウルゼツクの真っ直ぐな視線を直視できず、彼女は視線を外し、一拍間を置いてから続けた。

「でも本当はね、私、わかつてはいたの。私が得てしまったこの力、戦うための力が一生消えないのであれば、戦いの場でこそ活かし、人々を救済するために生きていくことこそ、生涯私に与えられた使命だということを。それをわかつていながら、私は空虚感に身をつ

やし、一度離れた戦いの世界へと再び一步踏み出す勇気を失っていた。本当、私は逃げていたんだわ」

わかつてはいた。だが、わかつたしなかった自身の不作為と、彼女は今、自ら口にすることで初めて正面から向き合っていた。

3年という短くも長い年月の間、現実から目を背けていた彼女を変えたのは、他ならぬ1人の少年だった。

「その、逃避している私に道を指し示してくれたのが、レイルだった。彼の真っ直ぐな生き様、困難に打ち勝つ強さ。それは私に思いつかせてくれた。そう、自分に打ち克つこと、自分に負けないということを」

伏目勝ちになっていた両の目を見開き、彼女は言い切った。自らに言い聞かせるように。

その表情にもはや迷いはない。

かつての彼女が、今、帰ってきたのである。

「今貴様がここにあるのは、レイルのおかげということか。貴様はレイルの師匠なのだろう？　これではどちらが師なのかわからんな」  
黙って聞いていたウルゼックが口を開いたかと思えば、出てきたのは皮肉めいた言葉。

だが、それはユイリスを悪し様に思っているからではない。重く沈鬱な空気を払拭するための彼なりの優しさの現われだった。

その心遣いがよくわかったからこそ、

「失礼ね。レイルの先生はあくまでこの私よ」  
とむくれても見せる。

これに、ウルゼックは破顔して応えた。彼の笑みを見たのは本当に久しぶりのことである。驚きはしたが、すぐにユイリスも微笑みを湛えた。

「そうだ。決意した貴様には、これが必要だろう」

何かを企むようにユイリスを一瞥した後、ウルゼックは巨木の根元にある洞へしゃがみこんで手を伸ばした。

中から次々に取り出したのは、両腕でようやく抱え込めそうな古

びた大きなトランクケースと、麻布で包まれた上に縄で何重にも縛られたやや縦長の板状のものだった。

それらがいったい何か、ユイリスはすぐに気づいた。

「どこでその在り処を？」

「ハンスから聞いてな。しかし随分深く埋めたな。アデューフェの根元を掘り返すだけでも大層骨が折れたぞ」

嘆息し、首の後ろ辺りを撫で回す仕草をするウルゼツク。いかに苦勞したかを表現しているのだろう。

ただ、そういった仕草はあまり彼には似合わない。ユイリスはつい小さくも噴出してしまう。

彼女の反応に慥然とした表情のウルゼツクではあったが、すぐにあらため、真剣な、それでいて温かみのある眼差しを彼女に向けた。「調和の法環も、こいつらも、貴様と共にあるべきものだ。いつか貴様の後継が現れる時まで、もう二度と手離すなよ」

淡々とした言葉遣いの中にも彼の温かい想いがしつかりと込められている。

彼の想いに、ユイリスは深く感謝し、頷いた。

「色々ありがとう、ウル」

「礼なら戦師イスカムの御霊に報告するんだな。いつか、我らが心の故郷フレアミスのブルーフェン郷で」

それは、ユイリスの故郷にほど近い、彼女がしばらく逗留した戦師イスカムの庵がある場所だった。

同時にその場所は、今では偉大なる恩師の墓所であることをウルゼツクの言葉は示していた。

彼の言う通り、いつかはブルーフェンに戻り、戦師イスカムの墓標に自身がたどった生き様を報告せねばなるまい。

だが、それはまだ先の話だ。

今為すべきことは決まっている。

旅立ちの時がやってきた。

「そうしたらユイリス、むきになっちゃって。釣竿を放り投げたと思っただけのまま河に入って素手で魚獲り始めたから、おかしくって仕方なかったんだ」

身振り手振りを交えながら、それはもう大変だったことを熱っぽく表現する。それを、リユルゾ亭主人のフェンソはカウンターの向こうで笑顔を湛え聞いてくれていた。

手合いから2日経ち、レイルは恒例の『お使い後の油売り』をリユルゾ亭にて敢行している最中だった。

手合い自体の興奮はもう大分収まったが、今彼の心を占めているのはユイリス。レンフィアの旅立ちが間近に迫ったことを直感的に悟ってしまったことである。

ユイリスがいつも傍に居るということを日常のものとして慣れきってしまった彼にとって、恩師であり憧れのその人が目の前からいなくなってしまうということはには受け入れがたいことだった。

寂しさで胸が一杯になっている今、誰かと話していなければ耐えられそうにない。かと言って、当の本人と話すのは余計に寂寥感が高まってしまいそうだったので、何でも話を聞いてくれるフェンソに相手になってもらっていたのである。

もちろんフェンソにユイリスが旅立ってしまうため寂しいから話に来たなどと恥ずかしくて言えるわけもなく、胸の内を悟られないよう逆に努めて明るく振舞っていたのだった。

一方、珍しいことに、普段あまり店内には出てこないミスリイがレイルの隣に座り、彼の話を大して面白くもなさそうに聞いている。フェンソに話している最中、『面倒事』の2つ名をレイルが心の中で贈呈している彼女が裏方から出てきた時はよほど席を立とうかと思った。ただ、それではあまりによそよしいので椅子から浮き

かけた腰をなんとか再び下ろしたのである。

彼女がやってきた当初は彼女のことが気になって喋りの勢いも弱くなってしまったのだが、いつも騒音を無駄に撒き散らしている彼女が今日に限っては静かにしていたために再びレイルの話は力を強めていった。

ところが、ミスリイが放った何気ない一言に、レイルの熱弁は中断することとなる。

「なんだかレイル、無理してるみたい」

言葉を失い、彼女の方を見る。カウンターに片肘をつき手のひらに顎を乗せて相変わずつまらなそうにしている彼女の表情は、特段何かを真剣に考えているようなものではない。

だが、彼女の指摘は的を得ていた。だからこそレイルは凍りついてしまったのだ。

そうは言っても口を開いたまま呆けているわけにもいかないのです、彼はどうにか取り繕うと彼女の言を否定するが、

「いつものレイルらしくないもん」

と切り替えされてしまった。

彼女の態度から、心底心配して、というよりは幼馴染として長い付き合いから培った経験上感じたことをただそのまま口にしただけということが窺える。

しかし、程度の差はあれ見透かされていることには間違いない。

フェンソもミスリイも別段様子に変化はないが、当の本人は内心凶星を突かれてかなり焦っていた。

どうにかして取り繕うべく上手い言葉を慌てて搜していると、助け舟が入った。

いや、厳密に言えば、それは助け舟などでは毛頭ありえない。

その場の状況を破壊するだけの、招かれざる客。騒々しい足音。

「ようレイル。こんな小汚い店で会うとは奇遇だな。ああそうか、ここの娘とお前、いい仲なんだよな」

言って、皮肉めいた笑い声を上げる男。

振り向くと、店の入り口に見るからに悪党とわかる帯剣した数人の男たちがおり、その中に宿敵の姿があった。

「グエイン！」

2日前に倒した、憎むべき男の名が自然と口から放たれた。

もう二度と会うことはないと思っていた顔を再び見てしまつては、怒気交じりになるのもいた仕方なかった。

「何しにきた！ 約束が違うじゃないか！」

「約束？ さて何のことだか。ああでも覚えてることはあるぜ。手前だけは許しちゃおけねえってことをな」

にわかにはグエインの目が鋭くなると、彼は小声で周りの男たちに何か囁いた。

それを受け、男たちは無言で店内へと押し入り、進路の邪魔になる机と組になる椅子に腰掛けていた客たちをなぎ倒して真っ直ぐカウンターへと向かってきた。

瞬く間に悲鳴と怒声が立ち込める店内。

レイルは椅子から立ち上がると、とつさにミスリイを背後にかばい彼らの前に立ちはだかった。

子供相手に余裕をかましていたのだろう。男の1人は薄ら笑いを浮かべながら軽くつかみかかってきた。

これに対し、レイルは男との太い腕を取ると、彼の腕を自然であるべき方向とは逆に渾身の力を込めて捻り上げる。同時に、まったく無防備になっている男の足元へ強烈な足払いを叩き込んだ。支えを失った男の体は派手な音を立てながらあっけなく床に叩きつけられた。

一連の流れは自然と体が動いた結果である。

これもひとえにユイリスから受けた修練のおかげではあったが、彼の今の力ではまだ程度のそれほど高くない相手、それも1人だけにしか対応できない。

今の相手は複数。しかも武装している。

それが何をもたらすか、答えは火を見るより明らかだった。

倒したはずの男に足首を突然つかまれたレイルは、そのまま足を救われて引き倒されてしまう。

なんとか受身を取ろうと後頭部だけは守ったが、一昨日の手合いで受けた傷や体力の疲弊はまだ癒えておらず、万全な受身は取れなかった。背中から思い切り床に叩きつけられてしまい息が詰まる。

追い討ちを駆けるように、いつの間にか立ち上がった男の踵が襲いかかってきた。それは腹に突き刺さり、レイルは顔を赤くして床をのた打ち回る。

それでも相手は容赦してくれなかった。先の男を含めた複数の男の足が次々と彼を蹴りつけた。

「ざまあねえな、レイル君。ひでえ有様だ。しかしなんだ、一つ手間がはぶけたことは礼を言っておくぜ。予定ではこの娘を人質にお前んとこに出向いて、本命とついでにお前も誘き出す算段だったんだが、お前はここでふん縛れるんだからな」

蹴りつけてくる足音に混じって、店の入り口からゲインの声が聞こえてくる。

彼は手合いの結果を認めず、レイルに復讐しようと画策した上、人質という手を使ってユイリスを脅し彼女の力を封じようとこの凶行を始めたのだ。

そのあまりに身勝手に卑怯なやり口に全身の血が沸きあがる思いに駆られる。

すると、レイルの思いを代弁するような声が上がった。

「あんたら子供相手になんてことするんだ！　うちの店で狼藉は許さないよ！　今すぐ出て行きなさい！」

フェンソだ。温厚篤実の模範のような彼が、ゲインの暴挙には毅然とした怒りを露にしていた。

「うるせえぞ、おっさん」

誰かが放った返しの一言。これに、フェンソの反論は上がらなかった。

いや、上げられなかったのだ。



いつの間にか男たちの蹴りが止まっていたので、仰向けになったまま上を見ると、カウンター内へと身を乗り出している男の姿が目に入った。

と、何かが床に倒れる音。驚きのあまり凍りついていたのか、それまで何も声を発していなかったミスリイが悲鳴を上げたのが聞いた。フェンソは殴り倒されてしまったに違いなかった。

沈黙したフェンソのことを気遣う間もなく、やがてレイルは男たちに縛り上げられ、無理やり立たされる。

埃まみれ、傷だらけとなったレイルは、そこで店内を見回すことができたが、いつの間にかそこは戦場後のように酷い有様となっていた。

机は横倒しにされ、ひっくり返った椅子が散乱し、床に倒れたり壁際で怯える客たちの姿がそこにはあった。

隣には同じく縛り上げられたミスリイが立たされていた。抵抗したのだろう。彼女の頬には平手を受けた赤みがさしていた。さしもの彼女もしゃくりあげ、涙をとめどなく流している。

店を滅茶苦茶にし、フェンソを悶絶させ、ミスリイまで捕縛したグエインらに抑えようのない怒りが湧き起こる。冷静に考えればできるはずもないが、レイルの怒りはそのことを忘れるほどで、力にまかせて縄を引きちぎろうとした。

もちろん無駄な労力だった。それどころか、倒れないよう体をつかまれたまま男の1人に一発頬に拳を入れられた。

「諦めが肝心って奴だ、レイル君。もうお前にどうすることもできねえよ」

勝ち誇ったように嘲笑するグエイン。これほど彼のことを憎く思ったことはなかった。

だが、今のレイルはあまりに無力だった。

何もできない彼の姿に、満足そうに狂気じみた様子で唇の端を歪めグエインは言った。

「さて、それじゃそろそろ行こうか。我らがユイリスの元へ」

かき入れ時であるお昼時のテルミト亭の手伝いを慌しく済ませた後、ユイリスは割り当てられている自室に戻り、旅立ちへの身辺整理を始めていた。

入念に部屋を掃除し、借りていたミランの衣服を丁寧に折りたたんでまとめていく。

その最中、彼女は思い出したかのように着ている衣服を脱いだ。もちろんそれもミランの衣服だったからだが、別の衣装へ着替えるために脱いだ、という理由もある。

下着姿のまま、彼女は机の上に鎮座しているギョーム河岸で回収したあの長大なトランクケースと向かい合った。

おもむろに蓋を開けると、目に飛び込んでくるのはあの枯れ草色の衣装。

二の腕に縫いつけられた紋章を懐かしむようにそつと指先で触れる。

ひとしきり過去の思いに浸ると、もう身につけることはないかもしれないと思っていた愛着あるそれを両手で丁寧に取り出した。

枯れ草色の衣装は、ワンピースとズボンで構成された女性用ながらも活動的なものだった。

実際に着用したのはそれほど長い期間ではないが、決して新しいものではないので総じて褪せた色合いになっている。それでもトランクケースに封入する前にしっかりと洗浄したので清潔感に溢れていた。

ユイリスは慣れた手つきで衣装を身につけていく。年月を経て成長したため全体的に気持ちよくなったように感じたが、気にするほどでもない。

トランクケースから長靴<sup>オウチカ</sup>も取り出し、全ての着用を完了した彼女は、部屋の片隅に置かれた姿見の前に立つ。

3年前はまだどことなくあどけなかつた面立ちも、今やすっかり

大人の女性のものとなって映し出されている。

だが、衣装も、二の腕に縫いつけられた紋章もなにも変わっていない。

そして、その衣装を身につけた己の姿もまったく違和感はなかった。

さすがに感慨が込み上げてきてなんとも言えない気持ち胸の内を占める。

17年間普通の村娘として過ごしてきた自分が、血で血を洗う戦乱に身を投じ駆け抜けることになるなど、今顧みても予想だにすることではない。

それでも、まごうことなき現実なのだ。だからこそ目を背けてはならない。

「為すべきことを為せ、か」

人生最大の恩師で今は亡き戦師イスカムが口に使っていた言葉を反芻する。それは、自らの心を奮い立たせるためでもあった。

もう迷いはない。

為すべきことを為す、それだけである。

決意を新たにしたユイリス。

その彼女に、早くも試練が訪れようとしていた。

にわかに表が騒がしくなり、雑然とした音が2階の自室にまで聞こえてくる。ユイリスは机の向こうにある窓から身を乗り出して下を覗き込んだ。

彼女の双眸が大きく見開かれる。

空色の瞳に映り込んだのは、縄で縛られたレイルと栗毛の少女を先頭に、十数人の武装した男たちがテルミト亭前の小さな広場に徒党を組んでやってきたのだ。町の人や通行人らは、彼らの姿を見て怯えたり悲鳴を上げたりして次々とその進路を明け渡していく。

目を凝らすと、レイルの衣服は薄汚れ頬は腫れ上がってる状態が窺えた。隣の少女　その特徴から言って、レイルから聞いていた彼の幼馴染ミスリィに違いないだろう　も頬を赤く腫らしている。

2人は暴行を受けたのだ。

それだけでもユイリスの胸中は怒りに煮えたぎったが、徒党の中にレイルの宿敵の姿を確認して全てを理解した。

途端、彼女の面立ちから表情が一切失われる。

いつもの優しい彼女は奥底に引き込み、代わって顔を出す、氷のような冷徹なる一面。

「さすがに懲りたのか、あの見届け人の男はいないようね。だけど、あの男から彼は何も聞かなかったのかしら。あるいは、聞く耳をもたなかったか」

窓から体を離すと、ユイリスはトランクケースから帯状の物を取り出し、それを腰に巻きつける。

「言って聞かない愚か者には、力をもって分からせるしかない、かいいわ、二度とそんな気が起きないように、骨の髄まで『真の恐怖』というものを教えてあげる」

恐ろしいほど感情のこもっていない冷めた声で独りごとと、ユイリスはついに彼女の長い戦いを支えた戦友をトランクケースの奥底からつかみ出した。

停滞していた己が時を振り払うかのように。

「父さん！ 母さん！」

グエインの絶叫がテルミト亭前小広場にこだまする。

灰色の瞳に映し出された光景は、ならず者どもに殴り倒され地に組み伏されている彼の父ロイドの姿と、後ろ手に拘束されている母ミランの姿だった。

リウルゾ亭からテルミト亭までやってきたグエインの徒党。彼はテルミト亭前に到着するなり店に向かって叫んだ。ユイリス出て来い、と。

騒ぎを聞いて早速駆けつけたのはユイリスではなく、レイルの両親だった。

2人は、暴行され捕縛されたレイルとミスリーの姿を目にし激怒。十数人のならず者を前にしても臆することなく彼らに詰め寄った。元々癪癢持ちの父ロイドと、芯の強い母ミランであるため、屈強な男たちを前にしても息子と友人の娘が酷い目に合わされているのを見れば黙っているはずがない。

だが、あまりに多勢に無勢過ぎた。結果は今レイルの眼前にある光景通りである。

自分だけならまだしも、大事な友人や家族に手を出されレイルの怒りは頂点に達していた。

しかしどうすることもできない。

己の力では覆せない状況に、レイルは口惜しくて歯噛みした。

「出てこねえな、極上の美人ちゃん。俺が引きずり出してくるぜ」  
徒党の1人である小太りの男がやにわに店の中へと向かった。

レイルは身じろぎをして必死に縄から脱出しようと幾度目かの挑戦を試みたが、どうやっても抜けることはできなかった。

このままではユイリスが危ない。

一方で、同時に妙な思いも感じていた。

すなわち、彼女ならばこの状況もどうかしてしまつのではないかと。

これまで数々の力をまざまざと見せつけられてきた上、とどめのあの光景　屈強な男を木剣の一撃で弾き飛ばした一幕をこの目で見たのだ。

尋常ならざる彼女の『力』に自然と期待を寄せてしまつのも無理からぬことだった。

レイルの期待。果たしてそれは夢想到にしかすぎないのか。

答えは否だった。

彼の想いは、遠からず現実のものとなる。

テルミト亭店内から鈍い音がするやいなや、物凄い勢いで何かが飛び出してきた。

それは派手に大地を転がり、店前小広場の中央にある井戸にぶつ

かつて停止する。

ユイリスを連れ出すべく意気揚々と先ほど店内に入って行った小太りの男だった。地面を転がったために砂埃で真っ白になった彼は、口から泡を吹いて悶絶していた。

仲間がやられたことににわかに色めき立つならず者たち。各々が腰の獲物に手をかけ、すぐにも凶器を振るえるよう身構えている。

徒党はもとより、遠巻きに見守る群衆からも一切の音が失われ、静まり返る辺り。

「だ、誰だ！」

たまらず、グエインが声を上げた。

返ってきたのは、等間隔で店内から響いてくる金属が触れ合う甲高い音とゆっくりとした足音。

皆の視線が集まる音の正体はすぐに明らかとなった。

枯れ草色の衣装　日常着るものではなく、明らかに戦場等で身につける戦闘服だった　を身にまとい、その二の腕には十字章と交差した一对の長剣を護るようにして囲む一对のオリーブの枝葉を1429という年号とともに意匠した紋章が縫いつけられていた。

腰には剣を吊り下げるための剣帯が巻かれ、左腰には白磁器のような光沢を放つ白い鞘に収められた長剣が下げられている。一見して素人のレイルですらわかる、この世に2つとないほど貴重なものに見える長剣の鏢には見事な意匠の金色の十字章が施されていた。歩く度に響いていた金属が触れ合う音は、剣帯と鞘とを結ぶ金属部品が擦れ合う音だったのである。

姿を現した1人の武装したうら若き乙女。

各自の思惑はどうあれ、その場にいる者たちが待ちわびた人物。

ユイリス＝レンフィアだった。

店外に出ると、ならず者たちは一様に驚いた眼差しをこちらへと

向けていた。

店内に押し入ってきた小太りの男を挨拶代わりに殴り飛ばしたことが効いているのだらう。さらに言えば、戦うための衣装と長剣で武装している姿も彼らを驚かせている一端を担っているに違いない。だが、彼らはすぐに好奇と好色へと目の色を変容させていた。

彼らの思惑など知ったことではない。徒党の中にいるレイルの宿敵　グエインの姿を見つけると、ユイリスは鋭い眼差しで彼を睨みつけた。

「これはいったい何の騒ぎ？　そもそも二度とレイルとその縁者の前に姿を現さないと約束した貴方が、どうして彼らの前にいて、あまつさえ彼らに暴行を加え拘束しているのかしら？」

一言も言い淀むことなく、感情を一切表に出さず淡々と問いかける。

その冷たい迫力を以前味わったことがあるからだらう。グエインは表情を引きつらせていた。

が、自身の弱みを包み隠すように、彼は大きな声を張り上げた。「約束？　おめでたい奴だな。約束なんてものはな、破られるためにあるんだよ。それに、この状況をよく考えてからもの言えよ。多少腕が立つからってな、この人数相手に何ができる。何より、こっちは人質がいるんだ。こいつらのことがそんなに大事なら、何をしなきゃなんねえか、わかってるよな、ユイリスちゃんよ」

多勢を武器に虚勢を張っているのが見え見えではあるが、彼に「敗北」という文字を想像することなど今の状況ではできないのだらう。圧倒的な力を背景に、彼は勝ち誇っていた。

徒党の連中はどう見てもグエインよりは遥かに手練に見える。大方、口八丁手八丁上手い話でもしてつてのならず者を巻き込んだのだらう。

いずれにせよ、レイルとレイルの大切な人間たちを害した輩どもだ。1人として許すわけにはいかない。

ユイリスは徒党のならず者たちを見回しつつ睨みつけ、言った。

「わかつているわ。皆を助け出して、お前たちを叩き伏せなければならぬということよ」

グエインの脅しに一切屈しないユイリスに、彼らは一斉に獲物を抜き放つことで応えていた。

これに、ユイリスも動いた。

否、動いた、などという言葉で片付けられるものではなかった。

その場に居た者で彼女の動きを目で捉えられた者はただの1人もいなかった。

まさに目にも留まらぬ『神速』で飛び出したユイリスは、あまりの速力に反応できない男たちの間を抜け、レイルとミスリイを捕縛している小柄な男の顔面に向けて殴りつけるように手のひらを叩きつけ、倒したのだ。

小さいとはいえ大の男を一撃で昏倒させると、彼女はなんと手の力だけで2人を縛った縄を易々と引きちぎった。

突然の展開に状況を理解できていないのだろう。レイルたちは当初茫然としていた。

彼らを安心させるべく、ユイリスは鋼のように硬く冷徹に凍りついた表情を解き、微笑みかけた

「2人とももう大丈夫よ。激しく痛んだり、熱を持っている怪我つてある？」

努めて優しい声をかけると、レイルはようやく我を取り戻したように問題ない旨を主張するかのように首を横に振っていた。隣のミスリイはまだ呆けていたが、見た感じでは重い傷を負ってはいない。「レイル、彼女をお願いね。後は私に任せて」

2人を背後に隠し、ユイリスはならず者たちへと正対する。再び、氷の仮面を面立ちに貼りつけて。

徒党の数はグエインを含め12名。内、1人は店内から殴り飛ばし、もう1人はたった今昏倒させていずれも戦闘力を奪っている。

残り10名。

レイルとユイリスを守りつつ、さらにロイドとミランを救出しな



ければならないという制約はあるが、問題になるほどではない。

ユイリスはゆっくりと左腰の長剣の柄に手をかけた。

「誰」

静かに発したその言葉が向かう先は、グエインたちではない。

背後に気配を感じたための言葉だった。敵意は感じられず、だからこそ彼女はならず者たちを見据えたまま問うたのである。

「助け船に來た人間に対して、一言発するだけなのか？」

抑揚のあまりない低い男の声。生来的に言葉に棘を埋め込む天才の声だった。

「2人のことは任せておけ。お前の腕が曇っていないか、督戦させてもらうぞ」

時には相手の心情を無視した厳しい言葉を投げかける彼ではあるが、今は誰よりも頼もしく信頼に足る存在だった。

彼に、ウルゼツクに2人を任せておけば何の心配もいらない。剣聖に迫る剣技を誇る、元鷹剣士結社筆頭剣士ウルゼツク＝ラインロークその人が力を貸してくれるのだから。

「ありがとう、ウル」

振り返らぬまま礼を言くと、ユイリスは3年の年月を経て、金十字章の鐐を持った長剣『聖剣エル』をゆっくりと抜剣した。

微細な刃こぼれはおろか、一点の曇りもない鋭い刃が昼下がりの陽光に照らされ、輝く。

一方、まだ数の上では圧倒的に有利なグエインたちは、各々が手にした武器をちらつかせつつ攻撃の機会を窺っていた。

最初はユイリスをたかが女と思っていたからか明らかに油断している彼らだったが、さすがに2人もの仲間を倒されて目の色は変わっていた。グエインなどの素人に毛が生えた程度ではない、実戦を潜り抜けてきた者たちの目だった。

だが、彼らは生涯後悔することになるだろう。

自分たちが一体誰を敵に回し、誰を怒らせてしまったかということ。

砂埃を巻き上げてユイリスが駆けた。

ミラン目がけて走る最中、進路の障害となつた頬に傷のある男の間合いを侵略。

獲物の長剣を反射的に振り上げていた男の懐に侵入すると、最小限の弧を描いてエルを振り切り、男の手首を切り裂く。急所はわざと外しているため深手ではないが、鮮血が飛び散り、彼はたまらず長剣を取り落とす。

ユイリスはそれでも許さない。痛みにも上体を屈めた彼の顎先にエルの柄頭を思い切り叩き込んだ。顎を破壊された男は、仰け反るようになり倒れて沈黙した。

障害を排除したかに見えた彼女だが、気を緩めない。仲間の血飛沫を目にして逆上した男たちの一部が同時に襲いかかってきたのだ。細剣による突きを放ってきた角刈りの男の攻撃を紙一重でかわし、そこへエルを打ち下ろした。一振りで細剣を両断すると、後ろから斬りつけて来ていた気配に対して反転し、エルを切り返して今まさに振り下ろされようとしていた背後からの長剣を弾き飛ばす。

卑怯にも背中から攻撃しようとしていた狐目の男は獲物を失い驚愕の色に表情を染めたが、何の免罪符にもならない。長靴を振り上げ、ユイリスは狐目の腹に強烈な蹴りを突き刺した。吹き飛ばされた男は崖から転がり落ちる岩石のように大地に弾かれながら大地を転がり、動かなくなつた。

続けて、細剣を折られた角刈りの男だ。彼は使えなくなつた獲物を潔く放り捨てると、後ろ腰から補助武装の小剣を抜き放ち、幻惑させるかのごとく刃を振り回していた。

冷静にその切先を見極めると、強烈なエルの一撃を見舞わせる。切先に対し、エルの切先を叩きつけると、小剣の切先が硝子のように砕け散つた。

驚き焦る男を無視し彼の間合いを蹂躪したユイリスは、そのまま肩口から浅目に斬り込んだ。角刈りは金属となめし皮を合わせたような防具を着込んでいたが、エルの前にはまったく意味をなさな

った。紙に刃を入れるかのように、エルの刃先は容易く金属となめし皮を切り裂き、彼の体を傷つけた。致命傷までは与えていないが、やはり派手に鮮血を撒き散らし角刈りはあまりの激痛にその場をのたうち回る。

氣勢に乗って攻撃を仕掛けてこようとしていた顎鬚の男には、エルの切先で威嚇し腰を引かせ、ミランへ向かうことを優先させた。彼女を捕縛していたのは大槌を持った大男。

大男は向かってきたユイリスに対するため、ミランを横に突き飛ばして大槌を振り上げた。

これに、ユイリスは一步も引かず真正面から受けて立った。

振り下ろされた大槌。大男の表情は明らかに勝ち誇っていた。

鈍い音はした。

ただ、それだけだった。

何が起きたかは、一転して信じられない物を見たという大男の表情が雄弁に物語っていた。

大槌はユイリスの真上に正確に振り下ろされていた。

にもかかわらず、彼女は2つの脚でいまだ大地を踏みしめている。大槌は、振り上げたエルの剣腹によつて受け止められていたのだ。通常、剣というものは刃方向よりも剣腹方向に受ける衝撃に対して非常に脆弱だった。剣腹に衝撃を与えられれば、下手をすれば折られてしまうことすらある。

その、剣の弱点とも言える剣腹で大槌の打撃を受け止めることができる長剣など、常識で考えれば皆無に近い。

聖剣エルはそれを事も無げに実現してしまう、地上最強の剣たる一振りだった。

さらに、彼女は片手でそのエルを頭上に掲げ、腕一本で大槌の打撃を支えたのである。

岩をも砕きかねない巨漢の一撃を、女性の、それも剣を振るうことすら奇跡に思える細腕一本で凌いだのだ。

常識というものを根底から覆しえかねない光景に、大男は表情を

激しく引きつらせた。

その彼に、ユイリスはとどめをさした。

「それで？」

涼しい顔をして言つてのけた彼女の言葉に、大男の一撃など露ほども効いていない旨が込められていた。

動揺して二の手を打てない大男に対しても、ユイリスは容赦しなかった。大男の腕力と大槌の重量が載ったエルを軽々と振るつて大槌を打ち払うと、切り返して大男の太もも辺りを軽く風ぐ。

激痛に腰が落ちた大男の側頭に対し、ユイリスはエルの剣腹を叩きつけた。

恐らく目から星が飛び出たに違いない大男は、そのまま白目を剥いて前のめりに倒れた。

「ミランさん、こつち！」

大男を排除したユイリスは、目の前で繰り広げられている驚くべきできごとに目を白黒させているミランの手を取り、そのまま走つた。間一髪、大男に代わつてミランを再び捉えようとしていた鼠顔の手から彼女を救い出すと、次の目標、捕らわれのロイドへと駆ける。ロイドは丸刈りの筋肉男にうつ伏せに組み敷かれていた。

丸刈りは一直線に自身に向かつてくるユイリスに気づき、慌てて立ち上がると腰の長剣を抜こうと手をかけた。

が、抜けない。抜剣することができないのだ。

簡単である。丸刈りが剣を抜く間もなく彼我の間合いを詰めたユイリスは、誘つてきたミランの手を安全のため一端離すと、鋭いエルの突きを放つたのだ。

鋳よりも尖鋭なるエルの切先は、なんと丸刈りの長剣の柄頭に突き刺さつた。つまり、エルによつて柄頭を押さえられてしまったため、抜剣できなくなつてしまつたのである。

「残念だつたわね」

毛先ほども同情などしてないにもかかわらず、決して目は笑わずに微笑みながら憐憫の言葉を手向けるユイリス。

次の瞬間、彼女の腕が翻り、なんと長剣の柄をつかんだ男の手と鐔との間を縫ってエルを叩きつけ、柄と剣身を綺麗に分断してしまったのだ。

もはや剣を完全に抜くことができなくなった丸刈りは、見かけによらず情けない悲鳴を上げ、背中を向けて逃げ出した。

しかし、丸刈りにとってさらに運の悪いことに、逃げた先にはあのウルゼツクの姿が。

後のことは彼に任せ、ユイリスは直ちに攻撃を受けても対処できるよう周囲を警戒しながらロイドの傍にしゃがみ込んだ。

「ロイドさん、大丈夫ですか」

声をかけると、弱々しいながら彼は頷いた。殴打されたためか口から血を流していたが、口腔内を切ったためか内臓を損傷したからではなさそうだった。

「それにしても、ユイリスよ。お前さんはいいじゃない」

「細かい話は後で。お2人とも今は安全なところ、レイルたちを保護しているあの男の庇護に入って下さい。信頼できる、凄腕の男です」

顎をしゃくってウルゼツクの方を示す。丁度、あの丸刈りの男を鞘つきの長剣で打ち倒していた彼の姿が目飛び込んでくる。

「ほらね。ですから急いで」

ミランの手を借りて起き上がったロイドは再び頷き、気をつけてな、とユイリスに声をかけると妻とともにウルゼツクの元へと向かって行った。

これで全員を救出した。後顧の憂いなく、残りのならず者どもを叩きのめせる。

当初の予定からは大幅に状況が変わってしまったからだろう。彼らの表情には戸惑いと焦りの色が一樣にありありと浮かんでいる。

それでも許さない。

彼らに絶対的な『恐怖』を植えつけるまでは。

ユイリスならばこの状況もなんとかしてくれるかもしれない。  
レイルが感じていた直感のようなものは、まだ半ばほどではある  
が実現していた。

抜剣した彼女は、4人もの手練の男たちを瞬く間のうちに大地に  
沈めたのである。

その剣術は見ていて背筋が凍りつくほど恐ろしく洗練されたもの  
だった。

まだ見習い剣士程度のレイルでも分かる。

神業のような体捌きと、圧倒的な神速に加え想像を絶する破壊力  
を伴った攻撃はもはや人間技ではなく、絶対的に数的不利な状態で  
あつても微塵も揺らぐことはなかった。

さらに彼女は、極力敵に同時に攻撃させず、万が一同時に襲われ  
ても対処できるよう常に敵全体に気を配って戦闘を組み立てていた。  
一対多数で戦う際のお手本のような戦いを行っていたのである。

とどめは彼女のあの長剣だ。信じられないほどの切れ味を見せつ  
けているだけでも驚きなのだが、あれだけ酷使した使い方をしてい  
るにもかかわらず、いまだ齒こぼれ1つ起こした様子がないのはも  
はや常軌を逸していると言えない

これが本当のユイリスの力。その片鱗を既に垣間見ていたとはい  
え、レイルはその凄まじさに驚嘆を禁じえなかった。

全力を出し尽くしているわけではないだろう。彼女の真の実力は  
もっと遙か高みで発揮されるに違いない。

ただ、それでも彼女自身真剣を打ち振るう実戦を行っているのだ。  
その力を存分に活かしていることもまた、間違いのないことだった。  
あまりにも鮮烈で衝撃的なユイリスの力に、レイルは引き込まれ  
るように見入っていた。

だからこそ、彼女の攻撃から逃げ出した丸刈りの男がこちらに向

かつてきた際、反応が遅れてしまったのもいた仕方のないことだった。

男は逃げ出してはいるが、敵には違いない。回避しようにも対応が遅れてしまったため間に合わず、武器もない。そもそも、暴行を受けた傷のせいで体を自由に動かせないのだ。

レイルの背筋に戦慄が走った。

その時、前に出る黒い影。

ウルゼツクだった。

黒いマントを翻し、腰から鞘ごと剣を抜き放った彼は、混乱状態に陥り盲目的にこちらへ一直線に向かってきた丸刈りを一撃で叩き伏せた。

肩口に重い打撃を受けて膝を着いた男は、鼻と口から血を流しながら苦悶に呻いた。

「あいつは、あの紋章は、まさか、まさか」

激痛によるものだけでなく、明らかに恐怖にからくる要因で体を小刻みに震わせている丸刈り。

ウルゼツクは彼の鼻先に鞘先を突きつけ、詰問した。

「貴様、知っているのか」

「お、俺はフレアミス戦争で帝国兵士として戦っていたんだ。わ、忘れもしねえよ、あの、あの紋章」

「そうか、貴様らにしてみれば『恐怖と死の紋章』だものな。見間違いないぞ。彼女が着けるあの紋章　いや、『隊章』は、かつてフレアミス戦争で多大な功績を残した、エウロニア史上最強の剣士集団『ハーキュリー隊』のものだよ」

丸刈りから目を離し、彼はいまだ剣を打ち振るっている乙女に目を向けた。

「そして、彼のハーキュリー隊隊長にして、フレアミス戦争を終結に導いた『フレアミスの聖女』と謳われる人物は、同時に前剣聖『イスカム・スカラー』から剣聖号とその称号の印である『調和の法環』を受け継いだ現剣聖だ。彼女が振るう長剣『聖剣エル』には、

金十字の紋章を抱いた鎧が設えてある」

ウルゼツクが言わんとしていることに気づいたならず者は、目と口を丸く開いて驚愕の有様を表現すると、肩口を打たれた激痛など吹き飛ばしてしまったかの勢いで情けない悲鳴を上げながら再び逃げだそうとした。

「待て、丸刈り。貴様の相手はこの俺だ」

目にも留まらぬ早業で抜剣したウルゼツクは、丸刈りの鼻先に長剣の切先を突きつけていた。これに丸刈りはどうすることもできず、あらゆる戦意を失ったようでも腰を抜かしてへたり込んでしまっていた。

「いい態度だ。フレアミスの聖女だけでなく、この俺まで敵に回してしまつては命が幾つあつても足りんからな」

大業なことを言つて、満足そうに頷いているウルゼツク。そこらの人間が口にするのであれば法螺か虚勢にしかないが、彼が言うところこれ以上ない事実にしかならない。

彼の見た目は見かけ倒しなどではなく、雷光のような抜剣の鋭さや、隙のない構えを見れば、凄まじい手錬だということはレイルでもわかる。

ウルゼツクの力に感嘆するが、それ以上に驚くべきは華麗に長剣を打ち振るっている師匠のことだ。

今ウルゼツクが語ったことに触発され、以前のリウルゾ亭で彼が語ったことも思い出し、頭の中が混乱しそうになる。

ただ1つ言えることは、『歴史上の人物』を目の前にしているとということだ。

生涯忘れることのできないであろう光景を片時も逃さぬべく、レイルは目を見開き歴史的な戦いを見守るのだった。

残るならず者は5人。

高慢な悪党どもでもさすがに彼我の力の差を認めざるを得なくな



ったのか、各個に攻撃することは止めたようだった。ユイリスを囲むように散らばると、その輪を少しずつ狭めようと動き出した。

小賢しい知恵を働かせようとしたのだろうが、まさに浅薄。

最大で50人を超える敵と1人で対峙したこともある彼女にとって、この程度の包囲はざるにすらならない。

己がいかに矮小な存在であるか。そのことを体で教え込ませるべく、彼女は行動を開始した。

多数の敵を圧倒するには、まず先制するのが第一である。守勢に回れば数的有利を武器に押し込まれてしまう。

第二には、いかに早い段階で敵集団の指揮官を倒すかだ。多数の敵というのは統率され組織的な攻撃力を展開できてこそ最大の威力を発揮する。逆に言えば、集団を統制する指揮官を失えば、下手をするといかに数的戦力があっても単なる烏合の衆に成り果てかねない弱点を孕んでいた。これを回避するため、優れた集団は指揮官が倒れても次席の指揮官が予め決められ、どんな状況にも対応できるようになっている。

とはいえ、今回の場合は数的優位という点だけしか彼らには有利な面はなく、元から烏合の衆であるため、指揮官云々は考えずともよい。

だとすれば、ただ1つ。機先を制するだけのことである。

先に切先で威嚇してやった顎鬚に狙いを定め、神速を飛ばした。自身に向かつてきた彼女の姿を見、顎鬚は慌てて剣を繰り出してくるが無駄な抵抗だった。

1対1で彼女に勝てる可能性を持った人間は2人いたが、1人は彼女が3年前に命がけで辛くも打ち倒し、もう1人は彼女の恩師で病没した前剣聖イスカムである。つまり、この地上で現在、1対1で彼女に勝てる人間は存在していない。

怯えながらも打ち下ろしてきた顎鬚の長剣の軌跡を易々と見切り、最小限の回避だけでかわす。

彼の間合いを制したユイリスは、下方からエルを斬り上げた。

それは顎鬚の長剣を下段から風ぎ、エルの刃はその剣身を切断。折られたのではなく、『切り裂かれた』顎鬚の長剣の刀身は、回転しながら明後日の方向へと飛んでいく。

信じられない光景に、恐怖を顔一面に貼りつける顎鬚。

だが、ユイリスの攻撃はそれで終わったわけではなかった。

殺傷を目的とせずにエルを打ち振るうには間合いが接近しすぎている。ユイリスはエルを使えない代わりに、近間の間合いを逆利用した。斬り込むことで体に乗った速力を、そのまま突き出した膝に乗せ、腹部へと叩き込んだのである。

たまらず嘔吐し、腹を押さえて前のめりになる彼を、ユイリスはまだ容赦しなかった。がら空きの後頭部へエルの柄頭を叩きつけたのである。こうなるともはや立っていることなどできず、顎鬚は夢の世界へと旅立つ他なかった。

「矢だ！ 矢を射れ！」

突然泡食った絶叫が上がる。声からしてグエインなのだろうが、今注意せねばならないのは今の声を受けた相手の方だ。

ならず者の中には弓矢を持った男がいる。彼らの姿を見た時から常に注意を払っており、何度か狙撃されそうにはなったが、彼女の神速が実射はおろか射撃する機会すらつかませなかったのである。

浅薄ながらも攻撃の機会を窺っていたのだらう。何度目かにしてようやく一瞬だけつかんだ機会 誰かを攻撃している最中という他に対応し辛い状態 を、グエインは形振りかまわず利用したに違いなかった。

実際、グエインの声を受けて矢は発射された。そこらのごろつきにしては腕がよく、狙い違わず一直線にユイリスに迫る。

接近戦で勝ち目のない相手に対して弓矢を使う考え方は、1つのやり方としては間違っていない。

ただ、グエインは1つ大きな要素を加えていなかった。

狙った相手がいったい誰なのか、ということ。

即座に反応したユイリスは、自身の頭目がけて飛来した矢に対し

てエルを一閃。この近距離から発射されたそれをなんと叩き落とした。

泡食った弓矢の男は、怯えながら矢筒から矢を取り出し、闇雲に2発、3発と射撃する。

これに対し、ユイリスは大してエルを構えもせず、ほとんど腕の振りだけで2発目も3発目も労せず迎撃していく。しかも、弓矢の男の方へとゆっくり歩み寄りながら。

4発目を男が矢をつがえようとした時には、もはや弓矢の間合いではなかった。

「もう終わり？」

感情のまったくもっていないユイリスの声は、弓矢の男に心底からの恐怖を生み出したのだろう。彼は体を竦ませ、矢をつがえようとしたまま固まってしまっていた。

その彼の目先にエルを突きつける。よほど恐ろしかったのだろう。それだけで、男は黒目を反転させ、さらに失禁して腰を抜かした。

「覚えておくといいわ。私が最低10人以上の敵と同時に戦っている中、気配を殺し近距離の物陰からよほどの匠が作り上げた初速の高い弓で私を狙える。そんな状況でもない限り、私に弓矢は通用しないということを」

意識を失っているためもはや彼の耳には届いていないが、ユイリスは手向けの言葉のように残すと、既に3名まで減少した徒党の残存を見やる。

完成しても包囲網どころかざる以下にしか過ぎず、しかもとうに失敗した彼らの戦術は最後の足掻きを迎えようとしていた。

お飾りにすぎないグエインを除いた2人　鼠顔の男と大きく肥えた男の2人は、示し合わせた初めての有機的な連携を見せようとしているようで、目配せをして頷きあっている。

何を企んでいるかはわからないが、彼らが通ってきた道よりも遙かに険しい茨の道を潜り抜けてきた自負が不安を感じさせない。

警戒しつつ、今度は彼らの出方を待った。

動いたのは鼠顔だった。小さな体躯を活かし、狙いを定めさせない目的か俊敏に移動しながら徐々に接近してくる。

最中、鼠顔は何か光る物を放った。

それは一直線にユイリスへと向かってきた。

彼女は反射的にエルで風ぎ払う。

しかし、そこで彼女はその行動が今回初めての適切ではない対応であることに気づいた。

時既に遅し。

エルの刃が風いだのは、投げナイフとその柄に括りつけられた小さな袋。袋は風がれた衝撃で破れ、中から白い粉が開放されたのである。

投擲されたナイフの勢いがついていたのだ。白い粉はそのまま大きく広がるように展開してユイリスに襲いかかった。

相手は粉である。エルでは防ぎきれない。

ユイリスは咄嗟に両腕を掲げつつ、視界を奪われるのを防ぐために目を閉じた。

なるほど、彼らの目的はこちらの視力を奪い、もって立場の逆転を狙ったのだろう。

卑怯ではあるが、命を奪い合う実戦で使う手としては上策ではある。

しかし、やはり浅薄だった。

本能的に反応して策にはまっただとはいえ、彼女はもつと汚い手を何十回と仕掛けられてきた人物である。これで終わるわけがなかった。

なんと、ユイリスは目を閉じたまま反転し、初めて両の手でエルを構えると反転で生まれた力を利用し、エルを横風ぎに振り切ったのである。

激しい衝撃を両の手に受けながらもエルを決して離さない。

乾いた2つの音が背後からしたのを背に受けながら、彼女はまるで全てが見えているかのように駆け出した。

もちろん、目蓋を下ろした彼女の視力はいまだ皆無だ。

だが、彼女には見えていた。正確に言えば、彼女は感じていたのである。その場に在る全ての者の『気配』を。

視界を潰されて戦闘を継続できなくなるのは普通に考えれば当たり前のことだ。

しかし、彼女は全ての剣士の頂点に立つ『剣聖』なのである。

視界を失っても相手の気配を察知し戦闘を組み立てることなど造作もない。それは、剣の道を究めた者だけが到達できる『心眼』の境地だった。

心の中で警鐘が鳴る。危険な気配が3つ、同時に飛来していた。即座に反応し、ユイリスは鞭を振るうかのように腕をしながらエールを操る。

甲高い音がほとんど同時に3つしたかと思うと、危険な気配は消え去った。

であれば、狙うは駆け出した先にある、小刻みに走り逃げようとしている小さな気配。

ユイリスの神速から、逃れられるわけがなかった。

手を伸ばし、掴みかかる。確かな感触を得ると、彼女は掴んだ物を思い切り横に引き倒した。

『鼠を潰したような』悲鳴がするのと同時に、大地を転がり回る物の音が耳に響いた。

そこで初めて、彼女は目蓋を開いた。

鼠顔が放った白い粉は彼女の双眸を害してはいなかったのである。咄嗟にかざした両腕と、すぐに目蓋を閉じた行動が彼女の空色の瞳を守ったのである。

ただ、あの手の粉末は一時的に空中に滞留するため、効果が及ぶ範囲外へ到達するまで彼女はあえて目を閉じて戦っていたのだった。それは、彼女が様々な体験を重ねることで培った経験の賜物である。『心眼』により大体のことは把握しているが、視界が戻った今、あらためて確認してみると感じた通りの現実がそこにはあった。

白い粉を受けてから最初に対処したのは、後ろから巨大な何かが迫ったからだ。

それは両手で抱えなければ持ち上げられないほどの石だった。鼠顔が彼女の目を潰し、そこに大きく肥えた男が道端から拾ってきた石を投げつけるという連携だったのだろう。

並みの人間であればそこで終わりだろうが、ユイリスはその策を見事に噛み破った。

襲いかかってきた石を、反転した余勢を最大限活用してエルにて両断。粉碎ではなく綺麗に切断された石は、1つから2つの塊となった。

直後に響いた乾いた音と、離れて転がっている2つの石がいい証拠である。

次に訪れた危険は、3つの気配。それは泡食った鼠顔が苦し紛れに放った投げナイフである。いずれも迎撃されて大地に転がっていた。

最後に捉えた気配は、鼠顔そのもの。逃げる彼の襟首を掴み、投げ飛ばしたのである。

結果、彼女の恐ろしいほどの力に投げられた彼は派手に大地を転がり、今は静かになっていた。

彼らの最後のあがきはこれで完全に失敗した。

今や残るのは大きく肥えた男とグエインのみ。他のならず者は全てが沈黙するかあるいは戦意を喪失している。

テルミト亭前の小広場にはあたかも戦場の跡のような光景が広がっていた。

「さて。グエイン以外で残ったのはその彼だけど、どうする、まだ続ける？ 私は別にかまわないけど」

上体にかかっていた白い粉を軽く叩き落しながら、ユイリスは大きく肥えた男を見やる。

まさかこのような結果になるとは思っていなかったのだろう。予備の石を抱えていた彼は、そのまま呆然と棒立ちになっていた。

が、声をかけられたことに気づいた彼は、慌てて石を放り投げ、さらに腰から下げた長剣や懐に隠し持ったナイフまでも次々と投げ捨てひざまずくと、両手を挙げて降伏の意を露にしつつ激しく首を横に振っていた。

であれば、残るはただ1人。

ユイリスは彼の方へと向き直ると、ゆっくりと歩き出す。

「や、やめろ。く、来るな」

万全と思われた策を見事に粉碎され、仲間を全て撃破されたゲエイン。彼は今にも泣き出しそうな顔をしながら後退ろうとしていた。だが、恐怖が体の自由を奪っているのだろう。実質的にはほとんど後退つてはおらず、拳句、脚をもつれさせて尻餅をついてしまう。その彼に対し激しい怒りを浮かべるわけでも、かといって嘲笑を投げかけるわけでもなく、ただただ冷め切った表情のまま近づいていくユイリス。

何本もの剣を切断し、果ては石までも両断したにもかかわらず、刃こぼれ1つない抜き身の聖剣エルを無造作にぶら下げながら無表情で歩み寄っていくのである。彼の心情を考えると、今すぐにも現実から逃避したいことだろう。

残念ながら逃げ出すことはできない。彼は彼が起こした罪に対する罰を負わねばならないのだから。

もはや恐ろしさで何も言葉を発することができなくなったのか、口元を戦慄かせているだけのゲエインの傍までやってきたユイリスは、彼を見下ろした。

「お仲間はもういない。後は貴方と私だけ。1対1で決闘するのもよし、でなければ2つに1つ。ただし、私に向かってくるのならば全ての禍根を断つためにももう手加減はしない。命を捨てる覚悟で剣を握ることね」

押し殺した声でそう告げると、言葉を発することのできない彼は陸に打ち上げられた魚のように口を何度も開閉していたが、無意識的に握り締めていた長剣をやがて慌てて放り捨て、逆らう意思はな

い旨を表明していた。

決闘ではない選択をした彼ではあるが、そこでユイリスの追及が終わるかと言えばそれはまた別の話である。

必死に無抵抗な様を表しているゲインの素振りを無視するかのよう、ユイリスは身を屈めると、彼の胸倉を掴んでそのまま激しく押し倒した。

男のくせに情けない悲鳴を上げた彼の哀願など無視し、彼女は逆手に持ち替えたエルを翻すとそのまま首筋に向かって鋭い突きを放った。

一瞬、誰もが彼のことを刺し殺したと思ったことだろう。

聖剣エルはゲインの喉元を刺し貫いて      いなかった。

首筋をかすめたエルは、彼の襟元を貫通し、服を大地に縫いつけただけだった。

だが、その刃はわずかに彼の首の皮一枚を切り裂き、血が滴り出している。

長剣の衝撃と首筋の痛みに、ゲインはこれまでで最も顔を引きつらせ、心底から恐怖を感じている有様を露呈していた。

ユイリスは彼に対し、ありったけの声を振り絞り、サイレアに来てから口にしたことのない激しい口調で言い放つ。

「いいかゲイン！ これは最後の警告だ！ 今度レイルやレイルの縁者の前に姿を現し彼らを害したら、生きたまま少しずつ肉片に解体し、魚の餌にしてやる！」

半分は脅しではあるが、もう半分は本気で怒り狂っていたからこそ出た言葉だった。彼がこの警告をも反故にするようなことがあれば、次は本当に容赦するつもりはない。

その彼女の凄まじい気迫と殺気を全身で感じたからか、ゲインは焦点が定まらなくなった双眸を宙に向けたまま全身を小刻みに震わせている。いつの間にか彼の股間には濡れた染みができ、やがて地面にもその染みを広げていた。

後にも先にも、彼がこれほどの恐ろしさを感じることはないだろ



う。だからこそ、彼の心には一生焼けつくに違いない。今日という日に受けた、本当の恐怖を。

生涯ユイリスの影に怯え続けなければならないのはある意味哀れではあるが、それは身から出た錆、自ら積み上げた悪業の為せることである。自分で自分の首を絞めた愚か者に同情する言われはない。「人生をまっとうしたいのならば、己の身の程を知って慎ましく生きていくことね」

立ち上がったユイリスはエルを引き抜くと、一転静かな口調に戻り、最後にそう残した。

これで全てが終わった。

激しい戦いを潜り抜けたにもかかわらず輝きを一切落としていない聖剣エルを白き鞘の内へと納め、踵を返した。

ほんの少しの静寂の後、それまで息を凝らしてことの趨勢を見守っていた群衆からの大きな喝采と、鳴り響く拍手が巻き起こる。

大歓声の中、ユイリスは悠然と歩を進めた。

守り通した、彼女の大切な人々のもとに。

ユイリスの筆舌し難いほどの壮絶な戦いぶりを見守っている最中、レイルは自分がいつの間にかに拳を強く握り締めていたことに気づいた。

それでも不安や焦りはまるでなかった。

それはそうだ。彼の師匠はエウロニア最強の剣士たる称号を持つ人物だったのだから。

その肩書きを体現するかのように、圧倒的な力でゲインらを徹底的にねじ伏せたユイリス。首謀者たるゲインはさすがに少し可哀相になるほど彼女に精神的に痛めつけられていたが、そうだったのは自ら種を蒔いたからである。

散々卑怯な手を使われたものの、気持ち的にやるせない思いは既がない。鬱屈した思いは、もう十分にユイリスが晴らしてくれたの

だから。

にわかに歓声が上がった。

骨の髄までグエインを懲らしめたユイリスが立ち上がり、踵を返してこちらへ戻ってきたからである。

ロイドやミランはもちろん、ミスリイ、果ては遠巻きに息を呑んでこの次第を見守っていた群衆からも上がった大歓声は、テルミト亭前の小広場全体に広がっていた。

「ただいま」

屈強な男も恐れる冷徹な顔は奥底に引き込み、いつもの温和な面立ちが戻った彼女は、少し茶目つ気を効かせたのかレイルに向かつてそう言って微笑みかけた。

颯爽と戻って来た師匠に目を奪われていたレイルは、よもやまっさきに自分へ声かけられるとは思わなかったために泡食った。

「お、おかえりなさい」

ぎこちない返しをするのが精一杯。

「怪我の具合は？」

「だ、大丈夫だ、です」

慌ててしまったのもあるが、ぎこちなさは立て続けに妙に丁寧な言葉遣い呼び起こしてしまう。一番の理由は、やはり今目の前にしている相手が伝説的な人物であるからに他ならなかった。

すると、彼の師匠はほんの少しの間だが、悲しく、寂しそうな顔を覗かせたのだ。

なぜ、と思ったのもつかの間、すぐに何事もなかったかのように、彼女はいつもの咲き誇った花々のような笑顔を見せていた。

「よかった。でもちゃんと手当てしなければ駄目よ、ロイドさんと一緒に。ミランさんと、それからミスリイさん？　お2人は大丈夫ですか？」

しゃがみこんで父親を介抱していた母親と、頬を張られた以外は何もされていなかったために自力で立っていたミスリイにも気を配り、声をかけるユイリス。彼女の言葉に、ミランはにこやかに頷き、

一方のミスリイは自分は大丈夫だが父親のフェンソが心配である旨を明かしていた。

「わかったわ、誰か人をやりましょう。その前にまずロイドさんとレイルを運ばせてね」

丁寧で、あくまで優しいユイリスに、おずおずと頷くミスリイ。

これに、ユイリスはありがとうと応えた。

「ウル、ロイドさんをお願い。私はレイルを連れて行くから」

いつの間にか剣を納め、ユイリスのことを懐かしそうな眼差しで見つめていたウルゼツクは、ああ、と短く答えて彼女の指示に素直に従っていた。

あれほど彼女のことを叱責していたことがまるで嘘のようである。本当に彼女のことを慮っていたからこそ、だということがあらためてよくわかった。

父親がウルゼツクに丁寧に担がれていく様子を見守っていると、レイルの小脇にも優しく腕が回された。ユイリスが腕を回して彼の体を支えたのだ。

「さ、行きましようか。帰る　いいえ、私たちは彼らに勝利したんだから、凱旋ね。胸を張って凱旋しましょう」

そう言ってユイリスは、伝説の人物でも英雄でも聖女でもない、初めて出会った時のままの、清楚で気高い無垢なる美しいままの微笑みを湛えていた。

レイルは、応えた。殴られ、頬は腫れ上がってはいたが、彼女と出会った頃とは見違えるような精悍な表情で小さく頷いて。

とめどない喝采と鳴り止まない拍手の凱旋門をくぐりながら、レイルたちはテルミト亭へと凱旋した。

彼が師匠と肩を並べてテルミト亭の門戸をくぐったのは、それが最後となった。

## ゝ 終 幕 ゝ

うつすらと朝靄がかかっているサイレアの町。

早朝にもかかわらず、テルミト亭界隈にはいつたいどこから集まってきたのかと思える数の人々が集まっていた。

それはひとえにユイリスのことがあったからである。

彼女がファルアリア王国の隣国フレアミスを今の連合評議国へと生まれ変わらせた『救国の聖女』であることはまたたく間にサイレア中に知れ渡り、昨日からひっきりなしに人々が押し寄せていたのだ。

国を救うという奇跡を起こした聖女の姿をその目に焼きつけ、あわよくば加護にあやかりたい者たちがほとんどで、その人の波は絶えることはなかった。

おかげでテルミト亭はまともに営業できなくなったが、店主たるロイドが負傷して満足に動けないのでどのみち店は閉めざるを得なかった。

「それにしても凄い人だなあ。こんな時間から何考えてるんだろう」  
店に誰も入れないようにするため、昨日から交代で店の玄関を見張り、さらに今は店前に無理やり確保した空間を再び占拠されないよう見張っていたレイルは、何度目かの感嘆の声を漏らした。

「あら、フレアミス戦争後に行われた建国式典では隊長見たさにフレアミス中の人が集まったかと思うぐらいだったんですよ」

異論を挟んだのは、彼の隣で2頭の馬の手綱を持ち、主を待つ人物だった。

ステラと名乗った、まだどこかあどけなさの残る二十歳前ぐらいの女性で、ユイリスと同じ亜麻色の髪を背中に流している。髪の色以外にも藍色の瞳や背格好自体がユイリスに似ていたが、面立ちはさすがに似ておらず、ユイリスほど目を見張る美人ではなかったが可愛らしい容貌は至極魅力的ではあった。

一見、少し品のよい年頃の娘に見える彼女だが、身近な例のユイリスがそうであつたように彼女もまたただ者ではなかつた。ステラもまた、ユイリス同様な戦闘服に身を包み、その袖ではあの紋章  
ハーキュリー隊隊章が存在感を放っていたのだから。

無用な暴力を振るいレイルたちに怪我を負わせたことと町中で騒乱を起こした罪でグエイン一党全員がサイレアの自衛団に捕縛された後の昨晚、彼女はサイレアにやってきた。ウルゼック同様ユイリスを探して、ではあつたが、ウルゼックが彼女を求めたのとは異なる理由で。

多くは語らなかつたが、ステラはほんの1月前まではハーキュリー隊解隊後もユイリスと行動を共にしていたそうだ。

その後、ステラはもう1人の仲間と別行動を取り、ファルアリア王国と神聖ラミニュラン帝国との国境近辺で調査活動を行っていたのだが、合流予定の時期になつてもユイリスが現れないために国境に仲間を残し、1人彼女を探索に出た結果ようやくサイレアで彼女を見つけたということだつた。

ステラはユイリスの下で先のフレアミス戦争を駆け抜けた元従騎士で、弓の専門家だと言う。だからユイリスのことを隊長と呼んでいるのだろうが、血で血を洗う戦乱を潜り抜けてきたようには見えない面立ちは意外ではあるものの、ユイリスというあまりにも意外すぎる先例があるのでそれほど驚くまでもない。

もう少し時間さえあればステラのこととも色々聞けたのだろうが、いかせんその余裕はなかつた。

なぜならば、この朝、ステラはユイリスとともにサイレアを旅立つからである。

レイルが直感的に感じたこと　ユイリスとの別れは、やはり現実のものとなつたのだ。

そしてその現実はいよいよもって彼の身に迫りつつあつた。

眠い目を擦っていた群集からにわかに歓声が上がる。

一瞬目を丸くしたものの、彼らがなぜそう反応したのか気づき、

レイルはテルミト亭の玄関口へと振り返った。

ウルゼツク、ロイド、ミランを従え、店内から姿を現したのは皆が待ちかねた人物、ユイリス・レンフィアだった。

彼女の姿を見た人々は、歓声から感嘆の声へと変容させる。ユイリスは完全にかつての姿を取り戻していたのだから。

昨日まどっていた戦闘服の上に、金色の縁取りがなされ鞘同様の白磁器のような光沢を放つ白亜の軽板金鎧を装備し、左腰には聖剣エル、そして右腰にも白鞘の小剣を下げている。

また、左手には丁度背中一杯が隠れるぐらいの大きさの、軽板金鎧同様の意匠が施された長方盾を持っていた。軽板金鎧の胸の辺りと、盾の表面には金色の十字章が燦然と輝きを放っている。

あれが、昨晚ウルゼツクが教えてくれたユイリスの聖なる装備の全て。フレアミス大戦後、彼女が故郷の大地に封じてきた武具をこれからのためにとウルゼツクが運んできた、かつての彼女を支えた伝説の武装だった。

聖鎧ルクトテクター、聖小剣アリエル、聖盾ファーマランツ。噓か誠か天の国の金属でできているというそれらは、圧倒的な存在感を放っていた。

聖剣エルの凄まじいまでの破壊力を見せつけられた今となっては、彼女の聖なる装備全てが唯一無二の存在であることは容易に窺える。全ての装備を身につけた彼女を目にするのはレイルも初めてのため、彼も目を見開いて見入ってしまう。

勇壮なる姿のユイリスは、レイルの両親と別れの挨拶を交わし始めていた。

「それではロイドさん、ミランさん。短い間でしたが本当にお世話になりました。このご恩は一生忘れません」

言って頭を下げるユイリス。するとロイドとミランは頭を振って応えた。

「よしてくれよ、ユイリス。俺たちはお前さんに命を救ってもらったんだぜ？ 恩人どころか天下の聖女様に頭下げさせるなんざ末代

までの恥になっちまうよ」

「そうよ。貴女がいなかったらどんなことになっていたか。みなを助けてくれて本当にありがとう」

今度はロイドとミランが頭を下げる番だった。ユイリスは慌てた様子で、

「止めてくださよ、お2人とも。私は当然のことをしたまでです」と2人を制止していたが、彼女はすぐに何かひらめいたようで表情を一変させる。

「わかりました。なら、それではお互い様、貸し借りなしということとでいかがですか？」

茶目つ気たつぷりに微笑むユイリスに、ロイドとミランは目を丸くして顔を見合わせ、一本取られたという風に破顔していた。

レイルの両親との別れを済ませた彼女は、続けてウルゼツクと対面した。

「ウルも色々ありがとう。本当に助かった」

「困った時はなんとやらだ、気にするな。それに、不出来な妹弟子を持つ身としては、しっかり面倒を見んと亡き戦師に申し訳が立たんからな」

相変わらずの辛口ぶりだが、ウルゼツクの表情はとても穏やかだった。ユイリスも彼の表面的な言い回しなどまったく気にしていない様子で、名残惜しそうな雰囲気を感じていた。

「また、いつかどこかで」

「ああ。また、いつか」

最後に短く言葉を交わした2人。それ以上語らずともわかり合っている様が窺える。レイルは、そんな2人が羨ましく思えた。

世話になった人々との別れを済ませたユイリスは、最後に残った1人へと空色の瞳を向けた。

いつの間にかに彼女に見つめられていたレイルは我に返って驚くが、彼女は黙ってこちらへ双眸を向けているだけだ。

と、何かを思いついたのか、その身なりにそぐわないほどの愛ら

しい微笑みを浮かべると、早足で自らの馬の元へと向かうユイリス。聖盾を馬の側面に括りつけると勢いよく身を翻らせて馬上の人となる。

レイルを見下ろし、彼女は言った。

「途中まで見送ってくれるわよね？」

悪戯っぽく笑みを浮かべた彼女の、なんとも『らしい』発言に一拍目をしばたかせたものの、彼はすぐに破顔した。

「見送るよ。そうしないと、ユイリスが寂しくて泣いちゃうから」

茶目っ気には軽口で応える。そういう、これまで通りの態度で応えたレイル。

昨日、グエインたちを叩きのめした後のユイリスに、彼は一時妙にかしこまった態度をとってしまった。それに対し、ユイリスは一瞬寂しそうな表情を見せた。

その場はわからなかったレイルだが、その晩に省みて気づいたのだ。なぜユイリスが微細な変化を見せたのか、を。

これまで自然に接していた自分が急に英雄や偉人に相對したような態度を取ったからこそ、彼女は寂しそうな表情を見せた。そのことに気づいたからこそ、慌てていたからというのもあるが自らが取ってしまった反応を改めたのである。

もし自分が同じように急によそしい態度を取られたらやはり寂しいに違いない。

だから彼は、師匠がフレアミスの聖女だとしても、ユイリスはユイリスと割り切ることと普通に接する態度を取り戻したのだった。

鋭いユイリスのことだ。そのことに気づいてくれたのだらう。彼女はとても嬉しそうな大輪の笑顔を咲かせ、

「失礼ね。でも、今日はレイルを立ててそういうことにしておいてあげる」

と、うそぶいていた。

その温かいやりとりがたまらなく嬉しい。やはり彼女は、聖女であるうが剣聖であるうが、ユイリス＝レンフィアそれ以上でもそれ



以下でもないのだ。

レイルは、噴出しながらも笑顔で頷くと、彼女の後ろへと飛び乗った。

「それではみなさん、どうぞお元気で」

軽く会釈をして挨拶をすると、ユイリスは馬を前へと進ませた。

「お前さんも達者でな」

「またサイレアに来るんだよ」

レイルの両親の手向けの言葉とウルゼツクの無言の見送りを背に受けつつ、同じく騎乗し続くステラを従え、ユイリスは歓声を上げる群衆の間を抜けて馬を走らせる。

レイルは、後ほんの少しだけユイリスと時間を共有できる嬉しさに喜びつつ、彼女の小さくも大きい背中を見て、あらためて自身の師匠が稀代の英雄であることを感じるのだった。

サイレアの町中を抜け、たどり着いたのはギョーム河岸。

厳しい修練を毎日重ねた場所であり、なによりレイルが初めてユイリスと見えた、あの河原だった。

馬上から降りると、同じく下馬したステラがユイリスの馬の手綱も引き、気を利かせて少し離れた所にある木立の下へと離れて行った。

「あれからもう何か月も経った気がするけど、まだほんの半月位しか経ってないのよね。時の流れって、本当に早いわ」

修練で何度も転げ回った河べりに並んでゆったりと腰を下ろし、雄大なギョーム河の水面を並んで見つめていると、ユイリスがしみじみと感じ入るような口調で言った。

確かにその通りだ。何か月どころか、もう何年もユイリスと過ごしてきたかのような思いにとらわれることがある。それはこの半月、本当に毎日密度が濃く、充実していたことの証でもあった。

それも、今日で終わる。急に寂しさが込み上げてくるがなんとか

押し留めると、ユイリスがその美しい双眸を真っ直ぐと向けてきた。真剣な眼差しだった。

「ねえ、レイル。貴方はこれからどうするの？ 騎士になりたいって言っていたのは、そもそもグエインを倒すことが目的だったのよね。そのグエインはもう倒してしまっただし、目的を達成してしまっただけには、もう騎士を目指す必要はなくなってしまったでしょう？」

彼女の指摘は的を得ていた。

確かに騎士になりたい。すなわち、力が欲しかったというのはグエインを倒しミスリイを守るための方便だった。

力を得て、グエインを完膚なきまでに倒し、ミスリイへの脅威も取り除いた今、騎士を目指すという方便は形骸化している。

ではいったいこれからどうするのか。その彼女の問いかけに、既にレイルは明確な答えを自ら導き出していた。

「俺は、ユイリスのような剣士を目指したい」

ユイリスから視線を外し、再びギョーム大河を見やりながら続ける。

「思ったんだ。グエインに1対1では勝てたけど、あいつが仲間を引き連れてやってきたら結局ミスリイを守ることができなかった。でも、修練を重ねて強くなったら、そんなことは防げるだろうし、なによりもつと沢山の困っている人や酷い目に合っている人を助けられるんじゃないかって」

話の間を取るために一息置き、レイルは言った。

「ユイリスみたいに、自分たちのことだけじゃなく、多くの人たちのことを考えて、多くの人を救いたい。俺に、その力があるならそれはこれまでの自分とこれからの自分の行く末を真剣に考えて出した結論だった。」

考えた時間はごく短くはあるものの、ここしばらくの時間を顧みて、さらにユイリスという人物の功績をこの目で見たことから、たどり着いた道。

決して楽な道ではないだろう。

だが、この道を選んだことに迷いはない。

決意の炎を胸に燃やし、レイルはあらためてユイリスを見やる。  
すると

「そうね。貴方には素質があるわ、強い剣士になれる。でなければ、一週間とはいえ私の修練にはついて来られなかったろうし、なにによりこの短い期間でグェインに勝てるまでにはなれなかったわ」

「それじゃあ」

ユイリスの肯定的な物言いに、レイルは表情を輝かせる。彼女も頷いて応えていた。

「確かに、貴方にはこの地でお父様のお仕事を継いで、平和に暮らして欲しいという思いはあるわ。でも、貴方ももう大人だもの。考えに考え抜いて出した答えがそうであるなら、私が異論を挟む余地はないから。貴方の考えを尊重することが、貴方のための思うことに繋がる。私はそう思っているわ」

「反対されると思ってたから、素直に嬉しいな」

「それはなによりだけど、このことはちゃんとご両親に相談するのよ。その上で自分の意志を貫き通すならいいけど、それをせずに前へ進むことには反対だからね」

「もちろんさ。父さん母さんとはしっかり話し合って、わかってもらうよ」

笑顔で話した彼の言葉を、彼女は黙って受け止め、黙って頷いていた。

しばしの間の後、2人は互いに指図し合ったわけでもなく、ほとんど同時に立ち上がり、向き合った。

「最後にレイル。貴方に覚えておいて欲しいことがあるの」

これまでで最も真剣な眼差しを向けてきた彼女は、ゆっくりと語り始めた。

「剣は人を殺すための武器。剣術はいかにして人を殺すか、そのことだけを追及した方法。それは絶対普遍の原理原則。どこまで行っ

てもその根源的な要素は変わらないわ。私から貴方が学んだ技術の根底に息づくものは、あくまで敵を殺すためのものだということ

それを決して忘れないで」

それは、レイルが踏み出そうとしている道に必ずつきまとう真理。当然のことながらレイルもわかっていた。

その上で、彼は自ら道を選んだのである。

彼もまた、これまでで最も真摯な表情を浮かべ、わかった、と応えた。

納得したのか、ユイリスは表情を緩めるとレイルの肩に手を置いて続ける。

「でもね、力というものはその使い方で多くの人を救えるというの  
もまた確かなことなの。正道を踏み外した力は単なる暴力にしか過ぎない。けれど、力を持たずに正道を歩いても、時には正しいことを為せないこともある。昨日のグエインたちとのいざこざが良い一例。相手を殺すことなく、力があればねじ伏せて人を助けることができる。逆にあの時、私に力がなければ、みんなを助けることはできなかった」

もう片方の肩にも手を載せ、真っ直ぐに空色の双眸を向けてきたユイリスは、穏やかな微笑みを浮かべていた。

「使い方で人を傷つけることも、助けることもある　力というものは両極の意味を併せ持っているということ。それが私から貴方への、『最後の教え』よ」

最後の教え　その言葉が胸に迫る。先ほど押し留めたはずの寂しさがぶり返し、込み上げてくる。

気づかれないよう、なんとか踏みとどまる。肝に銘じておくよ、と答えるのが精一杯ではあったが。

それでもユイリスは満足したようで、両肩に置いていた手を離すと、今度は両手を腰にあてて妙にしゃちほこばった。

「私からは以上。後はまあ、ウルゼックに託してきたから、貴方のことを」

沈みかけていたので、危うく聞き逃すところだった。

ウルゼツク？ 託してきた？ そんな話は聞いていない。一転、レイルは呆けた顔をしてしまう。

「そんな顔しないの。彼は私たちの隊に匹敵しうる存在である鷹剣士結社の元筆頭剣士で、話したと思うけど私の兄弟子。貴方もわかつていると思うけど、とても信頼のおける人物よ。多少、辛辣な部分はあられるけれど」

それが問題なのだが、彼女は平気な顔をしている。

だが、力を抜いたような優しい表情へとすぐに変化を見せたことで、レイルは気づいた。

彼が落ち込みつつあるのをユイリスは察し、元気づけるためにもしゃちほこぼったり軽口を混ぜた話をしたりしているということを彼が気づいたことまで察しているのか、ユイリスは優しい顔のまま柔らかな語り口で続けていた。

「だから、安心して彼の教えに従えばいい。私の剣は私にしか使えない術だから、私よりも長年先生に師事を仰いだ彼からならもっと多くのことを学べると思うわ」

満面の笑顔を浮かべるユイリス。それが、彼女なりの別れの挨拶なのだろう。

「そろそろ行かなくちゃ」

そう言って木立の方に向かって口笛を吹く。

甲高い音に反応したステラは、手を振って応えたと2頭の馬を引き連れてこちらへと戻ってきた。

鎧に足をかけ、軽板金鎧を身につけた上に2振りの剣で武装していることなどまるで感じさせないかのようにユイリスは身を翻して騎乗した。

「そうだ。貴方に話していないことが最後に1つだけあったわ」

藪から棒に一体何を、と首を傾げるレイル。

「私の本当の名前のこと」

「本当の、名前？」

「そう。ユイリス＝レンフィアというのは、旅を続ける上で名乗っていたあくまで仮の名前なの。一部で私の名前、あまりに有名になりすぎてしまったから。ずっと黙っていてごめんなさいね」

申し訳なさそうに詫びるユイリスだが、これまで沢山のことを秘密にしていた彼女のことである。いまさら1つ2つ何か出てきても驚くことではない。

そのことを伝えると、ユイリスは、違ういわね、と小さく苦笑いした。

「私の名前、本当の名前はね」

真の名前を口にしようとしているユイリスを、レイルは軽く手を挙げて制止する。

「いいや、やっぱり。聞かないでおく。だって、俺にとって、ユイリスはユイリスだもの」

それが心の底からの思い。

様々な事情のある彼女のことである。仮の名前を名乗ることもあるだろう。

ただ、ユイリス＝レンフィアという名前は、レイルにとっては唯一無二のものだ。彼が助け、また彼自身を助けてくれた女性は、彼にとってはやはりユイリス＝レンフィアその人なのである。

丁重に彼女の申し出を断った彼へ、ユイリスはとても嬉しそうな眼差しを向けていた。

「自分の力でもっと色々なことを見聞きして、その上でユイリスのことでも知ることができたら、いつかきつと知ることができるに違いないよ。俺はそう信じてる」

「信じる　いい言葉よね。私も信じてる。いつかきつと、私の名前を貴方が知ってくれることを」

しばし見詰め合い、2人は『信じる心』で結ばれていることを確認し合う。

黙って頷くユイリス。

呼応して、レイルも何も言わずに頷いた。

別れが、やってきた。

「元気でね。いつかきつと、また会いましょう」

そう言っただけ手を振り、彼女は馬を前へと進ませた。彼女の後方にはこちらへと会釈をしたステラが続く。

「ユイリスこそ、あんまり無茶しちゃ駄目だよ！」

ゆっくりとはあるが次第に遠ざかっていく恩師の背中を、手を振って見送る。これに、ユイリスは再び手を挙げて応えていた。

そしてレイルは、湧き出しそうになる涙を堪えながら、腰を折って深々と頭を下げた。

「お世話になりました！　ありがとうございました、先生！」

それは、初めて彼が師匠のことを『先生』と呼んだ瞬間であった。こうして、レイル「フンフル」は、永遠の恩師ユイリス「レンフイア」と別れの時を迎えた。

彼が素質を開花させ剣士として大成し、彼女が復活させたエウロニア史上最強の剣士隊へ馳せ参じるのは、もう少し未来の物語である。

剣と勇気を、与えてください　完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8748f/>

---

剣と勇気を、与えてください

2010年10月8日14時45分発行